

---

# しらゆり

佐倉アヤキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しらゆり

### 【Nコード】

N52870

### 【作者名】

佐倉アヤキ

### 【あらすじ】

下級貴族の次女として生まれたアルカナは、なぜだか突然王様の甥で、しかも絶世の美青年と名高いピアキ閣下と結婚することに普通ならば喜ばしいシンデレラストーリー。けれどアルカナは知っていた、かの閣下が、二日と待たずさまざまな女性と「お付き合い」していることを。

ラブラブなようでいてそこはかたくブラックな、一応宮廷恋愛小説。基本的にアンハッピー。

## 世界設定（前書き）

本作品は只今連載中の「アテナのリコリス」と同世界観の物語となります。もちろんそちらの作品を未読でも問題なくお読みいただけます。予めご了承ください。

## 世界設定

### 世界設定

#### 【地名】

フアナティライスト…この国の都。”神都”とも呼ばれる、”世界王”陛下のおわすところ。大層な名の土地だが治安は悪く、貴族街の外には広大なスラムが広がっている。

フアナティライスト神殿：世界創設の要にして、この国の政治機関も兼ねた、国の王城。

#### 【信仰】

双子神…この国で信仰されている神。男女の双子神で、互いを思うがゆえに両者とも命を落とした。今は人間に身をやつしていると言われている。

エル教…この国の双子神信仰を、双子神の名にちなんでこう呼ぶ。

#### 【役職】

世界王…この国の王。この世界にはひとつしか国がないと言われているので、世界を束ねる王としてこのような名がついている。現王はシェーロラスディ。エファイン家が代々世襲している。

高等祭司…”世界王”直属の臣下で、実質国を動かす機関は彼らが切り盛りしている。

神の子…国の大都市のひとつであるラトメディアの権力者のこと。

#### 【一族】

ハインント家…ヒロインの生家。ファナティライストの下級貴族で、超がつくお人よしが現当主。  
エファイン家…世界王の一族。そのほかにも色々と秘密があるらしい。

## 登場人物紹介（前書き）

新しいキャラが登場するたびに増えていきます。連載最新話までのネタバレを含みますのでご注意ください。

## 登場人物紹介

### 【メインキャラ】

アルカナ…ヒロイン。下級貴族ハイネント家の次女。お相手いわく「単純で馬鹿」らしいが、本人は自身が頭の回る女だと思っている。刺繍と家事全般が得意。

ピアキイ…世界王の甥。絶世の美青年だが、お相手いわく「手癖も性格もついでに女の趣味も悪い最低野郎」。魔術のスペシャリスト。

### 【ハイネント家】

トロット…アルカナの父。お人よしで口が悪い。

ハノン…アルカナの姉。嗜好きで上品、かつミーハー。政略結婚させられた夫が気に食わない。

トリノ…ハイネント家の使用人。アルカナに対しては遠慮がないが、ものすごくドジ。それが起因してアルカナに弱味を握られている。

### 【エファイン家】

シェーロラスディ…通称シェロ。現世界王。食えない男だが悪い奴ではない。

ケルト…ピアキイの父。ピアキイをアンノに預け、国を捨てる決心をする。

レイン…ピアキイの母。対外的には病気で死亡したことになっている。

### 【シエルテミナ家】

リズセム…シエイルディアの王殿下。愛妻家。シェロとは旧知の仲。ナシャ…リズセムの妻。銀髪に瑠璃の瞳の美少女。

### 【ファナティライスト神殿】

アンノ…ファナティライスト高等祭司のひとり。ピアキイの後見人。  
気さくな親馬鹿。

ファレイア…アンノの娘。目下ピアキイに片思い中。わがまま。

リリマ…ファナティライスト宮殿の女官。

ミュウ…ファナティライスト宮殿の女官。いわゆるツンデレ風味。



## act・1 次女の嫁入り

人生最大の幸運だと思っていた。今じゃ、かつての自分の頬をこれでもかつてほど引っぱたきたいくらいに。  
それでもやつぱり、私はあのひとが好きだというのだから、全くもって不毛この上ない。

”その話”が我がハイネント家に飛び込んだとき、家の者はまさに寝耳に水、上を下への大騒ぎだった。ここ、神都ファナティライストの貴族街、その端も端、平民街との境目くらいにかろうじて建っている館は普段、家そのものが肩身の狭い思いでもしているかのようにここそこそそしているくせに、今日ばかりはそれも例外だった。

ああ、議席の末席しか与えられなくても、当主が呆れるほどのトラブルメーカーでも、長男が平民の娘と駆け落ちしても、我らが双子神はまだこの家を見捨てていなかったのね！涙ながらに叫ぶ母に、アルカナはやや白けた視線を向けた。

そりゃ、父母にとってはいい。だが、アルカナにとっては、胡散臭いことこの上ない話だった。もともと、いくら下級貴族といえど、”貴族”と名のつく家に生まれた時点で、自分に恋愛の自由はないのだと信じていたし、せめて優しい男のもとに嫁げればそれでよかった。それが無理なら商家に行くのもいい。我が家の当主にして、アルカナの父のことだ、あのあんまりにもお人よしの男が、嫁ぎ先の家に理不尽に利用されることのなければ、それで十分なのだ。

だから、許されるものならば、この話は断ったほうがいい。そう、許されるものなら、「王族との結婚」なんて奇妙極まりない話、聞わらないほうが身のためだろう。…王家直々からのこの話を、まし

てお人よしな父が断るはずもないことは重々承知しているが。

アルカナは次女だし、本来ならば長女である姉のハノンよりも高い家柄に嫁ぐことはない。なのに、何故かこの話はアルカナに入ってきた。別に、アルカナは傾国の美女でもなく、むしろ人並みの器量でも及ばないような小娘だったので、この嫁ぎ先はまさに寝耳に水。嬉しさよりも戸惑いのほうが先に立った。

ピアキイ・ケルト・フアナテイライスト。それがアルカナの夫となる男性の名だ。引きこもりで社交界に疎いアルカナでも名前くらいは耳に入ってくる。”世界王”シェーロラスディ陛下の甥だとかで、どここの馬の骨とも知らぬ平民の女との子供らしいが、その顔といい手腕といい、貴族のお嬢さん方が一度は憧れる「いい男」。アルカナとは永久に縁のない存在だ。ついでに、噂によれば非常に女泣かせな性格らしい。どんな性格かは推して量るべし。

そんな男と、結婚。そりゃあアルカナだってまだ16歳。人生のなかで一度くらいは情熱的な恋愛を体験しておきたいが、それこそ一生に一度きりになるかもしれない恋愛体験の相手としてはハードルが高すぎた。

「あら、そう？」

そうして泣きついた先の姉は気楽なものだった。

「ウブで女心のわからない男と比べたら、多少手癖は悪くても、女性慣れしていて美形の殿方のほうがよろしくなくて？私が代わってほしいくらいだわ」

「私だって代われるものなら代わりたいわ！お義兄様のほうがよっぽど私の理想だもの」

ハノンの言うところの「ウブで女心のわからない男」というのは、平たく言えば彼女の夫・ツヴァルクのことだ。のんびりとした柔らかな男性で、アルカナは、この何かにつけて甘い義兄が大好きだった。ハノンは上品に首を傾けた。

「まさか、あのピアキィ殿下…ああ、今は閣下かしら？彼からの求婚をこうまで嫌がる女性がいるとは思わなかったわね」

「彼から」じゃないわ。」彼の後ろ盾から」よ」アルカナは修正した。

「そんなに邪険にするものではないわ」

ハノンはい顔だ。

「いくらピアキィ様が王族の位を返上されて、貴族階級に降格したからといって、彼が世界王の血筋であることに変わりないのだから」

「でも、それだけ人気のあるひとなら、なにも私みたいな小娘を相手にする必要はないんじゃない？」

「ピアキィ閣下たつての願いらしいわよ。出来る限り政治から外れた家がいいのですって」

我が家は政治的価値も薄い弱小一族ということか。否定できないあたりがまた悔しい。アルカナはギリギリと歯軋りして姉にたしなめられた。

「腹をくくりなさいな、アルカナ。どうせお断りはできないのだから」

「……」

アルカナは不貞腐れて憮然とした表情を繕った。一家としてはとてもいい話なのだ。分かっている。王族とつながりを持つことで、父の地位は格段に上がるし、神殿でいい暮らしもできる。おまけに夫は目の保養になるらしいし、恋愛関係云々を置いておけば、アルカナにとっても悪い話ではないはずだった。それでも。

「……」

納得できない。その恋愛云々が、置いておける話ではないから。

双子神は私が嫌いに違いない。

アルカナ・ハイネントは、ピアキィ・ケルト・ファナティリストに、恋をしていた。

先に断っておくが、アルカナとピアキイは知り合いではない。向こうはこちらのことなど知りもしないだろうし、アルカナだって自分の好きな人物が王族だなんて最近まで知らなかった。アルカナは彼への恋慕は、そのうち薄れて消えてしまふの決まっていると思っていたのだ。

初めて彼の姿を見たのは、忘れもしない一年前。太陽に透ける金髪に、細められた綺麗なみかん色の瞳、すらっとした長い脚に腕に大きな手。少し見ただけで火傷しそうな端正な顔立ち。彼はいつも女の子を待っていた。

ハイネント家の向かいには、非常に目立つ赤い屋根の宿があつて、その入り口は一般的な待ち合わせ場所としても利用されている。アルカナの部屋の窓からは、あの宿がよく見えるのだ。午後のお茶の時間になると、窓際のテーブルに着いて、二階から人通りに高みの見物を決め込むのが、アルカナの日課だった。

最初は、随分な美形もいたものね、そのくらいの感想だった。数日置いてやってくる青年のお相手が毎回違うものだから、ふと好奇心から、「今日の女性は栗毛の可愛らしいお嬢様」だとか「あれはもしかして平民の娘かしら」などと書き留めることもあった。

決まってお相手は、アルカナでは足元にも及ばない美しい女性ばかりで、そしてこと貴族の女性は、社交界では高飛車で、同性からの評判がすこぶる悪い者ばかりが揃っていた。あの絶世の美男子も、女の趣味は悪いらしい。

当初はそんな姉譲りのミーハーな根性がきつかけで、彼のことも、それこそ、目の保養くらいにしか考えちゃいなかった。しかし、彼がああの宿に通うようになって半年ほどが経ったとき、唐突に転機はやってきた。

あの時、彼は珍しく、随分長い間待ちぼうけを食らっていた。外はひどい雨が降っていて、青年は傘も差さずにひとり立ち尽くしていた。時々宿の者が出てきては中へ入るよう勧めていたようだが、彼はずっとそこにいた。ひどい天気だったから、きつと相手は家を出ることも叶わなかったのだろう。あの日はアルカナも外出禁止令を出されていた。

あたたかい紅茶を飲みながらじつと彼の様子を観察していると、不意に彼が顔を上げた。太い雨が幾筋も落ちているものだから、彼の姿なんて、道を挟んだ屋敷の二階からはっきりと見えるはずもないのに、彼の無感情なみかん色の瞳にびりりとした。

確かに、目が合ったと思った。

それなのに彼はすぐに顔を背け、女性を待つのをあきらめたのか、雨の中をふらりと去っていった。

あれからだ。あれから、アルカナはともに青年の姿を見ることができなくなった。相変わらず彼の隣には、アルカナでは到底太刀打ちできないような美しい女性が侍っていたし、それ以前に、こうしてこそそと彼を盗み見ることも恥ずかしくて、立ち去る彼の金髪、後姿を眺めるくらいが精々だった。もう一度、あのうつくしいみかん色の瞳をこちらに向けてはくれないかと密かに思う。けれど、そんなものは叶わない恋だとあきらめていた。

なのに、あの青年と自分が、結婚。

信じがたい話だった。できすぎている。胸の奥の奥に秘めて、誰にも打ち明けたことのなかった恋心を、だれかに暴かれた気分だった。アルカナがもう少し夢見がちな少女であれば、とんだ幸運だとか、もしやあの一瞬の視線の交わりで自分が見初められたのかとか、思うところは多くあったのかもしれないが、アルカナはことにつけ

て懐疑的な性格だったので、そう上手くはいかないのだと構えていた。期待するだけ損だ。この人生16年間、アルカナの期待どおりに事が運んだことなど少数だった。

それでも多少、本当に多少だけれど…嬉しいと思ってしまう自分がいることに、アルカナは自らを嘆いた。

## act・2 不本意な邂逅

アルカナとピアキイの顔合わせは午後に控えている。アルカナは気が重かった。父に連れられて、わが国の王城・ファナティライスト神殿にやってきたアルカナは、胃の痛みと格闘しながら、真白い建物を見上げた。

この建物は、世界創設以来、建設されてからも何百年も経っているのに、床も壁も柱も天井も、まるで当時から時間を止めたかのように綻びひとつ見当たらない。建物を保護する呪文がかけられているのだと聞いたことがある。魔術は苦手なのでよくわからない。アルカナは、傷ひとつない白い柱がまぶしくて目を細めた。嫁入り後はこんなきらびやかな場所で生活するのかと思うと、気が遠くなるような心持ちだった。

娘の心境を知ってか知らずか、父はご満悦だった。

「まさか、アルカナが王家に嫁入りとはなあ。結婚しちゃったら、もう僕ともまともに会えなくなるんだらうなあ」

「別に王様との結婚ってわけじゃないんだから、そんなに厳しくもないですよ。まして閣下は王族の位を返上してるんだから」

「いやいや、きつとアルカナはすぐに僕のことなんて忘れて、神殿で楽しく暮らしてしまうのだと思うと…」

「お父様は私をなんだと思ってるのよ！私、そんなに薄情者じゃないわ！」

思わずいきり立つと、父はにんまりした。娘から期待通りの答えを引き出せて満足したらしい。うんうん頷きながら、「そうだよなあ、アルカナは優しい子だもんなあ」と一人ごちている。アルカナは嘆息した。

「ねえ、ピアキイ閣下っていうのはどういう方なの？」

「いい人だよ」

父にかかれば、いかな人物でも「いい人」だろう、内心で突っ込みつつアルカナは次の言葉を待った。彼はお茶目にひとつウインクする。もう若くないのだから、そういう行動は慎んでほしいものだ。

「社交界では色々言われてるみたいだね。少なくとも仕事では…シェーロラスディ世界王陛下に、一番信頼されてるのは彼じゃないかな。まだ二十歳かそこらだけど、もう世界王の懐刀として名を馳せてるんだから凄いものだよ、まったく」

いい夫を持ったね、と言ってくる父になんと返してやろうかと思案したところで、アルカナは首をひねった。

「…二十歳？」

「確かそのくらいだったと思うよ。ん？二十一だったかな？」

驚いた。そんなに年上だとは思っていなかった。屋敷から見える彼の立ち姿は…そりゃあ、彼は背も高くて大人びていたけれど…自分とさして変わりない年齢だと思っていたから。

きつと童顔なんだわ。アルカナはドキリとした自分の胸を押さえた。あの顔で、二十歳で、しかも世界王陛下の懐刀。ますます彼の相手として自分が選ばれたことが解せなかった。しかし、父にその理由を聞くことは憚られる。父のことだから悪いことは言わないだろうが、悲しい現実までまざまざと見せ付けられたらと思うと口が開かない。

真っ白な廊下を黙して歩いていると、ふと父が足を止めた。彼は右手に広がる庭園を指して、アルカナを見下ろした。

「ほら、あそこにいらっしやるのが閣下だよ。顔は、肖像画を見せたから知ってるだろう？」

陽の光がやさしく降り注ぐ緑豊かな庭園に、彼はいた。白い噴水の枠に腰掛けて、細くて長い脚を組んで、水を魔術で弄びながら物



思いにふけっていた。噴水から糸を引くように伸びた水は、彼の指先まで続いていて、時折彼の緩慢な指の動きにあわせてひらりと舞う。ひらり、ひらり。なんと麗しい光景かと、アルカナは息をも止めて彼と水の動きに見入った。

ピアキイがくると、水の糸を指に巻きつけたところで、彼は不意に顔を上げてこちらを見た。アルカナは、焦がれていたみかん色の瞳にギクリとして、頭を下げる父にならって、ごまかすように腰を低くした。

しばらく待つと、アルカナの頭上に影が落ちた。父が陽気に声をかけた。

「本日はお日柄もよろしく、閣下」

「ご足労いただきありがとうございます、ハイネント卿」

思ったよりも低い声だ、アルカナは意識の片隅でそんなことを思った。父はよくもまあ、こんなにキラキラと輝く男の前で口が回るものだ。つらつらと挨拶の口上を述べる父は上機嫌だった。

「それで」ピアキイは淡々と問うてきた。「こちらが？」

「はい、娘のアルカナと申します、アルカナ」

「は、はい！」

声が上がっているのを感じながら、アルカナは更に深々と礼をした。「お初にお目にかかります、閣下。アルカナ・ハイネントと申します」

「…顔を上げてくれるかな、アルカナ嬢」

こんな情けない面構え、見せられたものではないと思いつつ、アルカナは頭を上げた。彼のみかん色の瞳とかち合う。アルカナは瞬きをした。早くなにか言ってくれ！しばらく黙りこくる青年に、アルカナは何度もそう念じた。願いが届いたのか、ピアキイはやや首を傾げて、ニヒルな笑みを浮かべた口を開いた。

「……はじめまして、だったかな？ピアキイです。どうぞ、これか

らよろしく」

意味深な言い方だ。アルカナはわずかに眉をひそめた。すると、彼は冷笑を保ったまま、クツと喉を鳴らした。

「確か、俺の記憶が正しければ、結構顔をあわせていたような気がするけど」

アルカナは仰天して、それから、かあと赤面した。：気づかれていたのだ！あんまりな展開に、アルカナは物も言えずに口を開け閉めした。まるで魚だ。

「おや、そうでしたか！」

何も知らない父はますますニコニコ顔だ。

「アルカナ、なんで教えてくれなかったんだい？」

言えるはずもない。一国の王族の恋愛遍歴を、屋敷の窓から出歯亀していたなんて、誰が言えるものか。アルカナは思わず目を泳がせた。ピアキイの冷たい笑みが殊更深くなる。軽蔑されているのは火を見るより明らかだった。が、ピアキイもそこまで暴露する気はないらしく、父の言には誰も返さなかった。

「応接間にご案内しましょう」

ピアキイは話を逸らした。

「お手をどうぞ、アルカナ嬢」

差し出された腕にアルカナは戸惑った。未だかつて、父と兄を除く男性にエスコートなどされた経験など皆無である。アルカナはしぶしぶ、ピアキイの細い腕に、なるだけ優雅に見えるように、しかしその実ぎくしゃくとした動きで、自らの手を添えた。

微妙に空いた距離を保ったまま、応接間へと向かう道すがら、アルカナはガチガチに緊張していた。いつピアキイが、アルカナの秘密を口に出すかを考えただけで、気が気ではなかった。頭上で、ピアキイと父は和やかに会話しているというのに。

ピアキイに「あのこと」を知られているということは、アルカナの望む平穏な結婚生活は露と消えたのだと理解した。アルカナは沈

んだ。どうせ自分がこんな雲の上の存在に好かれるはずもないとは思っていたけれど、それにしたって、二人の關係がこんなに悪いところからスタートするなんて、さすがに予想していなかった。

永遠に続くかに思われた応接間へと通じる廊下を抜けると、部屋の前に一人の男性が立っていた。黒い神官服に身を包んだ、褐色の髪の方だった。父と同じか、それよりも少し上の年代だろう。あの衣装は、”世界王”直屬の部下である、ファナティリスト高等祭司の制服だ。

男は茶色い目をこちらに向けて満面の笑みを浮かべた。どうやら自分たちを待っていたらしい。

「オオオ、来た来た！待ってましたよ閣下！」

ピアキをちらと見上げると、彼は顔をわずかにしかめていた。こんな顔もするのね、アルカナはこちらの視線に彼が気づかないうちに目を逸らした。男はズカズカとこちらへやってくると、太陽のようにニカリと笑った。

「何の用だよ、アンノ」ピアキの声は不機嫌だった。

「嫌だなア閣下。閣下の父親代わりを務めていた者として、息子の婚約者の顔を拝むくらい許されたっていいでシヨ？これはまた可憐なお嬢さんでいらっしゃる！」

未だかつて一度もされたことのない贅辞に、アルカナは頬が熱くなった。アルカナと父が挨拶を述べる間も許さず、ピアキが低い声で言った。

「誰が息子だ」

「息子でしょう？俺は閣下の後見人なんだから。あなたの最低最悪な父親母親と比べれば、俺、随分父親らしいことをしたと思うんだけどなア」

最低最悪ってどういうことかしら。アルカナは疑問に思ったが、尋ねるのは憚られた。アンノと呼ばれた男は、アルカナと視線を合わせた。

「というわけでハイネント卿、それからお嬢さん。ワタクシ、ピアキイの後見を務めております、アンノ・アズラーノと申します。コイツは女心もわきまえてない最低男ではありますが、根は悪い奴じやありませんので、どうぞ末永くお付き合いしてやってください」

「……」  
よく存じております、と嫌味を言う勇氣はアルカナにはなく、あいまいに愛想笑いを浮かべるに留めておいたが、父はアンノの刺激的な紹介にも動じることなくにこやかに返答した。こういうとき、父は大物だと思う。

「いえいえ、アズラーノ卿も、ピアキイ閣下も、私どもなどをお目掛け下さり大変光栄至極に存じます、ええ。うちの娘はなんの取り得もない、精々繕いものや下働きの真似事をするくらいしか……」  
「お父様！お願いですから、その軽い口を閉じていただけないかしら！」

アルカナは慌てて口を挟んだが、すでに時は遅く、アンノは笑いかみ殺すので精一杯のようだった。いくら下級とはいえ、貴族の端くれが召使と一緒に掃除洗濯や、厨房で料理を学んだり、庭師にくつついて庭園を駆け回って泥だらけになるなど、アルカナを置いて他にいないだろう。穴があつたら入りたいというのは、こういう気分を言うのだろうか。

ふと頭上で噴出す声が聞こえて視線を上げると、まさか、今の今まで不機嫌の極みだったピアキイが、くすくすと、笑っている……ではないか。アルカナは啞然とした。  
ピアキイが、笑っている。

「お嬢さんは家庭的でいらっしゃるようだ」  
アンノはどうか笑いを押し込めたようだった。アルカナははつとして目を伏せた。

「い、いえ、そんな……子供の頃の話ですわ」  
嘘だった。嘆く母に、「淑女たるもの使用人の仕事を学ぶのも大事

でしょう」となだめすかし、厨房に入り浸ってシェフ秘伝のミートローフのレシピを習ったことは記憶に新しい。アルカナ自身、お作法も文楽も勉学も嫌いではなかったけれど、家庭の仕事を淡々とこなすほうが性に合っていた。きつと生まれてくる身分を間違えたのね、とは、淑女の鑑のような姉の言い分である。

アンノは分かっているのかいないのか、おおらかに笑いながらピアキイに語りかけた。

「ウン、ウン。いいお嫁さんが見つかってよかったですねエ、閣下。正直、俺の娘はどうかナーって思ってたんですが」

「俺は三歳児の夫になる気はない」

さらりとピアキイが返した。するとアンノは口を尖らせる。

「閣下なら十年や二十年待つことくらいどうってことないでシヨ」  
「どういう意味だろう。アルカナが伺うようにアンノを見ると、アンノの背中越し、廊下の向こうから声がかかった。」

「おや、皆さんおそろいで。なんだい、応接間にも入らずに立ち話？」

その声を聞くなり、アンノも、ピアキイも、そして父も、突然電流が走ったかのように一斉に礼をした。アルカナも合わせて頭を下げると、アンノが穏やかに言った。

「これは、世界王陛下」

ドキリとした。世界王？そんな、一国の主と会うなんて聞いていなかった。ピアキイと会って、少し話して、それで帰るだけの用事ではなかったのか。

「顔を上げてくれ」

柔らかな声。隣のピアキイがすっかり頭を上げる気配がしてから、アルカナも体を起こすと、目の前に略式の司祭服に身を包んだ男性が微笑んでいた。ピアキイとは全く似ていない。奇異なモスグリー

ンの髪に瞳の、柔らかな顔をした若い男。アルカナは、にわかには彼がかの世界王陛下だとは信じられなかった。若すぎる。二十代半ばくらいにしか見えない男は、ピアキィと並んでも、精々兄弟かと思う程度の年齢差にしか見えない。…記憶をたどるに、昨年だったか、世界王陛下の生誕五十年のパーティが開かれた気がするのだが。

驚くアルカナに、シェーロラスディ陛下はいたずらっ子のような顔をして、応接間の扉を指した。

「立ち話もなんだし、応接間へ入ろう。お嬢さんも落ち着けないよ  
うだ」

a c t . 2 不本意な邂逅（後書き）

ちなみにこの話は現時点で、アテナ1より数十年時代を遡っております。

a c t . 3 サディストな彼の遊戯（前書き）

一部侮蔑的な表現を含みます。苦手な方はご注意ください。



### act・3 サディストな彼の遊戯

「アンノ、お前は仕事があるだろう？」

当たり前のように応接間に入ってきたアンノをシェーロラスデイがたしなめた。その間にもピアキイは、ふかふかのソファにアルカナを座らせると、その隣にアルカナの父を促し、自分はアルカナの向かいに腰掛けた。陛下を差し置いて最初に席に着くだなんて、アルカナは慌てて立ち上がるとするが、ピアキイに視線で制される。

アンノは陛下の言葉にもひとつ肩をすくめて、ひょうきんに笑って見せた。

「ええ、イヤだなアシェ口様。俺がどれだけこの日を待ち望んでたか知ってるでシヨ？仕事なんて残業すればいいんですよ」

世界王陛下をあるうことが渾名呼びなど！アルカナは呆然とした。

しかもシェーロラスデイは全く気にも留めていないらしい。入り口脇の小机に置かれた女官の呼び鈴をチリンとひとつ鳴らすと、「しようがないな」と一言添えてピアキイの隣に掛けた。アンノはその脇に立って控える。

シェーロラスデイはのんびりと口火を切った。

「まあ、そのアンノが図らずも言ってくれたけれど、シェーロラスデイ・T・ファナティライスト…今日は甥の血縁として来ているので、シェーロラスデイ・エファインと名乗らせていただこうか」

「いや、これは…トロット・ハインントと申します。こちらは娘のアルカナでございます。このたびは世界王陛下をご拝顔でき…」

「いや、その口上はいらない」

シェーロラスデイは片手を挙げて父の口上をさえぎった。父はピタリと口を閉じた。陛下は次に縮こまるアルカナに微笑んだ。

「今日は若い二人が主役だしね。で、お二人は紹介は済んでいるのかな？」

アルカナは深々と礼をした。ピアキイは、ちょうど部屋に入ってきた、茶を持った女官をチラリと見てから言う。

「もう済ませました」

「そうか。まあ、アルカナ。彼は女癖の悪い最低男だが根は…」

「それは俺が言った」

アンノが言ったところで、赤銅色のショートヘアが可愛い女官が、緊張のあまり食器を少し鳴らした。いくら女官といえども、世界王の前では緊張のひとつもするものよね、アルカナは心底彼女に同情した。

ピアキイは顔をしかめた。

「アンノも伯父上も、その紹介はなんとかならないのか」

「事実だろう？」

「事実ですしねエ」

いくら事実だとしても、もしアルカナがピアキイの宿通いを知らなかったら心底ショックだったろう。アルカナは口元を引きつらせた。隣の父は何を考えているのか、ひたすらニコニコしている。冗談か何かだと思っているに違いない…だとしたら勘違いもいいところだ。「とにかくも我が家の馬鹿息子に優しそうなお嬢さんが来てくださって嬉しい限りだ」

しみじみとシェーロラスデイが言った。アルカナはすっかり恐縮して情けない表情だった。と、ピアキイがわずかばかり嘲笑して横槍を入れる。

「得意技は家事仕事だそうだ」

「あ、そ、それは…！」

思わず声を上げたが言葉にならず、アルカナは困り果てた。貴族の娘が家事に精を出すなんてはしたくないことだと、世界王陛下は呆れたことだろう。ピアキイは相当アルカナが嫌いなようだ…涙をこらえてぶるぶる震えていると、シェーロラスデイは以外にも非難の色も見せることなく「へえ」と声を上げた。

「まるでフェルマータの若い頃みたいだな」

「……え、え？」

「知ってるかな、ラトメの”神の子”。あいつは自分で部屋を片付けたり、勝手に料理するものだから、ファナティリストに来るたびに女官が困っていたよ。そうかあ、じゃあフェル付きの女官をアルカナに回そうかな」

「そ、そんな！女官なんて、恐れ多いです！」

身の回りのことはすべて自分でやってきたアルカナにとって、何もかも世話されるのは慣れていない。アルカナのような低い身分の者に人員を割くだなんて申し訳なかったし、きつと迷惑をかける。なんと懐の大きな人なんだろう、世界王に心から感服するとともに困惑するアルカナに、アンノが助け舟を出した。

「神殿は暇ですからねエ。そんなに気を張らずとも、退屈しのぎの話し相手くらいに思っていればいいですよ」

「でも、でも」

「アルカナ。いくら官籍に下ったとはいえ、ピアキイが王族の一員であることに変わりない。その花嫁に女官のひとりもつけないというのは外面的にもあまりよろしくないんだ。まあ、未来の夫の面子を保つという意味で、ひとつ受け入れてくれないかな」

シェーロラスディはあくまで優しい口調で言った。世界王陛下を困らせてしまったのかと、アルカナは途端に真っ青になった。チラリと見たピアキイは、そ知らぬ顔で茶を飲んでいる。別にアルカナごときの女に、女官などつけるまでもないと思われているのだろうか。アルカナはうつむいた。

「……わかりました」

「うん、ありがとう。では、私は執務に戻ろうか」

シェーロラスディは腰を上げた。

「大人は退散して、あとは若い者たちに任せることにしよう。アンノ、行くぞ」

「ま、名残惜しいですが、お嬢さんとお話する機会は今後いくらでもありますからねエ。ではご両人、アルカナ嬢と次に会うのは式典かな？また」

「なにか困ったことがあればいつでも時間を取ろう、アルカナ嬢。双子神の加護があらんことを」

席を立とうとしたハイネント親子を制して、シェーロラスディとアノノは颯爽と立ち去っていった。まるで疾風のような人びとである扉が閉まるなり、父も立ち上がってアルカナとピアキイに微笑みかけた。

「では、私も失礼します。閣下、どうぞうちの娘をお願いいたします」

「え、…お、お父様、帰るの？」

「何を不安がっているんだい？僕は神殿の入り口で待っているよ。アルカナ、ピアキイ閣下に失礼のないようにするんだよ」

そうして父も扉のむこうに消えてしまい、あっという間にアルカナとピアキイは二人きりだ。アルカナは父の出て行った扉から目を離せない。ピアキイがどんな顔をしてこちらを見ているのか、知るのが怖かった。

かちやり。ピアキイがカップを置くかすかな音が響く。アルカナは慎重に、ピアキイの顔を視界に入れないようにしながら、自分の膝まで視線を動かした。テーブルで、一口もつけていないカップが、アルカナの途方に暮れた表情を映している。

しばらくお互い黙り込んでいると、不意にピアキイがくすりと笑う声がした。

「どんな女が来るのかと思えば…まさか、いつも窓から俺のことを見てた奴だとは思わなかった」

「そ、そんな、いつもってわけじゃ」

「実際会ってみると、想像以上の根暗女だな」

冷たい言葉を甘ったるい声で投げつけられて、アルカナは真っ赤に

なった。悲しくて怖くて悔しくて、言い返すこともできない。ぎゅっとスカートを握って耐えるくらいしか。相手に妙なことを言って、自分の、引いては父の株を下げてはならない。きっと、アルカナが何を言ったって、ピアキイの不興を買ってしまうから。

ピアキイはフンと鼻を鳴らした。

「言い返してもこないのか。つまらないな」

「……」

「……あーあ。政治からできるだけ離れてて、かつ婿にならなくて済むような家の娘ってことで適当に選んだのがまずかったのかなア……これなら、祭司たちの高飛車な女のほうがまだマシだったかも」

「……」

じゃあ他の女性をお嫁に貰ってください。そう言おうと思った。

けれど、脳裏にいくつかの光景が浮かぶ。始終ニコニコしていた父、大喜びした母、涙ながらに祝福してくれた使用人たち。彼らが失望したような目で自分を見るのかと思うと何も言葉が出てこなかった。涙がもう目尻にたまって、嗚咽をこらえるので、アルカナはうんともすんとも言えなかったのだ。

ぱたり、溢れた涙が一滴こぼれて、アルカナのスカートの染みを作った。それを皮切りに、幾多も、幾多も、ぼろぼろと、浮き足立った使用人と一緒に選んだ真新しい桃色のワンピースを濡らしていく。肩が震えた。

ピアキイが席を立て、アルカナのすぐ横に座る気配がした。手の込んだ編み込みが入った髪を、彼の長い指が弄る。ピアキイはくすくすと楽しげに笑った。

「泣いちゃった？」

何が楽しいのだろう。こんな男の何が良かったのだろう。アルカナは唇を噛んだ。最低最悪だ。「彼が好きだからなんでも許せる」なんて殊勝なことは言えやしない。こんな嫌な男、見たこともない。きつとこの男は人の皮を被った悪魔に違いない。彼に恋なんてした

自分の浅はかさを恨んだ。

ピアキイはしばらくアルカナの髪を弄んでいたが、やがてそれも飽きたのか、ぱっと手を離して、興が削がれたとばかりにソファの背もたれに体重をかけた。

「ねえ、アルカナ。お前に覚悟はあるのか？」深みのある声音だった。

「…なんの、覚悟、ですか？」

「我がエフアイン家の、同族になる覚悟だよ」

アルカナは目線だけピアキイに向けた。彼はこちらを見ていなかった。なにもない虚空をぼんやりと見上げて、すらとした頬には何の表情も浮かべていない。人形のような硬質さに、アルカナはぎくりとした。まったくわけがわからなかった。エフアイン家とは、世界王の家系がもともと使っていた家名だったと思う。

「王族の嫁になる覚悟、つてこと、ですか？」

「ま、知らされちゃいないだろうけどね。…俺たちは”ヒトならざるもの”なんだ」

アルカナは目を瞬いた。涙も引つ込んだ。一体全体、この男は何を言いたいのだろう。王は人間とは別の存在とでも説くつもりか。そんなもの、ファナティライストの教典にいくらでも載っているだろうに。

ピアキイは歌うように言った。

「ねえ？泣き虫なアルカナ。そんな調子で、俺と一緒に永遠を生きる覚悟は、できてるの？」

「永遠、つて？」

「でも、君に拒否権はない」

ピアキイにはアルカナの反応などどうでもいいようだった。薄ら笑いを浮かべて豪奢なシャンデリアを眺めている。いや、今の彼に、この世界に存在するなにかもが視えているのだろうか？彼の思考は、アルカナには考えも及ばない遠いどこかへ飛んでいるようだった。

た。

「お前も、いずれ狂ってしまうよ。だから今のうちに、泣けるだけ泣いておけばいい。傷つくだけ傷ついて…もう、何も感じられなくなる前に」

アルカナには、ピアキイの言いたいことのかけらもわからなかったが、それでも、何を返すこともできなかった。彼のほの暗い鈍い光が、すべてを反射して拒絶しているようだった。

## act・4 間合いの攻防

結婚が決まっても、ピアキイに、彼の習慣を変える気は毛頭ないようだった。いつもどおり、あの宿でブロードの女性と待ち合わせするかの閣下を、これまたいつもどおり窓から眺めてアルカナは嘆息した。なんと図太い神経をお持ちのものだ。悲しみを通り越して、アルカナは心底呆れ返った。きっとピアキイにとって、アルカナの存在など毛ほどの価値もないのだろう。今だって、チラリと視線を上げて、アルカナが様子を伺っているのに気づくなり、見るも麗しき不敵な笑みを浮かべて去っていく。隣に、アルカナの知らない美女を伴って。

あの後：顔合わせで閣下に泣かされた後だ：ピアキイは、不可解な言動などまるでなかったように、ぶっきらぼうに「行くぞ」と言うが早いか、アルカナの手首を引っ張って神殿の入り口まで送り届けた。父の前では、完璧な王子様の皮を被って。

とんだ二重人格である。いや、アルカナが知らないだけで、ピアキイにはもつとたくさんの面が潜んでいるのだろう。複雑な生まれの方だから、一筋縄でいくようでは、何かと不都合が多いのかもしれない。好意的に捉えてはみるものの、それにしただって、彼は人を傷つけるのが好きだ：特に、アルカナを。部屋に閉じ込められている婚約者を放って他の女性と遊びまわるなんて、これは立派な浮気ではなからうか。

ファナティライストの貴族社会では、婚約した女性は結婚までの三ヶ月ほどの期間、外に出ることを禁じられる。特に男性との面会などもつてのほかで、その間は婚約者とも会ってはならないのが決まりだ。

そういう意味では、私、毎日のように閣下と「お会い」しているわ



ね……浮気現場を眺めながらアルカナは眉をひそめた。責められるいわれはないだろう。アルカナだって好きで見ているわけじゃない。けれど、彼から目をそむけて見ないふりをするのは、ピアキに敗北する気がしてアルカナには不服だった。あの美しい青年にできることなんて、せいぜいしてやったりな笑みを浮かべる彼をにらみつけることくらいだから。

普通ならば、婚約者と会えないかわりに、互いに手紙を送りあうのがセオリーだが、その面でもピアキは一般的でなかった。本来美辞麗句を凝らした文章が綴られているはずの封筒の中身は、何故か半紙にくるまれた小さな押し花が入っていた。

いつも、その辺の道端に咲いている野花だった。淡い桃色の花もあれば、濃い青も、時には花卉のない薬草もあった。

アルカナはこの贈り物に閉口した。よかれと思つての押し花なのか、何か裏があるのか……いいや、あのピアキ閣下のことだから何かあるには違いないだろうが、いかんせんこういう花は嫌いではない。派手で鮮やかな花もちろん好きだけれど。

まさかあの閣下が自分で押し花を作るところなど想像もできないが、無碍にするものでもない。毎日欠かさずに送られてくる花たちを、アルカナは栞にしたり、ポプリにしたりとするものの、ピアキの意図はまるで読めなかった。今朝送られてきたのは鮮やかな金色の花。香りが強いから、におい袋にでも入れようかしら。アルカナは冷めた茶を口にしたところで、はたと考え付いた。

……今日のお相手は、ブロンドの綺麗な女性だったわね。

アルカナは自分の打ちたてた予想がきつと間違っていないと思い、気が滅入った。

アルカナは不機嫌だった。婚礼の儀が近づくにつれて次第に苛々

していくアルカナに、使用人たちはどうしたものかと首をひねっていた。可愛らしい野花を送ってくる洒落た婚約者の何が入らないのかと訝る者さえ。洒落た？アルカナは憤った。むしろなんと悪趣味な男だろう。いわば、これは浮気予告のようなものだ。手にした萌黄色の花を握りつぶしたい衝動に駆られながらアルカナは怒った。窓のむこうでは、花と同じ色のワンピースを身につけた少女が大変楽しそうにピアキイに腕を絡ませている。アルカナの目から見てもうつとりするほど可愛い娘だった。こんな状況でなければ。

アルカナはすぐに顔を背けた。何が敗北だ、何が花だ。とにかくピアキイにとって自分は邪魔者らしい。自分からも何かピアキイにしてやらねばと思い、自分で読んでも反吐が出そうなほど甘い文句を連ねたラブレターを送りつけてやったところ、次の日彼が送ってきたのは大輪の真つ赤なエソルで、浮気相手は花に違わず華やかな絶世の美女だった。

こうなったらもう彼をまともに見るのも嫌だった。アルカナは午後のお茶の時間を返上して、窓から背を向けて刺繍を始めた。この背中を見て、ピアキイも精々あざ笑っていいればいいのだ。アルカナばかりが不快な思いをするなんて理不尽だ。

幸い、アルカナは刺繍が得意だった。小さなものなら一刻と経たずに仕上げてしまう。そそくさとアルカナは萌黄色の花を縫い取った。

アルカナは刺繍の入った小さな巾着に今朝もらった花を突っ込むと、入り口近くの陶器でできた椀を持ち、それに向けて声をかけた。「トリノ、ちよつと来て頂戴」

トリノはすぐにやってきた。十四歳の使用人の少年は、心底嫌そうな顔でアルカナを見上げる。小柄な彼は、まだアルカナより頭ひとつ分も背が低い。栗毛の少年は声変わり中の少ししゃがれた声でアルカナに抗議した。

「なんですか、お嬢様。というか僕を呼びつけないでください。嫁入り前なんだから」

「ピアキ閣下のために私が尽力するのが馬鹿らしくなったのよ」

アルカナは憤然と鼻を鳴らし、におい袋をトリノに突き出した。彼は怪訝な顔でそれを受け取った。

「それを閣下に届けてちょうだい」

「何で僕が。配達人がいるでしょう」

「その配達人って女の子でしょ。私と同年代の男の子が運んでくれることに意義があるのよ」

「ハハーン…ヤキモチやいてほしいんだ」

アルカナは頭を抱えた。ヤキモチ？あのピアキがそんな思いを抱くわけがない。これは戦いなのだ。あのピアキに、自分は彼に振り回されてばかりではないのだと一泡噴かせてやるための。しかし、ここでトリノの機嫌を損ねたら意味がない。アルカナは「どう取ってもらっても構わないわ」と返した。

「ただ、絶対に送り届けてね。あなたっておうちよこちよいなんだから」

「そ、そこまでじゃありません」

「この間お母様のお気に入りの花瓶を割ったのがあなただってこと、私が知ってるの、お忘れかしら」

トリノは閉口した。こう言えば彼はアルカナに従わざるを得ないことを知っていた。アルカナはにっこり笑った。

「お願いね、トリノ。あなただけが頼りなの」

「…奥様にばれたら殺される…」

トリノはうなだれて、「ワガママお嬢様め」と毒づくと、アルカナの部屋を後にした。

ピアキイは、突然の事情で代わったという婚約者の使者をまじまじと見た。アルカナよりも幾分年下だろうか。随分と小柄で、長身のピアキイは彼を見下ろす形になった。顔の造形は可もなく不可もなく、といったところか。愛嬌のある顔は、ぽかんと間抜け面をさらしてピアキイを見上げている。ピアキイはさわやかに微笑んでいた。

「いつもの子は来ないんだな。君は彼女の代理？」

「えっ、あ、ハ、ハイ！お、おお、お嬢様に無理を押し付けられまして……」

正直な男だ。ピアキイはわずか眉をひそめた。昨日自分に背を向けて一体なにをやっているのかと思えば、彼と直接面会したということか。まったくもって単純な女である。

先日この神殿へやってきた彼女を思い出す。懸命に涙をこらえて、スカートを握り締める姿だ。何の力もないか弱い女かと思っていたが、ピアキイの想像よりも、なかなかどうして骨があるではないか。見事な刺繍に、ピアキイは思案した。彼女の考えを量りかねたこともまた面白い。そして、縮こまってブルブル震える情けない使用人に顔を向けた。

「アルカナは、」

ちよつと口を閉ざした。

「……アルカナ嬢は、どんな子だと思う？君の目から見て」

「えっ！？え、えーと！？」

「俺はまだ、彼女のことをよく知らなくてね。花など贈ってはみたものの、彼女の好みも分からない状態だ。アルカナ嬢のことをもっと知りたいと思うんだが、君、なにか教えてくれないかな」

努めて婚約者を知ろうとする健気な男を演じると、案の定この使用人はコロリと信じた。感銘を受けた様子で、顔を紅潮させて何度も頷く。

「えっと、お、お嬢様は、白が好きだってよく言ってます、よ！」

「白？」

「はい！アヌザンの花なんかが好きだったと思います。あとレースとか、リボンとか、女の子らしい持ち物も好きだけど、自分より姉君のほうが似合うとか言って、ほとんど持ってたと思います」  
「……白、か」

そういえば、先日着ていた桃色のワンピースも新品同様で、どこかちぐはぐな印象を受けた。脳内で、あの少女に白くて可愛い衣装を宛がってみる。

……悪くない。

ピアキイは机に用意した封筒を取り上げた。少し考えてから、窓際に置いた花瓶を見た。一輪の白いエソルが差さっている。長い指を伸ばして、花を抜き取るうとして……少し迷ってから、花弁を一枚だけ取って、半紙にくるんだ。

「頼んだよ」

封をして使用人に渡すと、少年はキラキラと目を輝かせて頷いた。素直な少年である。ピアキイは自分の胸のうちに冷たいものが流れるのを感じた。まったくもって、自分とは違う少年である。

その少年がぺこぺこ頭を下げて去っていくのを見下ろして、ピアキイはにおい袋を握り締めた。くしゃり、なにか巾着の中に硬さを感じて、ピアキイは袋を開けた。花の脇に、小さなメモが折りたたまれて奥に押し込まれている。取り出すと、達筆ではないが丁寧な女の子で、大層な嫌味が書かれていた。

『このにおい袋を萌黄色のお嬢さんに差し上げたらいかがでしょう』

ピアキイは冷笑を浮かべた。本来彼女に渡すはずだった封筒をゴミ箱に投げると、宙に浮いた間に封筒が燃え上がった。一瞬小さな

爆発があったかと思うと、ゴミ箱に入ったとき、手紙は灰になっていた。

a c t . 4 間合いの攻防（後書き）

エソル：バラのこと。（ r o s e s o r ）

アヌザン：ナズナのこと。（ n a z u n a a n u z a n ）

## a c t . 5 興入れ（前書き）

ちよつと倫理上よろしくなさそうなブラックな表現が登場します。  
苦手な方はご注意ください。



## act・5 興入れ

「お綺麗です、アルカナお嬢様！」

アルカナは啞然として鏡の中の自分を見つけた。映った自分の姿は間抜けな表情をさらしている。だがどうしても思ってしまったのだ。我ながら、なかなかいける。特注のドレスに身を包み、化粧を施した自分の姿は、普段とはまるで別人のように深窓の令嬢だった。いや、もともと引きこもりなのだからあながち間違った表現ではないが。

結婚式は、神の御前に誓いを立てる場だから、華やかな衣装はご法度とされている。男性は黒の神官服、女性は黒を基調としたドレスが定番だ。黒などという大人びた色のまるで似合わないアルカナは、当然服に着られた恥さらしな花嫁になるだろうと気落ちしていた。

しかし、これは…アルカナは自分の衣装をとつくりと見下ろした。厚手の布で作られた黒のローブはすそが大きなレース型にくりぬかれ、白い糸で細々と花の刺繍が入っていた。その下に薄手のドレープが幾重にも重ねられたふんわりとしたスカートが広がり、腰は胸下から通る太い帯でぐつと留められ、うしろで大きなリボン型に結ばれている。頭には白いエソルの飾りがついた細いカチューシャから、透かし模様の入ったレース仕立てのヴェールが伸び、床まで垂れている。普段ひつつめに行っている髪は下ろされ、毛先を緩く巻かれて、耳のうしろに細い三つ編みを作られた。化粧もまた秀逸だ。決して華美ではなく、むしろ薄く地味なくらいだったが、桃色を基調とした淡い化粧は乙女じみて、清純な印象を与えた。キラリと光る桜色のくちびるを見て、アルカナは自分が十六歳のうら若き乙女であることをようやくと自覚した。

ハイネント家から今日のために出張してくれた使用人は涙ながらに喜んでいる。アルカナは気恥ずかしくなってうつむいた。ファナテイラリスト神殿の年配の女官も、自分たちの作品を満足そうに頷いて見ている。

「あのピアキイ閣下に、こんなに可愛らしい花嫁ができて嬉しく思いますわ」

「そのご衣装も、ピアキイ様御自らお決めになられたのですよ」

「え…閣下が、ですか？」

ぎょつとしてアルカナは女官を見た。母ほどの年齢だろうか、目尻に少ししわの寄った、優しそうな小太りの女性は深く頷いた。この三ヶ月、ハイネント家に通って、神殿の作法などを教えてくれたリマという女官だ。

「仕立て屋の用意した衣装が気に入らないと仰って…ああ、ピアキイ様に、私が言ったとは内緒にしておいて下さいませね。本当は口止めされていたのですけれど」

一体どういうつもりだろう。ここ数週間、相変わらず花はアルカナの元へ届いていたが、いつも白い花、それも生花の花弁ばかりで、以前のような押し花は全く贈られてこなかった。しかも、何か意味があるのかと窓に張り付いてみても、ピアキイは何故か、一向に姿を現さない。

まさかとは思うけど、ひょつとして、何かがあつて結婚に前向きになつてくれたのかしら…そんな淡い期待もしていた。それが、まさか、本当だったとか。アルカナはここ最近めつきり幻滅していた自分の恋心が、むくむくと湧きあがつて来るのを感じた…だとすれば、自分は、こんなに幸福なことはないかもしれない。

嬉しそうににっこり笑ったアルカナに女官たちも微笑んだところで、部屋の扉が開いた。見ると姉ハノンが光沢のある黒のドレスに

身を包んで立っている。豊かな茶髪を緩やかなシニヨンに結い上げて、すらりとした長い首から首筋までのラインをさらしている。地味なドレスなのに、我が姉ながらまこと扇情的でうっとりするほどの色気だった。

「お姉さま」

「まあ、アルカナ。見違えるようね」

やんわりと微笑むハノンはずっとたりとアルカナの元へ歩み寄った。この毒舌がなければ、彼女こそとんでもない玉の輿に乗っただろうに。アルカナは姉に魅了されつつも思った。

「あなたが服に着られて恥ずかしい思いをしていやしいかと思っ  
ていたけれど、可愛いわ。いい仕立てね」

「ひどいわ！そりゃ、私に黒は似合わないけど」

アルカナがむっとすると、ハノンはくすりと笑ったあとで、ちょっぴり眉尻を下げた。

「あなたがお嫁に出してしまうのがこんなに早いだなんて思わなかったわ。いつまでも、小さな私の妹だと思っていたのに」

「やだ、なに言ってるの。今生の別れでもあるまいし」

からりと笑ってみせたアルカナに、ハノンは少し首をかしげて、それからいつもどおりに優雅な微笑みを浮かべた。

「そうよね。あなたはいつまでも、私の可愛い妹よ」

貴族同士の結婚はパーティじみた華やかな席であるが、神官の長たるファナティライスト王家の式典はもつと厳かさを求められる。

近親者や神殿の重役たちがずらりと礼を取る中で、最奥の壇上にいる世界王の下へ行き誓いを立てる。そして王の祝福を受け、式は終わる。

神殿へ続く大扉の前で、アルカナはそわそわした。心臓が飛び出

してしまいそう。この扉のむこうで、世界のお偉いさんが顔を揃えているのだと思うと緊張で足が震えた。まして、作法だってリリマに口頭で説明してもらっただけだ。覚えの悪いアルカナのことだから、なにか失敗でも仕出かしそうで恐ろしい。なにせ、花婿がアルカナよりもほど美しいのだ。こんな貴族の末席にも入ろうかという小娘、鼻で笑われてしまうのではないか。

不安で胸が押しつぶされそうになっていると、扉の両脇を固めていた甲冑に身を包む兵士二人が、扉のノブに手をかけて低い声で言った。そわそわしながら、神殿の警護役って美声じゃなきゃなれないのかしら、と下らないことを思う。

「お時間です」

アルカナは唇を引き結んだ。とにかく、腹を括れ。できることをしなければ。妻の恥は夫の恥、ピアキイの顔に泥を塗るようなことをしてみる、ハイネント家に明日はない。開き直って、アルカナは神聖な地へと足を踏み入れた。

扉のむこうはくんだり階段になっていて、向かいにはこちらとシンメトリーになるように、もうひとつ階段と扉がある。アルカナとは反対側の扉から、ピアキイが出てくる手はずになっていた。アルカナは階段を下りて、踊り場でピアキイを待たなければならない。

引きずるヴェールを踏まないようにと、細心の注意を払って階段を下る。突き刺さる視線が恐ろしくて、観客たちのほうはちらとも見られなかった。長い階段を下りて、アルカナはスカートをちゃんとつまみ、深々と頭を垂れた。さらりと、肩をヴェールが撫で、アルカナはぞわりとした。

もし、あんまり静かなものだから、アルカナは思わず嫌な想像をしてしまった。もし、ピアキイ様が現れなかったら、どうしよう。やはりアルカナなどと結婚するのは嫌だと突っぱねられて、式をボイコットされたら？あの男ならばやりかねない。アルカナは赤い絨毯を見下ろしながらどきまぎした。来なかったら、アルカナはどう

なるのだろう。永久に開かない扉に頭を下げ、それで…

そこまで考えたところで、頭上に影が落ちた。黒い神官服のすそが目に入る。心底ほっとした。アルカナは細心の注意を払って頭を上げ…真正面から、今日から夫となる男の姿を見ることになり、すこぶる後悔した。

ピアキイははっとするほど美しかった。横にあるステンドグラスから差し込む陽光がそうさせるのかもしれない。金髪がきらきらと輝いている。式典用の祭司服につけられた、赤い宝石がきらめいている。彼の頬はうつすらと白く染まり、間違いなく、花嫁など目ではないほど、周囲の視線をかき集めていた。

啞然とするアルカナに彼はくつと笑って、白い手袋に包まれた大きくも繊細な手でするりとアルカナのそれを手に取ると、中指の第二関節のあたりに、掠めるようなキスを送ってきた。そしてそのまま二人の肘の高さまで繋いだ手を捧げ上げ、客たちのずらりと並んだその奥、世界王のいる祭壇に向いた。アルカナもどうにかこうにかそれに倣ったが、視線がピアキイから外れない。

するとピアキイがくすりと笑った。馬鹿にした口調で、アルカナにだけ聴こえる声音でつぶやく。

「間抜け面」

「……！！」

アルカナは途端に頭に血が上って、無理矢理ピアキイから視線をひっぺがし前を向いた。きゅっとつかまれた手が気になって、両側に立ち並ぶ偉い人々の顔も目に入らない。今度はあつという間に目的地にたどり着いてしまった。

祭壇の奥で、シェーロラスディ陛下が微笑んでいる。アルカナとピアキイが祭壇の前に並ぶと、一拍置いて彼が朗々と語り始めた。

「我が双子神のたましいの御許にて、今、新たなつがいが来られ

し時に感謝します。花婿よ、誓いのことばを捧げなさい」

「我が名はピアキイ・ケルト・エファイン」

ピアキイは声も美しい。アルカナは夢見心地で思った。触れ合いそのうな肩が扱った。

「私は、アルカナ・ハイネントを妻とし、愛し、いつくしむことを誓います」

どきどきした。ただの口上だ。ただの口上。アルカナは気を落ち着かせた。すると、シェーロラスデイがゆるやかにこちらに視線を移した。

「花嫁よ。あなたは我らが双子神のたましいのかけらたる、エファインの者となることを誓いますか」

「誓います」

言葉尻が震えていた。けれど、この台詞を言えばアルカナの出番は終わりだ。この後は、リリマの話では、陛下に聖水を振りまかれ、誓いの受諾をもらって退場のはず。そう、そのはず、だった。

だから、シェーロラスデイ陛下が祭壇に、ひとつのワイングラスを置いたとき、アルカナは怪訝な表情を隠せなかった。

赤い液体で満たされている。ワインよりも濁った色だ。アルカナはどうしても、グラスの中に入っているのが血にしか見えなかった。そして、どうにも胸騒ぎがする。背後のひそやかなざわめき。どう考えたっておかしい。

しかし、シェーロラスデイの声は至って穏やかそのものだった。

「誓いをまこととするならば、花嫁。この聖なる液体を飲み干しなさい。さすれば双子神は、あなたを迎えることでしょう」

聖なる液体？これが？背後のざわめきが大きくなる。アルカナは戸惑った。思わず隣のピアキイを見上げると、彼は笑っていた。

笑っていたのだ。実にうつくしく、精巧に作られた人形のような顔をして。その怪しさに、アルカナの背筋が粟立った。逃げ出した

くなつた。なんだ、このつめたいいきものは。

しかしその冷ややかないきものは、アルカナを決して逃がさない  
とばかりに、握った手に力を込めた。薄っすらと引き上げたくちび  
る。彼はついと、細めたみかん色の瞳をこちらに向けて、ささやい  
た。麻薬みたいな甘さだ。

「飲むんだ、さあ」

ひどく優しい口調だった。これなら、以前の顔合わせのときのよう  
に、アルカナを楽しそうに糾弾した時のほうがよほどマシだとアル  
カナは思った。ひそやかに、ひそやかにアルカナを絡めとるように、  
そう、魔術にも似ていた。これはなに？ひとりでに、空いた片手が  
グラスへと伸びていく。ピアキイの目がきらりと光った。にいと口  
端が引きあがった。

「そう」

掠れた声で、ピアキイはアルカナを追い立てる。アルカナの頭の芯  
がもやもやとふやけて、何も考えられなくなる。指先がグラスに届  
く。つめたい。アルカナはぼんやりと思った。グラスを持ち上げる  
少しだけ重かった。手首に力がこもった。ふわりと、グラスから甘  
い香りが立ち上った。いや、それともこの香りは、隣にいるピアキ  
イの香水だろうか。わからない、わからない、わからない。

「そうだ、アルカナ。すべて飲み干せ。残してはいけないよ」

はい。心の中でそう答えた。分かりました、すべて飲み干して残し  
ません。ことばにするよりもはやく、アルカナは思い切り、グラス  
を口元に持つていき、中身をいっぺんにあおった。

直後、アルカナの呪縛が、解けた。

「……っ！！ごほっ、か、はっ……」

中身を飲み干してから、瞬く間に、すべての感覚が戻ってきた。苦

いのか辛いのか、間違つて鉄錆でも飲み込んでしまったのかと思う  
ぴりぴりとした刺激に、ねつとりと舌から離れない感触。これは、  
なんだ。血だ。アルカナは混乱した。なんの血？なぜこんなものを  
飲まされたのか。飲んだのか。

背後の参列者から怒号が上がった。聞き覚えのある声だ。アンノ  
だ、アルカナはすぐにぴんときた。

「閣下！！なんてことを！」

咳き込みながら、怒りの矛先たるピアキイを見上げた。どういう状  
況だろう？今、アルカナはなにか間違つたことをやらかしたのだろ  
うか。ピアキイが何かやつたのだろうか。

当のピアキイは薄ら笑いを浮かべたまま、ゆるゆると振り返った。  
呆然とするアルカナが持ったままのグラスを取り上げて、しかしそ  
ちらには見向きもせず、グラスを祭壇に戻す。

「誓いは成った」

静かな声だった。何を、そんなに嬉しそうなのだろう。アルカナは  
思ったが、口に出す気力もなかった。参列者を見ると、手前にいる  
：おそらく、重役の中でも、上層の人々だ：彼らは何事かささやき  
ながら、鬼気迫る表情だ。

「あんな小娘に……」

「ピアキイ様はなにをお考えで……」

「不老不死の……」

とにかく、アルカナが血を飲んだのは、なにやら間違いだったら  
しい。アルカナはさつと青ざめた。すると、ピアキイの長い指がアル  
カナの唇を、ピンクに光る可憐な唇だ、それをついと撫でて、こび  
りついた血液をぺろりと舐めた。赤い舌だった。アルカナは身体  
の芯が冷えた。

「か、閣下、わたし、なにを……」

「これでお前も、我らがエフアイン一門の一員だ」

ピアキイは実に嬉しそうににやりと笑った。

「もう二度と逃げられないよ、俺のかわいいアルカナ。永久に、ね」



式が終わり、あてがわれた部屋に通されるやいなや、アルカナはぶつ倒れた。頭がぐらぐらした。血液が沸騰しているみたいだ。めまいがした。立ってられない。アルカナは床にうつぶせになった。ついてきていたリリマが悲鳴を上げた。

「アルカナ様!!」

息が荒く、声が出なかった。リリマと、他数名の女官に囲まれ、抱え起こされてやっと、アルカナは薄っすらを開いた。女官の誰かが言った。

「ひどい熱ですわ!」

「さきほどまであんなにお元気でいらしたのに」

「式でなにかあったのでしょうか、重役の方々も様子が」

「まさか」

背後でリリマが息を呑んだ。すぐに鋭く叫ぶ声がする。

「誰か、ピアキイ閣下をお呼びしてきなさい!残りの者はアルカナ様のお世話を!」

ピアキイ閣下?アルカナは朦朧とする意識の中で反芻した。閣下が出てくるということは、やはり、あの血を飲んだことが関係するのだろうか。あの血はなんだったのだろう。あれを飲んだ時のピアキイの暗い目が怖かった。そもそも、なぜあんな異様なものを、深く考えることなくあっさりと飲んでしまったのか。

リリマ達にベッドに運ばれ、アルカナはふかふかの布団に一息ついた。視界が定まってくる。視線を移すと、青ざめる女官たちの姿が目に入る。

「り、リリマさん…私、どうしちゃったんでしょう…」

「お気を確かに、アルカナ様」

こんなに熱いのに、がたがた震えていた。そのくせ指一本動かさせやしない。気を確かにとわれたって、こんな不安な状況、どうしろ

というのだ。

「わ、私……し、しぬ、のかな……」

「まさか！そんなことありませんわ、アルカナ様！」

「……アルカナが倒れたって？」

その時、どこからともなくピアキイが現れた。女官たちがいつせいに脇によけて礼をするのも見向きせず、彼はまっすぐにアルカナの枕元までやってきて身をかがめた。彼は新妻が倒れたことも予想の範囲内だとばかりに平然としている。ピアキイは手の甲をアルカナの額に当てた。その心地よい冷たさに無意識に擦り寄ると、彼はくすと笑って甘い声音で尋ねた。

「吐き気は？」

アルカナはもどかしいほどゆっくりと、かすかに首を横に振った。

ピアキイはアルカナの頬に手を滑らせた。

「一晩もたてば熱も引くだろう。死にやしない。その為の妙薬だったんだから」

「あ、あの、血……」

「古い儀式だ。お前のような成り上がりの小娘が、要らぬ圧力をかけられないための。……お前たち席をはずせ。あとは俺が看る」

「で、ですがピアキイ様……」

リリマが反論したが、彼が女官たちを一瞥するとふいと顔を背け、すぐすごと出て行った。

ふたりきりだ。けれどそんなことにも気が回らず、アルカナは目を閉じた。心なしか、ピアキイの側にいると熱が引いたような心地がしてくる。思考がはつきりしてきた。少し冷たいピアキイの指先は頬に置かれたままだ。

「……あの花、なんだったんですか？」

「なにつて？」ピアキイの声は存外穏やかだった。少しシェーロースディに似ている。

「白い花。……意味がわかりませんでした。あなたは、あの店にも来

なかったし。それとも、密会場所をお変えになったのですか？」

いくら二人きりとはいえ、平静な時ならばこんなにはつきりと尋ねることはなかっただろう。アルカナの問いに、ピアキイは少しばかり驚いていた。

「お前って、馬鹿だなあ」

本当に馬鹿にした口調だった。アルカナは目を開いて彼を見た。ぼんやりとした視界の中で、彼がにやりと笑っている。

「お前に見せるためにやってるのに、密会場所を変えるなんて意味ないだろ。あの花を贈ってる間はどこへも行かない。」白”は”お前”だからね」

「……どういう、こと？」

ピアキイはぐいと顔を寄せてきた。頬にあった手がまたもするする動いて、アルカナの髪を通って、頭のうしろに回る。何も考えられないうちに頭を持ち上げられて、唇を食むようにキスされた。

「白い花を贈ってる間は、お前のことだけ考えてるってこと」

a c t . 5 興入れ（後書き）

かなり今更な気もしますが、現時点、アルカナ嬢の閣下への信頼度は藁半紙よりも薄いです。

a c t・6 道は険しいというけれど（前書き）

今回暴力表現があります。苦手な方はご注意ください。

act・6 道は険しいというけれど

ピアキイが言ったとおり、一晩で熱は引いた。あれからすぐにアルカナは寝入ってしまったが、おきた時には彼は既にいなくなっていた。すっかり靄の晴れた頭で昨日の出来事を思い返してみる。

(…キスされた)

とたんに真っ赤になった。いくら結婚したからといって、自分とピアキイにそんな甘い雰囲気は漂うことなど、予想だにしていなかった。アルカナは頭が痛くなった。自分の夫になった男は大層思わせぶりらしい。昨日の結婚式でも、なんだかものすごく恥ずかしいことを言われた気がする。

アルカナはベッドから身を起こして部屋を見回した。これから長いこと住むことになる場所なのに、昨日はそれどころではなく、ゆっくり見る暇もなかった。

広い部屋だ。夫婦の部屋なのだから、質素なハイネント家のアルカナの部屋よりも大きいのは当たり前だが。ベッドはひとつしかないが、三人くらいなら悠々と眠れる広さがあるからしぶしぶ許容しよう。寝室とリビングで大きく部屋が区切られているらしく、シャワールームやお手洗いに通じる扉のほかに、家具はベッドとクローゼットなどしか置かれていない。

ベッドから降りると、自分の服がいつの間にか変わっていることに気がついた。白いネグリジェだ

シルクの上にレースがふんわりとかぶせられていて、寝巻きとは思えないほど上品で可愛いデザインだった。膝上までしかないスカートから、外にあまり出ないせいで青白い脚が伸びている。こんなデザイン、私には似合わないわ…アルカナはうんざりしてリビングに向かった。

リビングも広く美しい。中央に鎮座したテーブルも椅子も、絨毯

も、棚ひとつとっても高級品なのは見るも明らかだ。女官はどこにもいない。窓の外を見ると、もうすっかり日は昇っている。朝寝坊をするような女には女官も仕える気はないということだろうか。アルカナは寝室に戻って、大きなクローゼットを開けた。どれも白を基調とした服ばかりだ。仕切りによって分けられているものの、ピアキイとクローゼットは兼用らしい。アルカナ側の衣装のまぶしさに目を細めた。白は好きだが、流石にこれはやりすぎだ…しかし反論の権利を持たないアルカナはひとつため息をついて、一番地味なワンピースを選び取ると自分でさつさと着付け、化粧台の前できばきと髪をまとめてしまった。このくらいのこと、実家ではいつもやっていた。そこの女官よりもよほどうまく仕上げられると、姉からのお墨付きも貰っている。

元の服はどこに置けばいいのかしら、丁寧にネグリジエを畳んだところで、ようやく部屋に女官がやってきた。かなり渋々この部屋にやってきたようで、むつつりと寝室に入ってきた彼女は、起き上がって一人で身なりまで整えている主を見るなりぎょっとひるんだ。アルカナは嬉々として尋ねた。

「あ、あの、あなたがお世話になる女官の方ですか？」

女官は奇妙な顔をした。何も答えない。アルカナは慌てた。

「すみません、この寝巻き…どうしたらいいのかしらって思って…

あつ、もしかして、一人で着替えちゃいけなかったんでしょうか？  
つい、実家にいたときの癖で…」

フアナティライスト神殿はこの国の王城だ。当然、そこに仕える女官たちも、高い位を持つ貴族の娘たち。アルカナよりも間違いない目上の人間だ。アルカナにしてみれば、そんな人びとに命令するなど恐れ多い故のこの口調だったが、哀れな女官はこの小心者の主に心底戸惑っていた。何なのかしらこの子、そんな視線を隠し切れな  
いまま腕を伸ばす。

「…こちらへ」

「あ、はい！ど、どうぞ！」

「……」

女官は絶句してネグリジエを受け取った。それに気づかない鈍感なアルカナはなおも馬鹿丁寧な口調で尋ねた。

「すみません、私、今起きたばかりでよく事情も呑み込めてなくって……ここが、私の部屋でいいんですよね？あの、私、なにをしたらいいんでしょう？」

ミュウはあきれ返っていた。……この小娘、愚鈍すぎる。内心で悪態をつくくらいしかできない。この女よりもよほど格式高い中級貴族に生まれ、無理矢理、嫌がる先輩女官からこの娘の世話を押し付けられ、さてどういたぶってやるうかと思っていた矢先、出鼻をくじかれた気分だった。我らがファナテイリストきつての美男子、ピアキイの新妻。その座を射止めたのが、どことも知らぬ下級貴族の女と言われ、神殿の女官たちはいまや阿鼻叫喚の図、少しでも彼に近づいて取り入ろうとしていた者たちは、この女狐、もとい、アルカナ・ハイネントとやらを引つ裂いてやれと息巻いていた。ミュウはかの美青年を麗しいと思うものの、そういう男を追いかけると苦勞するだろうと見越して興味もなかったので何もいえないが、流石に自分よりも下級の女の世話などごめんだった。なんたる屈辱。きつとその女は鼻高々で、喜び勇んでミュウに無理難題を押し付けてくる、鼻持ちならない奴に違いない。そんな悪女の世話など誰が見るものか……そう思って来てみれば、「これ」である。

ネグリジエはすっかり完璧に畳まれて、白いワンピースを可憐に着こなし、さらにはこれ以上ないくらい絶妙の緩さで髪を結い上げている。女官顔負けの仕事だった。挙句の果てにはこの敬語。主が召使に恐縮してどうする。顔も身体も自分より貧相だが、この小娘



のインパクトにかけてはミュウは脱帽した。どんな居丈高な物言いをして、彼女、ヘコヘコと頭など下げてきそうである。

その彼女があんまりにも肩身が狭そうに縮こまっているものだから、思わずミュウは口に出していた。

「…アンタって、ピアキ様に取り入ってその座についたんじゃないの？」

「え？」

しまった、すっかり肩の力が抜けて、おまけに敬語も忘れていた。はつとするミュウに対して、アルカナはそんなことは当たり前だと言わんばかりに首をかしげた。ちよつと困った表情だった。

「…そんな噂に、なってるんですか？」

「噂もなにも、そうでなきゃ、なんでアンタみたいな下級も下級の小娘がこんなところにいるのよ」

アルカナは眉尻を下げた。途方に暮れている。自分でもよく分からないとも言いたげな表情だ。

「私にもわかりません」アルカナは本当にそう言った。

「このお興入れの話だって急な話で…あの、閣下は私のことをお嫌いのようだし…適当に選んだって、仰ってましたけど」

そうして、アルカナは自分の台詞に傷ついてうつむいた。そりやそうだ。アルカナの話が本当なら…あくまで本当ならば、だが…「適当に嫁にされる」なんて、女にとってはたまったもんじゃない。アルカナはぎゅつとワンピースのスカートをつかんでいる。これが演技ならたいしたものだ。だが、演技のはずなのだ。

ミュウには信じがたい話なのだ。彼女の着ているワンピースをはじめとして、クローゼットに仕舞われた彼女の衣装はすべてピアキの采配によるものだし、なにせ彼女が寝込んでいた昨晚、女官も寄せ付けずにこの娘の面倒をかいがしく看ていたのは他ならぬ彼女の夫なのだ。女官たちは、間違いなくこの小娘が、麗しのピアキイ閣下をたぶらかしたのだと思っている。ミュウも同意見だった。

あの女癖の悪いピアキ相手に結婚までこぎつけた女だ。そう思うと、彼女の挙動も白々しく見えた。ミュウは鼻を鳴らした。

「ま、いいけど」

こんな女に敬語を使ってやるのもばかばかしい。

「精々覚悟しておきなさいよ。オバサン連中はアンタを気に入ってるようだけど…私たち、みんなアンタの味方にはならないから」

アルカナは早速こんな場所に嫁いだことを後悔した。王宮なんて大嫌いだ。実家では使用人たちと目立ったトラブルも起こしたことはないし（トリノとは小さい頃殴り合いの喧嘩もしたものだ）、それどころか一緒になって仕事に精を出すくらいだったから、まさかこんなところでつまづく羽目になるとは思ってもいなかった。恐ろしいのは、ピアキだけだと勘違いしていた。

さてどうしよう。神殿に親しい人物がいるわけでもなし、女官に仕事をボイコットされては非常に不便だろう。アルカナの日々のスケジュールを握っているのは女官たちなのだから。かといってこの調子では、女官のご機嫌を取ろうとしたところで逆効果だ。

アルカナは深くため息をついた。胸を張る自分よりも美人の女官に弁明した。

「あの…すみません。私、本当に、あの方とは、今までお話ししたこともないんです。本当なんです。信じてもらえないかもしれないけど」

女官は何も言わずにアルカナを見下している。

「今日、しなければならなかったのがないのでしたら、申し訳ないのですが…神殿を案内していただいても、よろしいですか？この先、迷子になってあなたのお手を煩わせたくないの」

女官はついぞなにも言わなかったが、アルカナの願いを無碍にはしなかった。上から下までアルカナを眺め回したあと、無言のまま、

視線でついてこいと促され、アルカナはほっとして彼女のあとに続いた。

白亜の宮殿を歩く。まだ、こんなきらびやかな神殿に住むことなど実感も湧かなかった。部屋の位置を覚えられないんじゃないかしら。部屋の周辺をしっかりと頭に刻み込んでいると、女官がそっけなく言った。

「どこに行きたいのよ」

「え、えーと……」

アルカナはしばし考えて、目を輝かせた。

「あ、厨房！厨房に行ってみたいです。神殿の厨房っていうくらいですし、きつと大きいですね。それから、洗濯場と、お庭と、図書館と、……ああ、神殿なんだから礼拝堂にも行きたいです。それと……そうそう、立ち入り禁止の場所も教えてくださると嬉しいです。間違つて入ってしまうと困りますし」

実家でよく行った場所を片っ端から挙げていくと、女官はまじまじとアルカナを見てから、怪訝そうな顔をした。アルカナはなにかまじいことを言っただろうかと困り果てた。

「……アンタ、執務室はいいの？」

「え？執務室に行く機会なんてあるんですか？」

目を瞬くと、女官は目を細めた。アルカナの言葉を疑っているようだ。母には、仕事をする場所は男のテリトリーだから行つてはならぬといわれている。どんな用事があつても、父の執務室に事前の許可なく顔を出すことはなかった。神殿では違ふのだろうか。

女官は頭が痛いらしい。こめかみを押さえてぎゅっと目をつぶった。

「……まあいいわ。厨房はこつちよ」

探検は非常に楽しかった。女官はなんだかんだ言つて仕事は完遂してくれたし、大きな厨房に案内されたときは思わず歓声を上げて

コック達を驚かせ、洗濯場では女官たちが躍起になって落とそうとしていたテーブルクロスを瞬く間に落としてやり、庭では庭師と植物の世話について討論し、人の少ない廊下に出た頃には、女官の視線はかなり呆れたものとなっていた。

最初の謙虚さなどなんのその、すっかりうきうきと調子を取り戻したアルカナは、やってきた静かな通路を見回して問うた。

「ここは？」

「神官の方々の執務室よ。こちらは高等祭司の方々とかの仕事場。アンタの取り入ってるピアキ閣下の仕事場もここ」

「じゃあ、ここは立ち入り禁止ですね」

あっさりと身を翻した。女官は絶句した。

「……アンタに、執務室に押しかけて閣下にお目通り願おうって発想はないの？」

まるで妻ならば執務室に入る当然の権限を有するとも言いたげだ。「閣下のお仕事姿に興味があるといえはありますけど、男の仕事場には入らぬようにと母から教わっています」

より正確に言うなら、自分が淡い恋をする男性の仕事姿を、もちろん、見てみたい。見たいに決まっている。あのうつくしいみかん色の瞳が、真剣な光を宿して書類に注がれるのかと思うと鳥肌さえ立った。しかし彼から受けた数々の嫌がらせを思うと、どうせまたネチネチとアルカナを追いつめて泣かせてくるに違いないのだ。足も遠のく。

そんなことを露知らぬ女官はまだ納得がいかない様子だったが、詮索はしてこなかった。アルカナが行きましようと思いついてたところで、背後からお呼びがかかった。

「おや、アルカナ嬢？」

振り返ると、書類をひと束抱えたアンノが目丸くして立っていた。アルカナは慌てて深々と礼をする。

「アズラーノ様、すみません。お邪魔しております」

「アルカナ嬢、身体具合はいいのかい？ 顔色がまだよろしくないようだ」

「いえ、もうすっかり。今この方に神殿内を案内していただいていたのです」

アンノはまだ渋い顔だった。アルカナはその深刻な表情に眉をひそめた。それから、あつと気がついて頭を下げる。

「申し訳ありません、女がこんな場所に入り込むのは無礼でしたよね」

「イヤ、それはいいんだけど…」

アンノは思案顔だ。何か気にかかることがあるらしく、しきりに目を泳がせている。問おうと口を開くと、その前に彼にさえぎられた肩を押される。

「とにかく、早く部屋に戻んなさい。閣下に勘付かれる前に…」

「もう勘付いた」

よく通る穏やかな声に、アルカナが礼をする前に、金髪の彼はすでにアンノの隣に立っていた。彼の無機質な瞳に背筋が栗立った。ピアキイの周囲で空気が凍っていた。

「その手を離せ、アンノ。殺してやろうか」

瞬く間にアンノはアルカナから一歩下がった。ピアキイがなぜ怒っているのかまるで見当もつかず、アルカナは戸惑った。何か、何か言わなければ。アルカナが口を開く前に、しかしピアキイは動いていた。アルカナの手首をひつつかんで脇に立つと足を振り上げた。

あんまりにも素早い動きだった。背後からの女性のうめき声で、アルカナはようやく事情を呑み込んだ…ピアキイが女官を蹴ったのだ。「ピアキイ！」

アンノが鋭い声を上げたが、ピアキイは止まらない。倒れこんで咳き込む女官。腹を押さえ込んだところを、彼が女官の頭を思い切り踏みつけた。鈍い音が響いた。アルカナは立ち尽くした。

「三日部屋から出すと言ったはずだ」

冷え切った声だ。顔合わせのときとは違う。冷酷で情のかけらもない、無慈悲な声音だった。女官は震える声でつぶやいた。

「も、もうしわけ……」

「見せしめにその首落としてやろうか？」

ピアキイが首を傾けた。前髪がさりと落ちて、その美しさがまた恐ろしい。彼は二ヒルに口端を上げた。我ながら名案だといわんばかりの顔だ。怖い、怖い、怖い！

「ああ、それがいい。無能な奴にアルカナの世話をさせるわけにはいかないからな。この娘は”使い捨て”じゃないんだから」

最後は独り言のようにボソボソと喋っていたが、その間もずっと彼の足は女官に矛先を向けている。彼女の額から血が垂れ落ちるのを見て、アルカナは喉がひゅっと鳴った。

なにを言いたいんだ。ブルブル震える中で、アンノがピアキイを制す声がある。彼は止まらない。目の前が真っ暗になって、アルカナは、気がついたら思い切り叫んでいた。

「わ……、わたしが無理を言ったんです！」

ピタリと、ピアキイの足が止まった。ついと冷えた目がアルカナに向いた。アルカナは力の緩んだ手から自分の手首をはずすなり、かばうように女官に飛びついていった。ピアキイがアルカナを傷つける気はないと、何故か妙な確信があった。

「この方はちゃんといいました！部屋を出るなって言っていていらっしやいました！私が、もう体調も元通りだし、大丈夫だからと無理を言ったんです！この方は悪くありません、け……蹴るなら私を蹴ってください！」

矢継ぎ早にそう言って、蹲る女官の背中をぎゅっと抱くと、ピアキイはしばしその姿を見下ろして、やがてつまらなそうに視線をはずし、ため息をついた。

「それが本当だとしても、そうじゃないにしても、お前は単純で底なしの大馬鹿者だね」

「……え？」

「お前が俺の不興を買うことの意味が、まだわからない？ ねえ、おろかなアルカナ。お前の家族を生かすも殺すも、俺には簡単にできるんだよ？」

「……！」

アルカナはさつと青ざめた。ピアキイは温い笑みを浮かべると、アルカナの腕を引っ張り上げて立たせ、その唇にねっとりとしたキスを落としてきた。彼のつめたいくちびるに、アルカナの身体の奥がどんどん冷えていくのを感じた。満足したらしいピアキイは、突然するりとアルカナから身を離すと、何もなかったかのような顔をしてすたすたと歩き出す。啞然として何も言えないアルカナに、彼は実に楽しそうに言い残した。

「精々俺を楽しませろよ。せっかく手に入れた、大事な人形なんだから」

最低最悪だ。なんなんだあの男は！百年の恋も冷める思いでアルカナは憤った。背中には傷ついてぐったりとした女官を負ぶっている。アルカナよりも背の高い彼女を運ぶのは難しいものの、横を行くアンノに任せるのも癪だった。なにせこの男はあのピアキの後見人である。一体アンノはピアキにどんな教育をしたというのだ。そのアンノは、アルカナと女官に平謝りを繰り返していた。

「本当にすまない。ウチの馬鹿息子、いや閣下が…」

「アズラーノ様がお謝りになることはありません」

言えるものならば、後見人の責任としてそこに土下座してみせろとも言つてやりたかったが、流石に高等祭司相手にそんなことを言えるわけもなく、アルカナはかたくなに首を横に振った。元来、あのピアキイ本人が謝るべきことなのは事実だ。

女官を自分の部屋に運ぶなり、アルカナは低い声でアンノに言った。

「アズラーノ様、大変恐縮ですが、治癒術師を一人、お呼びいただいてもよろしいですか。あの方の話では、私は部屋から出てはならないそうですので」

「ああ、すぐに手配しよう。あとは代えの女官を…」

「いえ、必要ありません。話を大きくしたくないので、口の堅い医者だけお願いします」

「しかし…」

「私は一人でも身の回りのことはできますのでご心配はいりません。それに、話が広まればピアキ閣下の名に傷がつきますし、ひいては彼のご親族でいらっしゃる世界王陛下への不信にもつながりかねません。くれぐれも、このことは内密に」

アルカナだって貴族としてのプライドは多少なりとあるし、その



上で、いかな男であろうと、夫に恥をかかせるわけにはいかなかった。夫を守り、家を守り、使用人を守れ。幼少の頃から母に口うるさく言われた言葉だ。貴族の女としての使命だ。

不機嫌ながらもその教えを遵守するアルカナに、アンノは心底感銘を受けたようだった。しばしじっとアルカナを見据えてから、きりりとした仕事人の顔をして「待ってる」と言うなり、彼は駆け出していった。彼の後姿が見えなくなってから、アルカナは部屋に入り、枕を高く盛って女官を寝かせ、棚からきれいな手ぬぐいを見つけて出して彼女の切れたこめかみを圧迫した。どこかに薬がないかと棚をひっくり返しているところで、嫁入り道具にまぎれて入っていた薬草が見つかった。ピアキイが以前送ってきた野草のひとつだ。アルカナは舌打ちしたい気分でもみこむと、彼女の傷口に当てた。女官がうめいた。

「少し我慢してください」

アルカナは新しい手ぬぐいに水差しの水をひたして腫れに当てた。手早く応急処置を進めていく主の姿を、女官は薄っすらと目を開けてみている。

「う…なんで、あんたが私を…」

「痛むでしょう、喋らないでください」

アルカナはぴしゃりと言った。

「母が言っていました。貴族の女の仕事は、夫を立てて、家を切り盛りして、使用人を守ることだ。もしピアキイ閣下がまかり間違つてあなたを殺してしまったら大問題になります。あの方は職を失うかもしれない。それだけです。私自身と、ピアキイ様のためにやっただけです」

さらりと言い放って、引き続き手当てするアルカナに、女官はふてくされたように口をつぐんだ。

結論から言えば、女官は無事治療されて傷跡ひとつ残ることはなかった。女官はアルカナに借りを作ったと思っっているらしく、不承ではあるが、きちんと職務をまっとうしてくれるようになった。彼女の名前はミュウというらしい。あくまで借りを返すだけだという彼女は、人前以外ではアルカナに敬語のひとつも使わなかったが、アルカナはこれで随分すこしやすくなるだろうと踏んでいた。

アルカナはおとなしく二日間を部屋で過ごした。ピアキイと顔をあわせることだけが恐怖だったが、仕事が忙しいのか、はたまた彼のライフワークを崩すことなく浮気でもしているのかは定かではないが、アルカナの知る限り、ピアキイが夫婦の部屋に来ることはなかった。アルカナは先日 of 出来事が引っかかりつつもミュウに相談した。ミュウにとって、ピアキイの株は目下大暴落中らしい。当然の結果だ。

「ねえミュウさん、ピアキイ様にとって、私との結婚って一体どういう意図があるのかしら」

「ハア？」

ミュウは怪訝な顔を隠すことなくアルカナに向けた。

「私への暴力事件をもう忘れちゃったの？あれじゃどう考えたって、アンタに惚れて誰の目にも触れさせたくない嫉妬心丸出しの男の図でしょ。アズラーノ様のこと、殺しそうな目で見てたわよ」

「…ピアキイ様が、私なんかにそんなこと。そもそも、私…顔合わせのときの印象は最悪だったし」

「最悪？」

アルカナはしばし悩んでから、「誰にも言わないでくださいね」と前置きして、心持ち声を低めて語った。

「私、顔合わせの前に、ピアキイ様とは一応、面識があるんです。

2、3日に一度、お顔を拝見するくらいに」

「なんですって？」

「直接お会いしたわけではないんです。ハイネント家がどこに建つてるかご存知…じゃないですよ。平民街の大きな宿の向かいで、私の部屋からはその宿がよく見えるんです。ピアキイ様はよく宿の前で待ち合わせをしていらっしやって…その、いつも違う女性の方と」

ミュウは呆れ返った様子で目を細めた。アルカナはますます縮こまった。

「ピアキイ様は、いつも私が覗き見しているのをご存知でした。顔合わせの時にそれを言われて…私のこと、すごく軽蔑したみたいでした」

「軽蔑ウ？」ミュウは不満顔だ。

「見目麗しい男ってだけでそりや目立つのに、見るたびに女をとつかえひつかえしてれば、気にするなってほうが無理な話でしょ。閣下のこと眺めてる女なんてあんた以外にも大量にいたんじゃない？というか、アンタがいつも閣下を見てたことを知ってるってことは、閣下の方こそアンタをいつも見てたってことじゃない」

「…え？」

アルカナは目を瞬いた。そういえばそうだ。ピアキイに自分のことが気づかれたのは、あの雨の日だとばかり思っていたが、あの日、ピアキイへの思慕を自覚して以来、むしろ自分は彼の後姿しか見られなくなっていた。とすれば、ピアキイがアルカナの視線に気づいたのは、もっと前の話ということになる。いつの間に、いつから、アルカナの視線に気づいていたのだろう。

ミュウは嘆息した。

「少なくとも、閣下がアンタにご執心だというのは確か。ホラ見なさいこの花。毎日届けられちゃ手入れも大変だわ」

「え？…この部屋の花って、閣下が用意されているんですか？」

ミュウが花瓶に差している金色の花に、アルカナは嫌な予感がした。そして、その考えはあながち間違いないだろうと推測する。アルカナの口元が引きつった。

「…ご執心なんて、そんなこと、あるわけないです」

最低最悪。これでチクリと痛んでしまう自分の胸が。あんな男への恋なんてさつさと冷めてしまえばいいのに。嫌いになりきれない自分がこんなにも悔しい。

「ピアキイ様は今日もお越しになりません」

「なんで？」

「だって、花が白くないから」

ミュウは憤っていた。いつもウジウジとつむいている自分の主も大概嫌いだが、それにしたってピアキイ閣下の横暴に関しては同情を禁じえない。結婚してから三日、自分からはまるで妻に会いに行かないばかりか、部屋から出しもしないで、花の色で浮気予告までする始末。これで女官達にまで嫌われるなんて散々だ。アルカナの様子から、彼女が望んでこの神殿にやってきたわけではないのはミュウにも薄々分かっていた。なにせあの娘は富も名誉も興味はないし、豪華なドレスにも見向きもしない。聞くところによると趣味は家事と裁縫らしい。世界王の甥の妻というにはあまりに庶民派すぎる。

アルカナがすっかり諦めきった表情で大きなベッドにもぐりこむのを見送って、ミュウは部屋を出た。アルカナがピアキイに憧れているのは見るも明らかだ。いくらなんでも、好きでもない相手の言うことを逐一聞いてやるほどの主は小心でもないだろう。一方でピアキイが、アルカナに並々ならぬ執着を抱いているのは身をもって理解した。それが恋愛か否かは定かではないが、病み上がりの妻が外に出たくらいで、付き人の頭を踏み潰そうとするくらいには、彼はアルカナを側においておきたいのだ。お陰で、「アルカナを外に出すな」なんて命令は聞いていないと、言い訳する間もなかった。

否、それで正解だろう。おそらく口に出したら女官たち全員が血だるまになっていた。

面倒な夫婦だ：ミュウはため息をつきかけて、ふと手にした荷物が足りないことに気づいた。包みをひとつ、アルカナの部屋においてきたらしい。ミュウはきびすを返した。忘れ物を主の部屋においてきたと言え、女官長にこっそり絞られてしまふ。女官長をはじめとする年配の女官達はみな、誰に対しても礼儀正しく遠慮がちなアルカナがお気に入りの方だった。それが若い娘達の反感をさらに買っているなど、本人はまるで予想だにしているとは思わなかった。慌てて、アルカナの部屋への道を辿ろうとしたところで、しかしミュウは足を止めた。当分は姿を見るのも恐ろしい男が、彼の後見人とともに歩いているのを見つけてしまったからだ。とっさにミュウは、近くにある柱に身を潜めた。

アンノのほうは、涼しい顔のピアキを相手に渋面だった。

「ピアキ、いくらなんでもアレはやりすぎだ」

「アレって？」

「女官に怪我をさせただろう」

ミュウはドキリとした。先日的一件事を、アンノが言及しているらしい。しかしピアキは夜闇の中でもかすまないその美貌をさらし、綺麗なみかん色の瞳を細めてすつとぼけた。

「ああ：そういうばそんなこともあったかな」

「何を言うんだ！いいかピアキ。お前は怪我や死に対して無頓着すぎる。一体全体、おまえは俺の家でなにを学んできたっていうんだ？俺はおまえをそんな風に育てた覚えはないぞ」

「ふるつくさい言い方」ピアキが嘲笑した。

「茶化すな！アルカナ嬢に愛想を尽かされても知らないぞ」

「それは困るな」

まったく困っていない調子でピアキは返した。その白々しさに、ミュウはいっそ感服すらした。ああはなりたくない。するとピアキ

イは、麗しい造形の顔をうつとりと緩めて、夢見る口調で言った。  
「今日で三日だ。」血”も定着しただろう。ふふっ…アルカナは何年で気づくかな。反応が今から楽しみだ」

「…何の説明もなしに血を飲ませるなんて。シェ口様は一体何を考えているんだ」

アンノが頭を抱えた。血？ミュウは情報を整理した。そういえば、アルカナが聞いてきた。昨日だっただろうか。王族の結婚式では、花嫁に血を飲ませるのは当たり前なのかと。そんな話聞いたこともなかったし、そもそも何の血を飲むというんだ。血に似たワインでも飲まれたのだろうと一笑してやってものの、アルカナは釈然としない様子だった。…まさか、その話と何か関係が？探偵にでもなった気分で、ミュウはますます身を縮こまらせた。その時、ピアキイとアンノがミュウの潜む柱の前を通り過ぎた。

「伯父上が何か言うはずがない。あの方は放任主義だしな。…ああ、そうだ。おいアンノ、フアレシアをアルカナのところへ呼べよ。子供の世話でもすれば、嫌でもアイツも自分のことに気づくだろう？」

「……お前は歪んでる」

アンノのつぶやきに、ピアキイはくすりと笑った。月よりも眩しく怪しく儚く、悪魔のように恐ろしく、彼は甘く言ってみせた。

「歪んでる？そんなの当たり前だ」

蠱惑的にわらう天使のような悪魔は不敵に言い放った。

「我ら不老不死一派、俺達は、人間どもとは格が違うんだよ」

act・8 ライバルは三歳児

翌日、蒼白な評定で部屋にやってきたミュウに、アルカナは首をかしげた。昨日彼女が忘れていった包みを持って、「ミュウさん、忘れ物ですよ」と差し出すと、彼女はひったくるように包みを抱えた。

アルカナは眉尻を下げた。

「ミュウさん、どこかお具合が悪いのですか？ 顔色がよくありません」

「大丈夫よ」

「お医者様をお呼びしたほうが…」

「大丈夫だってば！」

少々きつい口調で言い、ミュウは青い花を生ける作業に戻った。アルカナはそれ以上追及することもできず、何か気がまぎれる話題を提供しようと頭をひねった。

「…あ、そうだ。今日から私、部屋から出てもいいんですよ。」

私、何をすればいいんでしょう？」

「アンタにもうちよつと頭が足りてたら夫の執務の手伝いもできたでしょうけど？」

ミュウの痛烈な嫌味に、アルカナはたじろいだ。唇を尖らせて、「でも、政治のむずかしいお話に女が口を出すなんて…」と口ごもるアルカナに、ようやくとミュウも口端を上げた。緊張もほぐれたらしい、彼女の口調が幾分かやさしくなった。

「昼になったらアズラーノ卿がご息女をお連れになるそうよ。アズラーノ卿の奥様はお体が弱くていらっしゃるから、お子様の世話もままならないのですって」

「それで、私がお息女のお世話を？」

「そういうことになるわね」

そうしてミュウはまた憂鬱そうにため息をついた。一方でアルカナ

は少し心が浮き足立った。

「それなら任せてください！私、子供って大好きなんです」

「…ねえアンタ、”不老不死”って信じる？」

「その子はどういう…え？不老不死？」

いきなり話題がすりかわって、アルカナは話をしながらてきぱきと髪を結う手を止めた。きょとんとして振り返ると、ミュウは相変わらず心ここにあらずだ。アルカナは目を瞬いた。

「不老不死って、御伽噺にあるやつですよ？双子神が死ぬとき、ふたりの魂がよっつに引き裂かれて、それぞれよっつの不老不死の一族を作ったっていう」

「…御伽噺…そう、よね。御伽噺」

「あ、そういえば、世界王陛下の家系、エフアイン家、でしたっけ？その一族のひとつと同じ名前ですね。エフアイン、ソリティエ、シエルテミナ、ノルツセルって名前だったと思いますけど。このお話が由来にでもなってるんでしょうか」

ミュウは答えなかった。一体どうしたのだろう。アルカナはかんざしを髪にはめ込んで彼女に向き直った。

「ミュウさん、本当に大丈夫ですか？その不老不死がどうかしたんですか？」

「…なんでもないわ」

あくまで頑ななミュウにアルカナは口をつぐんだ。それから、この世界に伝わるいくつかの御伽噺を思い出す。

この国では、御伽噺のキーワードには「不老不死」というのが定石だった。例えば、先の双子神の話もそう。それと、世界の危機に現れるという「赤の巫子」とかいう救世主の物語も、確かその救世主が不老不死という設定だった。…要するに、幽霊だとか死神だとか天使とかいう存在と一緒に。信じている人は信じている。そんな不確かであいまいな存在。



ひょっとしてミュウも不老不死を信じていたのだろうか。ともすれば悪いことをした。不用意に「御伽噺」だなんて言ったから傷つけたかもしれない。謝ったほうがいいかと口を開いたところで、

「ファレイア！ちよつと待ちなさい！フィーちゃん、駄目だよ！」

今までに聞いたなかでもワントーン高いアンノの声が聞こえたと思つた直後、けたたましい音を立てて部屋扉が開いた。気まずい空気が吹き飛ばし、目を丸くしてアルカナとミュウが注目した先には、ほんの小さな女の子がずっと仁王立ちしていた。

「アルカナっていうのへやは、ここかしら！」

ふんぞり返つた女の子はキンキン声で言つた。アルカナはぽかんとした。

「は、はい……ここですが」

「ふーん」

女の子はズンズンとアルカナの足元まで来ると、大仰に腕組みをして、じろじろアルカナを舐めるように見た。3、4歳くらいだろうか。かわいらしいお洋服に身を包んでいるのを見るに、どこかいとここの息女なのは確かだ。アルカナはピンときた。彼女がアンノの娘に違いない。昼と言いつつ今はまだ朝だが、予定が早まつたのだろうか。アルカナはにっこりして女の子と視線を合わせた。

「あなたがアズラーノ様の娘さん？」

「そーよ！アンタがピアさまのおよめさんね！」

「ええ」

ピア様？可愛い渾名だ。あの最低男からは想像もつかない。内心でほくそ笑んでいると、女の子はハツと鼻で笑つた。明らかな嘲り笑い。アルカナは目を見開いた。

「なーんだ！たいしたことないじゃない！」

「……うん？」

女の子は居丈高に胸を張ると、ピアキィそっくりの不敵な笑みでアルカナを見た。一体この子は何を言つたのだろうか？自分の聞き間違

いだろうか。アルカナが気を取り直して口を開くと、女の子は実に偉そうに続けた。

「アンタみたいなブサイクなんかより、フィーのほうがずっと、ずっと、ピアさまにふさわしいの！フィー、おっきくなったらピアさまのおよめさんになるんだもの！」

「……ええ？」

開口一番がライバル宣言、いやそればかりか、かなり失礼なことを並べ立てられた。アルカナは二の句も継げない。怒るところか呆れることも笑うこともできず、ただただこの小さな女の子に口をあめぐり開けていると、開け放した扉のむこうから、アンノがひょっこり顔を出した。

「アアア…駄目だよフィー、アルカナ嬢にご迷惑をかけては」

「パパ！」

女の子がぐるりと振り返った。やはり、彼女はアンノの娘ということとで間違いないらしい。よく見ると、目元のあたりがアンノそっくりだった。彼女は父親に飛びつくなり、アルカナを遠慮なく指差した。

「パパア、パパア、フィーをピアさまのおよめさんにしてくれるんでしょ？なんであんなのがおよめさんなの？ねえパパ、フィーも、フィーもピアさまのおよめさんになりたいー！」

「ごめんなフィーちゃん。フィーはピア様のお嫁さんにはなれないんだよ…！すいませんねエ、アルカナ嬢。うちの娘がご迷惑をかけて」

「い、いえ…では、そちらが？」

「ハイ。娘のファレイアです。もうすぐ四歳になるんですが、まあちょっとばかり失礼なコト言っても大目に見てやってくださいね」

「はあ」

それにしたって、いくら三歳児と言えども初対面の女性に「ブサイク」はないだろうと思いつつ、アルカナはポーカーフェイスを気取って笑みを崩さなかった。ミュウは何も言わずにじっとファレイア

を見つめている。苦々しい顔なのは、ピアキイと似たような表情を浮かべるこの女の子が気に食わないからだろうか。

気を取り直して、アルカナはフアレイアに言った。

「はじめまして、アルカナといいます。えっと、フィーでいいかしら」

「だめよ！」

フアレイアは勝ち誇ったように言った。

「フィーのことフィーって呼んでいいのはね、パパとママとピアさまだけなんだから！」

「そう、じゃあ」

「アルカナはフィーのこと、”フアレイアさま”って呼びなさい！」とんだ女王様だ。アンノはさすがに見咎めて声を荒げようとしたが、アルカナは別段気にしなかった。自分が小さい頃も、トリノに似たようなわがママを言ったものだ。懐かしくなつてアルカナは目を細めた。

「そうですか。じゃあフアレイア様とお呼びしますね」

「そーよ！」

「ああ、すいませんねエ、アルカナ嬢」

「いえ、お気になさらないください。アズラーノ様がお帰りになるまでお世話させていただけばいいのですか？」

「はい。本当は昼食つてからの出勤だったんですが、この子がはやく閣下の嫁に会わせると聞かないモンで」

「へえ」

このお嬢様は、ピアキイに首つ丈のようだ。あの最悪が人の姿をして歩いているような男も、案外子供には優しいのだろうか。だとすれば随分と笑える話である。アルカナは愛想良く返した。

「どうせすることもないですし、大丈夫です。フアレイア様、お預かりいたしますね」

「よろしく願います。定時には迎えにくるんで。フィーちゃん、いい子でいるんだよ？」

「はい！」

元気のいい返事だ。アンノも満足したのか、ひとつ大きく頷くと部屋を出て行った。残されたアルカナは、じつところを見上げるフアレイアを見下ろした。どうにも視線が痛い。

アルカナは努めて笑顔を取り繕った。

「さあ、フアレイア様。何をして遊びましょうか？」

「えーっと、えーっと、おままごと！」

アルカナはおやと目を瞬いた。アルカナに対して敵意満々だから、ひよっとして何かにつけて文句のひとつでも言われるかと思っていたが、存外素直な返事である。しかも、随分と可愛い遊びだ。アルカナは小さい頃は大概トリノを馬にして遊んだものだった。

なんだかんだ言っても三歳児よね、ほほえましい。アルカナは頷いた。

「いいですね。フアレイア様はなにをやりたいの？」

「おひめさま！アンタはフィーの”げぼく”ね！」

「……」

下僕なんて難しいことば、よく知ってるわね。全く関係のない台詞が飛び出しそうになって、アルカナは口を閉ざした。思わずミュウを見ると、笑いを必死になってかみ殺しながら悶えている。よほど三歳児にしてやられるアルカナが痛快らしい。盛大にため息をついた。

アルカナの思いなど知ってか知らずか：おそらく知る由もないだろう…フアレイアは楽しそうに続けた。

「でね、でね、そのオバサンはフィーをいじめるわるい魔女ね！」

「おば…っ!？」

フアレイアの中ではミュウも配役に名を連ねているらしい。アルカナは苦笑した。ミュウは笑みもいずこかへ吹き飛ばして怒り狂っている。

「それでー、ピアさまがフィーをたすけてくれる王子さま！」

「え？」

アルカナは慌てた。

「だ、駄目ですよフレイア様。ピアキ様はお仕事でお忙しいのですから、おままことはできません」

「なんで？」

フレイアの顔は至極無邪気だった。

「ピアさまはいつも、おしごとよりフィーのことだいにしてくれたもん！」

「で、でも……」

これがせめて、相手がアンノあたりならアルカナでも対処のしようがあったが、ピアキではまずい。アルカナもミュウも、先日の一件のショックからだってまだ立ち直りきつてはいないのだ。仕事のこともそうだが、まずこんな子供の戯言を聞いて、あのピアキがどんな暴挙に出るか。

煮え切らない返事のアルカナに痺れを切らしたのか、フレイアの表情の雲行きが怪しくなってきた。口元がしわしわになって、涙をこらえ始める。アルカナははっとした。

「フレイア様、」

「うわああああん！！やだ、やだやだやだああつ！！フィー、ピアさまとあそぶー！」

堰を切ったようにフレイアが泣き出した。よほどピアキは彼女に気に入られているらしい。どうしたものかとオロオロしていると扉がキィと音を立てて開いた。フレイアは泣き止まない。ミュウがぎくりと肩をこわばらせた。アルカナは息を吞んで、反射的にフレイアを抱き寄せていた。

金髪の暴君は、みかん色の瞳を眠たげにこすれながら、ふらりと部屋に入ってきた。随分とお疲れらしい。フレイアがピアキの姿に気づいて、ピタリと涙を止めた。

「ピアさま！」

「あ？」

ピアキィはそこでようやくフアレイアの姿に気づいたようだ。ぼんやりしたまま問いかけてくる。

「……アー……なんでもういるんだよ」

「ピアさま、ピアさま、フィーに会いにきてくれたの？」

「めんどくさ……」

アルカナは青ざめた。彼のこの調子では、明らかにフアレイアを疎んじている。子供好きとは思えない！とっさに立ち上がって、アルカナはフアレイアを庇うように立った。

「お疲れ様です、閣下」

「ん……」

「お休みになれますか？申し訳ありません、騒がしくて……」

ピアキィはアルカナと、自分の足元に纏わりつくフアレイアを見比べた。そして薄っすらと微笑む。この笑顔に騙されてはいけない、アルカナは気張った。

「なに？心配しなくてもこのガキを蹴り飛ばしたりはしないから安心しろよ」

「え？」アルカナは拍子抜けした。

「アンノの娘に手出ししたら、俺の後ろ盾がなくなるだろ」

アルカナは絶句した。やはり最低男は最低だった。要するにアンノの娘でさえなければ手出しもいとわないということか。

ものも言えないアルカナにはお構いなしに、彼は嫌悪感むき出しでフアレイアを見下ろしている。ピアキィのこういう表情も珍しい。ミウを蹴りつけた時ですら、底知れぬ微笑みをたたえていたこの男が。

「あーあ、昼までアルカナを枕に寝倒す予定だったのに」

「な！」アルカナが真っ赤になって狼狽した。ピアキィは気にも留めない。

「ま、いいか。コイツは女官に押し付けられさ、おいでアルカナ」  
「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待ってください！」

無理だ。いや、夫婦になつたら、寢所を共にするのは当然かもしれない。だが、結婚してから同じベッドで眠つたためしなど無いし（そもそも彼がこの部屋にいるのを見ることさえ結婚式の後に倒れて以来だ）、この平凡もいいところのアルカナが、絶世の美青年であるピアキイと夫婦になつたところからしてすでおかしいのだ。アルカナは赤面したままぶんぶんと首を横に振つた。

「だつ、大体、今日の花は白くないじゃないですか」

苦し紛れに言つてやると、ピアキイはちらりと花瓶の中身を見て口端を上げた。アルカナの腕をぐいと引いて囁くように甘く言う。

「嫉妬した？安心しろよ、今日の恋人は女じゃなくて仕事だから」

「し、し、嫉妬なんて！」

「ピアさま！」

悲鳴を上げんばかりに抗議の声を漏らすアルカナは、しかし容赦なく足を踏んづけられて悶絶した。アルカナへの敵対心をメラメラ燃やして、ファレイアがピアキイの脚に抱きついた。この三歳児ときたら、この暴力王子に対して怖いもの知らずな。きっと将来は大物になるだろう。

「ねえねえピアさま、フィーといっしょにおままごとしよう？あのね、フィーがおひめさまでね、ピアさまがおうじさま！アルカナはフィーのげぼく！」

「へえ？」

いつファレイアがピアキイに蹴られるかとひやひやしていると、意外にも彼は興味を示した。器用に片眉を上げてファレイアを見下ろした。

「そりゃいいな」

「でしょ？でしょ？ねえピアさま、でね…」

「ただで残念なことに、俺にはもう心に決めたお姫様がいるんだ」

これにはファレイアだけでなく、アルカナもミュウも目を丸くした。ピアキイはにやりと笑うと、ファレイアを引っぺがしてアルカ

ナを抱き上げた。突然視界がぐるりと回って、アルカナは思わずピアキの首にしがみつく。端正な顔が眼前に広がって、アルカナはぎくりとした。

ピアキは白々しくも満面の笑みを浮かべた。

「フィー、俺はこの下僕と一緒にベッドに行くから、その女官とおとなしく遊んでろよ。寝室の扉を開けたらオシオキするからな」

「ちょ、ちょ、ピアキ様!？」

問答無用でアルカナを連れて寝室へ去っていくピアキと、呆然としてその場に立ち竦むフアレアの図を一步下がったところで見守っていたミュウは、ひとつため息をついた。

「……とんだ三角関係もあったものね」

とにかくも、一拍あとにまた泣き出すであろうフアレアをどうしたものか。貧乏くじを引かされたミュウは心の中で号泣した。



a c t・8 ライバルは三歳児（後書き）

三歳児がどの程度の言語能力を持つのか調査していないので、フアレシアの語彙が達者すぎるかもしれません。あくまで物語としてお楽しみくだされば幸いです。

## act・9 気まぐれなかの人

アルカナとファレイアの関係は最悪だった。

日常は流れていった。あつという間にアルカナが輿入れしてから二ヶ月ほどが経ち、ようやくとアルカナはファナテイリスト神殿での生活に慣れつつあった。ミユウと年配の女官以外からは相変わらず嫌われているようだが、不便の無いようにミユウが随分と気を使ってくれているのか、アルカナはさしたる不満もなく暮らしていた。時折ふらりと現れるピアキイに対応することを除けば、アルカナの仕事はもっぱらファレイアの子守くらいで、あとは至極平和な日々だ。

しかし、困ったことに、肝心のファレイアとは険悪な仲なのが、アルカナの目下の悩みだった。初対面が「アレ」だったことも原因のひとつであろうが、ファレイアはいかにピアキイに冷たくされようと嫌いになる気は毛頭ないようだった。まったく健気な話である。

しかもファレイアは、三歳児にして随分と策士であった。

時折意図的に迷子になったり、人前でかんしゃくを起こしたりと、外でアルカナを困らせることで、女官ばかりでなく神官たちの間でも、アルカナの評判は底辺だった。子供の世話ひとつできないのね、先日声高な陰口を聞いてしまってから、アルカナの気分は落ち込んでいた。アルカナの味方の前では下手に動かないのも、ファレイアの理知たる所以である。

活けられた青い花を見てアルカナはまたひとつ溜息を漏らす。今日もかの人は仕事だ。もともと自分が愛されているはずもないが、最近では夜になれば部屋に戻ってきたし、そのほかにもなにかにつけてピアキイはアルカナを構っていた。妻というよりも、それは新しいおもちゃを使いたがるような態度だったけれど、それでも、婚前

に彼が毎日別の女性と逢瀬を交わしていたことを思えば、アルカナは随分と長いことピアキイの興味をひいている。ちなみに、アルカナは自分からピアキイに擦り寄ることなど一度もないことは明言しておく。

「アルカナあ」

今日も高飛車なフアレイアの声に、アルカナは寂しげな瞳を隠して笑顔で振り返った。どんなにこの子供が姑息でも、自分の仕事は彼女の世話である。きちんと職務をまっとうしなければ、それこそ「子供の世話ひとつできない」女になってしまうから。

「なんですか、フアレイア様？」

「フイー、ケーキたべたい！」

「ケーキ？」

少なくとも部屋にいるときは、フアレイアは比較のおとなしかった。時々こうしてわがままを言うものの、遊具を与えれば一人でも遊んでいられるし、物語を読んでやれば昼寝もする。別段彼女は聞き分けの悪い子供というわけでもないのだ。

時計を見ると、もうすぐお茶の時間だった。アルカナはミュウに目配せしてお茶の準備を頼むと、フアレイアに笑いかけた。

「厨房にケーキがあるかは分かりませんが、いい頃合ですから、お茶にしましょうか。さあ、手を洗って席につきましょうね」

優しく言ってやれば、フアレイアは素直に手を洗うために洗面台へと向かっていった。アルカナがフアレイアが遊具で散らかしたテーブルの上を片付けていると、壁際から声が聞こえてきた。

『アルカナ？』

「ピアキイ様ですか？」

棚に置いた伝達用の碗を取り上げてアルカナは返した。彼が部屋に連絡を入れてくるとは珍しい。

最近薄々と分かってきたのだが、ピアキイは誠実でもないしむしろ非道な男ではあるけれど、妙なところで常識的だった。残業も用

事（おそらく女性との逢瀬も含まれる）もなければ必ず帰ってくるし、仕事はまじめにこなしているらしいし。同じフアナテイライスト出身なのに、大幅に価値観の違う男を相手にしているような気分だった。王族というものは誰もこんなものなのだろうか。

彼の好き嫌いも大体わかってきた。ピアキは野菜が嫌いらしく、人の目を盗んでよくアルカナの皿に勝手に移してきた。寝相が少し悪くて、布団を蹴っては寒がってあるかなに抱きついてくる。そう、寒がりで、よく袖のすそを指先まで引つ張り上げて、何枚も服を重ねて着込んでいることも知った。その姿だけを取り上げれば、ちょっと子供っぽいけれど、普通の青年である。女遊びが激しくて、あの暴力的で冷酷な一面さえなければ。

だからだろうか。この二ヶ月、ピアキへの恐ろしさはすっかりなりを潜めていた。彼のミウウへの仕打ちを忘れたわけではない。愛されているだなんてうぬぼれてもいない。けれど、思っていたよりも幸福な結婚生活を送れるんじゃないかと思いはじめていた。だからここ最近、破天荒な彼の挙動に驚くことはあるものの、ピアキと話するときもそう緊張せずに済んでいたし、彼の美しい顔もまともに見られるようになった。今も、彼からの突然の連絡におやと思いはしたものの、それほど動じることもなかったのだ。

「珍しいですね。何かありましたか？」

『書類、ない？ベッドの脇に置き忘れた気がするんだけど』

「書類？」

腕を片手に寝室に入ると、本当だ、ベッド脇の小机の上に、ひと束の書類とペンがおきっぱなしになっていた。そういえば昨夜、ベッドに寝そべってひたすら書類作りに励んでいたっけ。アルカナは丁寧な字で仕上げられた書類を取り上げて、腕に向かって言った。

「ありましたよ。ペンもお忘れのようですけど」

『ああ、それ。執務室まで届けに来て』

「はい。あ、でも、フアレイア様をお昼寝させるまでは、お待ちい

ただきたいんですが」

『フィーなんて放っておけばいいのに』

平気でそんなことを口にするピアキイは、言うが早いか一方的に連絡を切った。通信の途切れるブツツという音が無機質に響く。ちょうどその時、ミュウが部屋に戻ってきた。手にしたトレイには、ティーセットと、綺麗にデコレーションがなされたケーキが載っている。アルカナはほっと安堵の息をついた。

「ミュウさん、私ちよっと出なければならんですけど、ファレイア様をお任せしてもよろしいでしょうか？」

ミュウは渋い顔をした。この二ヶ月、これでいて過保護なミュウは、アルカナが部屋を出るときには必ずお供にしていた。この神殿はアルカナの家でもあるのだし、神殿の警備は万全なのだから、本来アルカナは自由にその辺りをぶらついてもいいはずだった。しかし、お忘れなきよう、アルカナは若い女官たちから嫌われている。ミュウが目を光らせていなければ、どこで陰湿な女性たちの苛めに遭うか分かったものではない。

明らかに不服そうなミュウの顔を見て、アルカナは苦笑する。

「大丈夫ですよ。閣下の執務室にお邪魔して、書類をお届けしていただくだけです。すぐに戻ってきます」

「それなら私が」

「ミュウさんはここにいてください」

アルカナはきつぱりと言った。ピアキイの過去の暴挙を思い出し、もう完璧に癒えた傷が痛むのかミュウは咄嗟にこめかみの辺りをさすった。

「でも……」

「女官の方々だって、いくらなんでも私なんかには何かするほどお暇でもないでしょう？何かあったらすぐに帰ってきます。ね？ファレイア様にはうまく言っておいてください。私がピアキイ様のところに行ったなんて知れたら、また拗ねてしまわれますから」

ミュウが何も反論できなくなったところで、アルカナは書類とペンを抱えて部屋を飛び出した。なんだかんだ言っても、一人で神殿を歩くというのも楽しみだったのだ。アルカナは少しわくわくした。うまくいけば、見れないだろうと期待もしていなかったピアキの仕事風景もちらりと見えるかもしれない。随分有能だという噂は聞くけれど、あのピアキが、まじめな顔をしてみかん色の視線を書類に滑らせるところなんて、さぞかし格好いいに違いない。

すっかり浮かれていたおかげで、アルカナはしばらく、これ見よがしにチラチラとアルカナをうかがっている二人組の女官に気づいていなかった。彼女らのすぐそばまで来たところで、二人が底知れぬ笑みを浮かべているのが目に入った。なんだか嫌な感じだ。アルカナはせっかく浮き立った気持ちだが、みるみるうちにしぼんでいくのを感じた。

「…ホラ、あれよ。ピアキ閣下のところに来た恥知らず」

「アンノ様のご息女のお世話をしてるんですって。保護者気取りだって。ファレイア様もおかしいそう」

アルカナは表情を曇らせた。恥知らず。じゃあどうすればよかったのだろう。親の出世をふいにしても、結婚を断ればよかったとでもいうのか？ファレイアはかわいいそうなのか？私は、彼女を不幸にしているのか？ただお世話しているだけだし、最近ようやく打ち解けてきたところだというのに…完全に立ち止まっていたアルカナの腕から書類が滑り落ちそうになって、はっと我に返った。

いけない。こうしてピアキの元に嫁入りしてきた以上、自分は毅然としていなければ。身分が低いのは仕方が無い。そういう家に生まれてしまって、なぜだかピアキの目に我が家が留まってしまつて。けれどいいじゃないか。これまでそれなりに幸せな人生だったし、ミュウという味方もいる。アンノもなにかにつけて気遣ってくれる。ピアキは我儆だが、悪いばかりの人でもないと思えてきた。いいことだつてある。大丈夫、大丈夫、大丈夫…

けれど、彼女らの脇を通り過ぎるとき、アルカナにもはつきりと聞こえる声音で言われたことは、何度もアルカナの中で反響して止まらなかった。

「でもほら、ピアキイ様ってウチの…あの子が本命だって話じゃない？あの人なんてどうせ、本命を守るための隠れ蓑でしかないわよ」  
「え…？」

思わず振り返ったところで、頭になにか叩きつけられた。一瞬あとでバシヤリという音と、冷たい感触が頭のとっぺんから足元まで広がった。ぽたり、前髪から水滴が滴って、ようやくどこか上階から水をぶっかけられたのだと理解した。

アルカナはぽかんとしたが、くすくすと笑う女官たちの笑い声を聞いて、すぐにはつと我に返って胸元に目をやった。抱き込んだ書類が、ぐっしりと水を吸って濡れている。アルカナは真っ青になった。

「しょ、書類が…」

夜遅くまでピアキイが頑張って仕上げた書類なのに！アルカナは絶望的な気持ちで書類を見た。インクがじんわりと滲んで、ところどころ文字が読めなくなっている。どうしよう！自分が濡れ鼠だということも忘れてアルカナは狼狽した。ピアキイになんと言ったらいいのだ。

女官達が嫌な笑いを浮かべているのを見たが、アルカナと目が合った瞬間、とんでもなく汚いものを見るような顔をして彼女らは笑みを引つ込めた。吹き抜けになっている上階の窓を見上げると、あゝひとつの窓が開いているものの、そこに誰かがいるかは確認できなかった。犯人はもう逃げているだろう。けれどそれを誰かに告げ口したからといって何になる。とにかくすぐにピアキイに伝えなければ…

目頭が熱くなるのをこらえながら上げていた頭を下げると、目の

前に影が落ちた。あつと思う間もなく腕を取られた。水浸しの書類が廊下の床に落ちた。高級そうな万年筆がかしやりと音を立てた。

「お前ってばかだね」

なんだか面白がるような口調で、彼は笑った。

「つくづく、見ていて飽きない」

「ぴ、ピアキイ様…」

ピアキイはいつもの嘲るような笑みではなく、ただただ微笑んで、彼はアルカナの頬に空いた手を滑らせた。ふわりと暖かい風が吹いたかと思うと、アルカナの服はすでに乾いていた。目を瞬いているアルカナから視線を外した彼は、足元の水溜りに沈んだ書類を拾い上げる。アルカナは血の気が引いた。

「もっ、申し訳ございません！」

「なにが」

「書類を…」

「ああ、これ。こんなのすぐに直るよ」

言うが早いか、ピアキイが何事か唱えると、書類はぱらりと乾いて文字もはつきりと元の通りに綴られていた。アルカナが目丸くしていることを意に介しもしないで、ピアキイはアルカナの腕を引っ張って歩き出した。

「ああ、そうだ」

不意に立ち止まったピアキイが振り返ったが、彼の視線はアルカナではなくその背後の女官達に向けられていた。

「俺のアルカナに手を出したヤツに伝えておけよ。誰か分かり次第殺してやるから楽しみに待ってるってさ」

女官達が息を呑むのが聞こえた。アルカナはぞっとした。

「な、何を仰ってるんですか！」

「何って言葉の通り」

「やめてください！またそんなことを言ったら誤解されるじゃないですか」

「誤解って？」



「そりゃあ」

『俺の』だなんて言ったら、まるでピアキイがアルカナを愛しているようではないか。それだけは違つとアルカナは断言できた。癖みでも卑屈でもなく、ピアキイは確かにアルカナになぜだか執着しているようだが、それは間違つても恋愛感情ではない。どうせ彼にとってアルカナなど、しばらく遊べそうな玩具に過ぎないのだろう。いつぞやか「使い捨てじゃないんだから」とか言っていた。それでも彼が飽きてしまえば、アルカナの存在など簡単に切り捨てられてしまうのだろう。一回きりじゃない、ただそれだけなのに。

けれどそれを自分の口から出すのはひどく恥ずかしくて、アルカナは唇を引き結んで黙りこくつた。彼は何を思ったか、ふと息を漏らすと、アルカナを自分の執務室まで引つ張つていった。初めて入るピアキイの仕事場。けれど部屋を出たときの高揚した気持ちはもはや鳴りを潜めていた。部屋まできてようやくアルカナから手を離して、テーブルに書類を投げたピアキイは、上質の絨毯をじつと見つめているアルカナをちらりと見て、平坦に言った。

「座れば」

「いえ：帰ります。部屋にフアレイア様やミュウさんを置いてきているので」

ぴりりと空気が尖つた。部屋から出ようと開けた扉を、大股でやってきたピアキイに塞がれた。何故かむつとした表情の彼は、素早く部屋の鍵をかけてしまうと、アルカナを無理矢理ソファに座らせ

た。

「…お前のそれ、癖？」

ピアキイが小机に置かれたティーセットを取り出しながら言った。呆れたような声だ。着々とお茶の準備をしていくピアキイの手元を眺めながら、アルカナは答えた。

「それ、つて？」

「敬語とか、その無駄に遠慮深い性格とか」

「無駄ってほどじゃないと思います」

アルカナは顔をしかめた。

「ただ、この神殿には、私よりも高い位の方が多いから」

「ハア？何言ってるんのお前」

アルカナの前に茶を出して、隣に腰掛けながら彼は自分用のマグカップで茶を飲み始めた。猫舌な彼はすぐに「熱ッ」とつぶやいて、すぐにテーブルにカップを戻す。

「お前、どこの家に嫁いできたと思ってんの？この神殿でお前より偉いやツなんて、俺と伯父上くらいしかないよ」

「それは…そうかもしれないけど、でも私は、貴族の中でも最下級で」

「ふうん？」

ピアキイは納得がいかないようだった。アルカナがうかがうように彼を見ると、ピアキイはお茶に息を吹きかけて冷ましているところだった。

「うちの母親はそんなこと言ったことなかったな」

「閣下の、お母様？」

「そ。自分は王弟に見初められたんだから、この神殿で相應の扱いをうけてしかるべきだってね。さんざ我俣放題したから、しまいはエフアインに潰されたけど」

アルカナは背筋がぞわりとした。ピアキイは母に対してなんの感慨も抱いていないようである。それから、彼はやんわりと笑った。先ほどと同じ、毒気のない笑みだ。

「まア、そういうところがアルカナの美德ってやつなのかもな」

アルカナはいつの間にか、ふわふわした心地でそれを聞いていた。ただ分かったのは、自分の体は存外冷え切っていて、彼の淹れるあたたかなお茶はとてもおいしいということだけだった。

ピアキイ・ケルト・エファインはいかなる人物か。

まず彼は絶世の美青年である。本人がどれだけそれを自覚しているかはさておき、彼が歩くだけで老若男女問わず皆が振り返るような美貌を持っている。一方でその性格は冷淡。一緒に過ごすうちに、彼が案外気の長い性格らしいとは思いついてきたが、いかんせん彼には「常識」というやつが欠如していた。…主に、暴力の方面で。

彼は「むやみに暴力をふるってはならぬ」という教えを受けたことがないらしい。以前アルカナが病み上がりで外に出たときの怒りようといったら。否、そもそもあれは怒っていたのだろうか？ミウを何べんも踏みつけていた様子は非常に涼やかだった。

さらに、彼は平気で人を傷つけるような物言いをする。アルカナは薄々気づいてきた。彼が人を蔑むとき、そこに深い意味はない。彼の辞書に「遠慮」や「気遣い」といった言葉はないらしく、彼にとっては世間話をするのと同等の調子で侮蔑のことばを吐くのだ。要するに彼にデリカシーというやつはかけらもない。

そんなわけで、彼の妻であるアルカナ・ハイネントはかく語る。  
ピアキイはどうしようもない子供だと。

だから最近アルカナも肩の力を抜いて、ピアキイに言いたいことを言うようにしていた。婚前に姉から「アルカナ。夫に何もかも委ねては駄目よ。夫婦というものは常に女が上位に立っているほうがうまくいくの」と助言をもらい、あの閣下相手になんと恐れ多いと思っていたが、案外ピアキイはアルカナが何を言ったところで怒り狂ったりはしなかった。

「ピアキイ様、野菜もちゃんと食べなきゃだめですよ」

「…野菜嫌い」

口を尖らせてピアキイが反論した。彼の偏食にも困ったものだ。また勝手にピアキイはアルカナの皿に朱色の野菜を移してくる。アルカナは溜息をついてそれに手をつけようとすると、我が夫はにやりと口端を上げた。

「アルカナが手ずから食べさせてくれるっていうならありがたいたくけど」

アルカナは真つ赤になって絶句した。給仕をするミュウが「夫婦漫才はよそでやってくれ」とつぶやいた気がする。すかさず彼女を見るが、ミュウはしれっとしたまま脇に立っている。ピアキイがくすりと笑う。

最近彼の笑みが柔らかくなったのは気のせいだろうか。せめて嵐の前の静けさでなければいいのだが。アルカナは自分の横で黙々と肉料理を類張るフアレイアの口をナプキンで拭いてやりながら一人ごちた。最近はフアレイアもアルカナに懐いてきて、何かにつけてアルカナの後をひつついてくる。時々ピアキイが絡むと、アルカナを出し抜いてやろうと息巻いているが、それも子供と思えばかわいなものだ。彼女にとってアルカナは、ライバルのようなものらしい。皆この関係に慣れてきたということかしら、ピアキイを盗み見る。さすが王族というべきか、彼の食事の手は洗練されていた。物音一つたてずに料理を口に放り込んでいく。いつの間にかまじまじと見てしまったらしい。アルカナの視線に気づいて、口をモゴモゴさせながら「何？」と尋ねてきた。アルカナは慌てて自分の皿を見下ろした。

「い、いえ」

「ふうん？」

きつと女性に見つめられるなんて、彼にとっては日常のことなのだろう。さして深く問うてくることもなく、ふわりと目を泳がせただけでピアキイは食事に戻った。アルカナは気恥ずかしくなった。

ピアキイは食事を済ませるとすぐに席を立ってコートを取った。

「お出かけですか？」アルカナはコートを着る手助けをしながら声をかけた。

「仕事が残ってる」

「まあ：お気をつけて」

忙しい身だというのに、わざわざ夕食のために部屋まで戻ってきてくれる、その優しさが嬉しい。思わず勘違いしてしまいそうになる別に、彼はアルカナのことなんてなんとも思っていないのだろうけれど。

自分で考えておきながらチクリと胸を痛めていると、部屋から出て行こうとしたピアキイが不意にアルカナの後頭部に手を回してきた。何事かと顔を上げたところで、アルカナは硬直した。

触れるだけのキスは一瞬だけで離れていった。目を丸くして、ぽかんと呆れるアルカナに、ピアキイはにっと笑って出て行った。いたずらが成功した少年のような顔だ。

扉が完全に閉まってから、アルカナは立ち尽くしたままつぶやいた。

「…やだ、どうしようミュウさん。私、今『愛されてる』なんて思っちゃいました」

「惚気はいいから残さず食べなさい」

アンノはいつも終業の時刻になるとアルカナの部屋にやってくる。娘にべろべろに甘いアンノは、とてとと父の腕めがけて駆けてくる娘にうっとり笑っている。アルカナは苦笑して、ピアキイ様も子供ができたらあなるものかしらと考えた。想像するだけで寒気がする。そもそも、彼のフアレイアへの対応を見ている限り、彼は子供が嫌いなようだ。

「いやア、いつもすいませんねエ、アルカナ嬢」

頬の筋肉を極限まで緩ませたアンノが言う。アルカナはにっこり笑った。

「お気になさらないでください。私こそたいしたお構いも出来ませんで」

「いやいや！随分助かってますよ。今度は非ウチにも遊びに来てください。女房が閣下の嫁を見たいってうるさくって」

「奥様のお加減は、その後いかがですか？」

「最近随分よくなったモンですよ。相変わらず寝たきりですけどね。ここ最近、フィーがアルカナ嬢のことばかり話すもんだから、神殿まで会いに行きたいと言いつつ始末で」

「まあ」

アルカナはくすくす笑った。アンノの話し振りからいって、具合がよいのは本当だろう。

アンノの奥方は、以前はそれはそれは鬼のように強いファナティリスト兵の一人だったそうだが、一年前に大病を患って、屋敷で絶対安静の生活が続いているらしい。ファレイアはあまり母の話題を出してこないが、アンノの話を聞く限りでは、家では母にべつたりだそうだ。

「あの閣下も、小さい頃は女房に懐いていたんですよ」

「そういえばピアキ様は、アズラーノ様の家でお育ちになっていたんですね」

どんな方だったんですか？世間話のつもりで話を振ると、なぜだかアンノはふらりと視線をさまよわせた。突然まじめな顔をして、腕に抱いたファレイアをおろして、アルカナを手招きした。

「アルカナ嬢、ちょっと」

「…？」

ファレイアを頼むとミュウに目配せして、廊下に出たアルカナは、ついてきたアンノを見上げた。彼は少しバツが悪そうな表情だ。

「アルカナ嬢にはもっと早くに言うべきだと思っていたんだが…」

「なんです？」どうにも不穏な予感がした。

「アルカナ嬢、閣下の家…エファイン家について、どのくらいご存知ですか？」

「ピアキイ様の家？」

そういえば聞いたことがない。そもそもピアキイは自分のことをあまり話したがない。結婚生活の間に、彼の好みや性格については大体把握してきたが、それだって彼の行動を見てアルカナが勝手に判断していることだ。

怪訝そうなアルカナに、答えを聞くまでもなくわかったらしいアンノは、一旦人通りのないことを確認してから口火を切った。

「本来は、閣下があなたに言うべきことだが…多分あいつは言わないだろうから、俺から言わせてもらいたい」

「一体なんなのですか？」

「彼の家は、アー、少し特殊だね。俺達とは…そう、人種が違ってもいいのか」

「それは、単純に彼がファナティライストの王族に連なる生まれだ、というのとは、また、違うお話…のようですけど」

「完全に無関係とは言いつらいですけどね」

アンノは肩をすくめた。それから身を乗り出して、声を潜めて言う。

「落ち着いて聞いてくださいよ？閣下は、不老不死なんです」

はあ？思わず間の抜けた声が出た。アンノの表情があまりにも真剣だったから、アルカナもじっと身構えていたが、まさかそんな下らない話が飛び出すとは思わなかった。そういえばアンノは、高等祭司の大貴族という身分にしては気さくで冗談好きな男だし、あんまりアルカナが不安そうな顔をしているから、気遣ってくれたのかもしれない。アルカナは噴出した。

「うふふ、いやですね、アズラーノ様。何を言い出すかと思えば。」

まあ確かに、ピアキイ様は人間離れして美しいお方ですけど」

「おや、信じては下さらないのですか」

「少し前までだったら、信じたかもしれませんわ。でも今は、ピアキイ様の人となりも大体分かってきましたもの。ニンジン嫌いで寝相が悪くてわがままで。ふふっ、あの人が不老不死なんて、そんなまさか……」

アルカナはだんだん不安になってきた。アンノは黙りこくったまま、その場に立ち尽くしたままだ。其の目はじつとアルカナの一挙一動を見逃すまいとしている。彼は何も言わない。アルカナは頬の筋肉が奇妙に引きつるのを感じた。

「……え、そんな、まさか、ですよ」

「ところが、アルカナ嬢。残念ながら嘘でも冗談でもないんですよ、これが」

そういわれても。アルカナは戸惑って、アンノから視線を逸らした。不老不死。そういえば先日、ミウウが突然その話を出してきた。彼女が、ピアキイの家名が、不老不死の神話にあるものと同じだと気にしていたように思う。不老不死？まさか。そんなの御伽噺だ。仮にそんなものがいたとして、アルカナのイメージでは仙人のような姿だと思っていた。間違ったって、ピアキイのような暴君など想像できない。アルカナは乾いた笑いを浮かべた。

「ハ、ハ……アズラーノ様、だって、そんなおとぎばなしみたいなのと……」

「御伽噺なら、よかつたんですけどねエ」

アンノは憂えるように頭をかいた。それから、不意に夜になっても美しい庭園を見て、アンノは尋ねた。

「アルカナ嬢、シェーロラスディ陛下って、何歳に見えます？」

よりもよってこのタイミングで、あまり追究したくなかった話を出されるとは思っても見なかった。この話を出されれば、納得せざるをえないのは目に見えていた。しかし、アンノの厳しい声音が



ら逃げることもかなわず、アルカナは観念した。

「……多く見積もっても、せいぜい三十に満たない、というあたりですね」

「ということは、アルカナ嬢も勘付いたところはあった、というわけだ」

アルカナの記憶違いでなければ、シェーロラスディ陛下は今年で御年51歳である。しかし、あの男はどう考えても三十代にすら見えない。ピアキイだって、二十歳を超えているにしては童顔だが、世界王陛下に関しては若作りにしても次元が違う。彼の若々しさは異常だ。それでも、不老不死といわれるよりは、まだ劇的な若作りなのだと言われたほうが納得できる。アルカナは頬に手を当てため息をついた。

「私、てつきり陛下は魔術であのお姿をとっておられるのかと……アズラーノ様のお話でなければ、笑い飛ばすしかありませんけど」

「対外的にはそういうことになってます。不老不死なんて言われて妙な輩に襲われちゃあ大変だ。といっても、そうやすやすとは死ねないんですが」

「……不老不死ということは、やっぱり、……不老不死なんです、よね」  
上手い言葉が見つからずにアルカナは途方に暮れた。老いない、死なない。意味がよくわからなかった。本当に、そんなことがありえるのか？彼の言葉を信じたいと思うものの、あまりに突拍子すぎて頷くしかできなかった。実際に目の当たりにしなければ、きっと一生理解できないだろう。

アルカナの戸惑いを悟ったのだろう。アンノは無理することはないとばかりに微笑んだ。

「まア、信じられなくても無理はありません。とりあえずそういうことにして、話を進めてもいいですか？」

「はあ」

まだ妙な話が続くのか、アルカナの目がチカチカした。

「不老不死一族というのはね、どこかオカシイ。人間の常識が通  
用しないといえますか、妙に『人を傷つける』ということに躊躇が  
ない。なまじ自分達が死なないだけに、痛みや死に対して恐怖が薄  
いというわけで」

「ああ、それは」

確かに、ピアキイにはそんなところがある。ミュウに対する仕打ち  
もそうだし、すぐに「殺す」だのと物騒な台詞を吐く。アルカナは  
合点がいつて頷いた。「不老不死」云々に関してはまだとても信じ  
がたいが。

「本来は、閣下のような片親がフツの人間のときは、ある程度ま  
ともな神経が備わるモンなんですけどね。あの母親…レイン様は、  
そこんとこ全く興味が無いというか」

「レイン様というのは、ピアキイ様のお母様、ですよ」

王弟殿下と結婚した平民の女。確か王弟と仲違いして離縁し、奥  
方のほうはじきに病死したという話だ。王弟殿下は外交などで世界  
中飛び回り、ファナティライストにはほとんど帰ってこないとか。  
そして、ピアキイはアズラーノ家に引き取られたと聞いている。先  
日のピアキイの話では、母になんら感慨もない様子だったから、ひ  
よっとすると親子関係のほうも芳しくなかったのかもしれない。

「最初はね、レイン様も、王弟殿下…ケルト殿下もよかったんす  
よ。見るも仲睦まじいご夫婦で、エファイン本家は平民の女だそこ  
ぞって反対したそうですが、ケルト殿下の溺愛ようときたらそりゃ  
あ直視しがたいほどで。…ピアキイ閣下が生まれるまではね」

「どういうことですか？」

「エファイン家に限らず、不老不死一族は容姿もまた珍しくてね。  
エファインは緑の髪と瞳って特徴があるんですよ。レイン様もずい  
ぶんご期待されてました。不老不死の子供を産めるだなんて栄誉な  
ことだって」

アルカナは眉をひそめた。ピアキイはまばゆい金髪にみかん色の瞳。シェーロラスディ陛下のような緑はかけらも混ざっていない。それに、アンノの言い方にはどこか違和感を覚えた。

「ま、結果はご存知の通りです。ピアキイ閣下がケルト殿下にまるで似てないことで、レイン様の本性が出ちゃったんですねエ」

「本性、というと？」

「レイン様は確かにケルト殿下を愛していらっしゃったんですが、あの人が愛したのはどちらかというと殿下の身分だった。不老不死で王弟である殿下を手に入れて悦に入ってたんですよ。エファインの御子を産めば、自分もエファイン家の者として認められると思っただけでしょう」

「…ピアキイ様は、お母君が、神殿で我侭放題だったと」

「息子にそう言われちゃあ世話ありませんねエ！エエ、エエ。あの方は美人だったし、そこらの貴族なんかよりずっと気位が高かった。思い返してみれば、私も随分こき使われたものだ」

アルカナはアンノの口調に瞠目した。彼がこんな風に、誰かを軽蔑するさまを見るのは初めてだ。そもそも、彼の険しい表情自体が見慣れない。

「しかもあの女は、どうにかして自分も不老不死にしてくれないかとケルト殿下にねだったのですよ。フン、まったくばかばかしい！ケルト殿下がレイン様と種族が違いうことに心底悩んでいたというのに、面の皮の厚い女だ」

「そ、それで、王弟殿下はどうなさったのですか？」

「もちろんレイン様に見切りをつけましたよ。当然の話だ。けれどその後がまずかった。ピアキイ閣下は母親似で、ケルト殿下はどうしたって閣下も愛することができなかった」

「そんな！」

アルカナは愕然とした。

「だって、ピアキイ様は何も悪くないじゃないですか！」

「まあね。でも、気持ちはどうにもならない。だから私が閣下を引

き取ったんですよ。あの方が八歳の頃かな。あの横暴な性格は矯正できませんでした」

アルカナは黙り込んだ。自分は両親に愛されて育ったし、姉とも仲が良かったから、当時のピアキイの思いを推し量ることはできない。でもきつと、あの閣下は堂々と生きていたのだろう。彼の縮こまった様子など、アルカナには想像が付かなかった。母にも父にも愛されない中で、ちゃんと背筋をのばして神殿の廊下を歩いているさまが浮かんで、アルカナの胸が軋んだ。

「ますますわからなくなりました」

「なにが？」

「どうして、ピアキイ様は私なんかを妻にしたんでしょうか」

アルカナだって半分平民のようなものだ。アルカナも彼の母のようになる可能性を、ピアキイは考えなかったのだろうか。

するとアンノは視線を泳がせた。

「アー…多分聞かないほうがいいとおもいますよ？」

「ピアキイ様が私に恋愛感情を抱いて結婚したわけじゃないことくらいは分かってます」

むつつりと返したアルカナに、アンノは目を見開いた。

「いや、そういう意味ではなく。私もどうしてアルカナ嬢なのかは知りませんがね。体外的な理由では、不老不死について何も知らず、権力に興味がなく、閣下のほうが婿入りする必要のない女がいいのか」

「そういえば、似たような話は顔合わせのときに聞きましたけど」

「閣下はシェロ様の腹心の部下ですし、あの顔ですから、お嬢さん方からも良家からも憧れの的です。一方で閣下は、母親のこともあって自分に媚売る女とはかく嫌い。というわけで、下級貴族っていうのは最初から候補にあつたんですよ。そこでアルカナ嬢を選んだのは閣下の裁量なので私に理由はわかりませんが」

アンノはなにやらニヤニヤしている。アルカナは、ピアキイが不老不死だといわれた時以上に、彼の言葉が信用ならなかった。ピアキイが「自分に媚売る女は嫌い」だって？そんな馬鹿な。最近はずっかりなりを潜めているが、アルカナはピアキイが女遊びの激しい人間だということを忘れたわけではなかった。今だって、仕事と言っておいて他の女とよろしくやっているのかも。今日の花も白くなかった。ピアキイは嘘をつく男ではないが、かといって誠実な男だとはこれっぽっちも信じていなかった。

まるで愉快的反応もないアルカナに、打てば響くと期待していたらしいアンノは興が殺がれたようだ。ひとつ溜息をつく。

「とにかくも、アルカナ嬢には閣下のことを知っておいてほしかったんでね。女官たちにあることないこと吹き込まれちゃ閣下がかわいそうだ」

「ピアキイ様がそんな瑣末を気にするとも思えませんが」

「いやいや」

アンノがにつこりして言った台詞に、アルカナはこれから先、アンノの言はあまり真に受けないようにしようかと心に決めた。

「だって、アルカナ嬢は閣下の愛する奥様ですから」

a c t・10 うわさばなし（後書き）

もともと不老不死の血は強いので、順当にいけば閣下は緑の髪に瞳になるはずなんですが、ピア様は突然変異で母親の色を受け継いでいます。そのうちレイン嬢の話もどっかで書きたい。

リビングの花瓶に白い花が差されるたびに、アルカナは少しばかりおしゃれをするのが常だった。なんだかんだ言ってもアルカナはピアキイに恋していたし、好きな人が自分を見てくれるとわかれば着飾りたくなるのが当然というもの。それが彼の気まぐれでしかないのには、アルカナも落ち込むしかないが。

白いレース地のワンピースに、厚手の黒いカーディガンを合わせて、髪には細いリボンを通す。いつもながら女官顔負けの手さばきを、ミュウは手伝いながらまじまじと見つめていた。

「アンタ、どうして神殿にお仕えしようとか思わなかったの？」

「私もいいかなって思ってたんですけど、姉に止められたんです。神殿なんて、女達が少しでもいい男に見初められようと互いを化かしあつてる悪の巣窟よって」

「……まあ、否定はしないわ」

アルカナはよく知らないが、きっと女官達のアルカナに対する態度を見ている限りでは、その「いい男」とやはまさにアルカナの夫であるピアキイ・ケルト・エファインその人なのだろう。アルカナはぼんやりと考えた。

今日は「鎮魂日」。双子神が死んだとされる日だ。この日はファナテイライスト神殿でも休日となり、国民はみな双子神の死を悼む。当然アンノも休みなのでファレイアは部屋にこない。ここ最近おてんばなファレイアは、すぐにアルカナを庭へと引っ張り出して服を汚すので、せっかくピアキイが用意してくれた白い衣装たちも着る機会を失っていたのだが、今日ばかりはいいだろう。黒いショートブーツに足を通したところで、前触れもなく部屋の扉が開いた。

「アルカナ」

「きゃあ！お、驚かさないで下さい！」

アルカナが片足を上げたままよろめくと、ピアキイがその腰をキヤツチした。深緑のコートから伸びる、彼の大きくて繊細な手のひらに今更どきまぎしながら、アルカナはごまかすように「女性の着替え中にノックもなしに入るなんて非常識よ」とモゴモゴ言った。ピアキイは気にせずアルカナから離れて言った。

「今日はエファインの本家に行くから」

「え？ご本家って」

思わず振り返って、アルカナはドキリとした。ピアキイはいつもの神官服ではなく、私服に身を包んでいたのだ。真っ白なカッターシャツには細い深緑のリボンがかかり、黒いベストには整然と小さな金ボタンが並んでいる。細いスラックスはすわりと長いピアキイの脚を魅せており、深緑のロングコートも彼にはよく似合っていた。

麗しのピアキイ閣下はアルカナの衣装を上から下まで見下ろすと、リボンの結び目に取り出した淡い黄緑色の花を差した。それからミユウに、「深緑のカーディガン出して」と命令する。

「どういうことですか？」

「エファインの色は緑だから、それにふさわしい色を身につけなきゃいけない」

「いえ、そういうことではなく」

「靴も緑がいいかな」

全く人の話を聞かないピアキイに、頭がくらくらした。一体何事だ。結婚のときですら音沙汰のなかったエファイン家とやらに、今になつて行かなければならないだなんて。大体、先日のアンの言が正しければ、エファインというのは不老不死の一族で、アルカナにとつてはまるで未知の領域だった。アルカナは靴を履き替えながら問うた。

「どうして突然？昨日はなににも仰ってなかったのに」

「俺だって好き好んで本家に行きたいわけじゃない」

ピアキイがカーディガンを着せながら言った。苦々しい表情。どう



も彼は自分にまつわる話をするときにこうした顔をする。

「毎年鎮魂日には集会があるんだ。俺はもうエファインとは関わらないって言ってるのに、伯父上が無理矢理」

「でも、私もお招きいただいたていいんですか？」

ふてくされるピアキイ。出来れば行きたくない。アルカナは黒いコートを着せられながら尋ねた。すると、彼は出し抜けにいつもの笑みでたいそう甘く返してきた。

「俺が嫌々実家に行くのに、お前はそんな夫を見捨てるの？」

「私は巻き添えってことですか」

アルカナも苦い顔をした。何が悲しくて、わざわざ行く必要もない不老不死の居城に行かねばならないのか。しかし夫の命令である。母の教えでは、こういうとき、妻はおとなしく夫の言うことを聞く必要があった。アルカナはまじまじとピアキイを見た。

しかし、このピアキイの実家というのに興味はある。なにせ、彼の母君が狂氣的に求めた存在だ。そのエファイン家とやらに、一人息子を不幸にしてまで求める価値があるのか見極めたかったし、この歩く非常識がこんなに嫌っている。自己満足ではあるが、アルカナが状況を整理するいい機会かもしれない。アンノの話はまだ半信半疑だったが、不老不死だなんて一生お目にかかれない存在だ。観光気分で行けばいいだろう。開き直って、アルカナは向かうピアキイの曲がったリボンを結びなおした。

大体、この一族は「不老不死」という存在をどれだけ隠す気があるのだろう。アルカナは揺れる馬車の中で身を縮こまらせながら思った。向かいに座って優雅に脚を組んだ我らが世界王陛下、シエーロラスディ・Ｔ・ファナティライストは、やはり緑を基調とした衣装に身を包んでいる。彼はアルカナの視線に気づくなりにつこり笑った。

「私の顔に何かついているかい？」

「い、いえ！申し訳ございません」

すっかり恐縮してうつむくと、シェーロラスディ陛下はくすりと笑った。隣のピアキはアルカナの肩に頭を預けてすやすや眠りけている。気まずい空気をなんとか打破しようと、アルカナは努めて明るい声を上げた。

「シェーロラスディ陛下は、ご本家にはよくお戻りになられるのですか？」

「シェロでいいよ。親しい人はみんなそう呼ぶしね」

さらりと無理難題を吹っかけて、シェーロラスディ陛下はにっこり笑った。

「まあね。たまにどうしても本家でやらなきゃいけない会議があるときなんかは。ただ、いちいち大陸に渡るのは面倒だから、必要がなければ寄らない」

この世界は、ドーナツ型をした大陸の中央に内海があり、内海の中央に島がぽつんと存在する。ファナティライストはこの島にある街だ。エファイン本家は、大陸の北西、山脈の広がる場所にあるらしい。海を渡り、港からも程遠い場所のため、一日で行き帰りするのは不可能だ。大概是転移装置を使うらしく、今日もエファイン家行きの転移装置が設置されている小さな祠に向かっていた。神都から出たことのないアルカナは、窓から見える広大な森にも驚くばかりだった。

「まあ、ファナティライスト島には森くらいしかないが。世界中を見て回ればもつと面白いものがたくさんあるよ。東のインテレディアは平原にあるし、北のシェイルは冬になると雪が積もって一面真っ白。南のラトメには確か砂漠があつたかな？あそこ、南西の湿原は観光にはおすすめしない。暑いしね。あと西のクライディアにある遺跡群は一度見ておくといい。あれは一生の思い出に残る。まあ、そこで寝こけている彼に休暇がとれた時にでも連れて行っても

らないさい」

「ピアキイ様は旅行なんて興味ないでしょうけど」

アルカナはくすりと笑った。シェーロラスデイも苦笑いを浮かべている。

「わがエファイン家は山岳の中ほどにあつてね。外海がよく見えて絶景なんだ。集会のあとにでも、特に景色のいい場所を教えてあげよう」

「集会つて、何をするのですか？」

ウーンとシェーロラスデイは唸った。

「大概は本家の爺さん婆さんがわめいたり、どこぞのお偉方が腹の探りあいをしたりとか。面白いものでもない。ただ、不老不死四家が集まるし、私の知人も来るから、是非アルカナを紹介したいと思つてね。ピアキイをせっついたというわけだ」

アルカナは思わぬ単語に頭を上げた。世界王陛下はニコリと笑う。口の動きだけで「アンノ」と言った。チラリとピアキイをいたが、彼は身じろぎひとつせず眠っている。寝顔はますます童顔だった。

「私はわりとね、君を買つてるんだ」

「え？」

「引いては君の家を、かな。ハイネント家は君がピアキイの嫁になつてからも権力に固執しないし、話によると周囲の風当たりにもまるで頓着していない。それに、アルカナはこのピアキイに随分気に入られているようだしね」

「そ、そんなまさか」

アルカナは首を横に振った。お世辞にしてもやりすぎだ。

「ただ今の生活に慣れてきただけですわ。ピアキイ様は私なんて気にも留めていらっやらないみたいですし」

「ふふ。まあ君は知らないだろうけどね。私の知る限り、ピアキイの”使い捨て”じゃない女性なんて君ひとりだよ」

「使い捨て、なんて」

ひどい言い草だが、婚前のピアキイの様子を知っているので笑うこともできない。頬を引きつらせたアルカナに、シェーロラスディは満足そうだった。

「今日の集会では、ピアキイを小さい頃から知っている者が何人もいる。まあ、妻として、夫の弱味をひとつふたつ握っておくのもいいだろう?」

転移した先は城の中のようなだった。灰色の石造りの部屋を見回していると、ピアキイがあくびをしながらアルカナの腰に手を回した。「伯父上、俺達は隅のほうにいるから」

「まったく、ピアキイ。君は私の護衛も兼ねていたと思うんだが」「だって俺よりも伯父上のほうが強いし。流石にこの場で世界王陛下を暗殺して得する奴なんていないよ」

苦く笑うシェーロラスディを置いてピアキイはスタスタ歩き始めた。鎧に身を包んだ番兵が扉を開き、二人は広間へと足を踏み入れた。まばゆい光の溢れるシャンデリアの下にたくさんの人がひしめいていた。社交パーティーにもほとんど来たことのないアルカナでは、すぐに酔ってしまいそうだ。

きらびやかな人びとがこちらに注目した。やはりここでもピアキイは目立つらしい。アルカナはすぐにピアキイから離れたくなったが、彼はますますアルカナに身を寄せてきた。

不老不死の方々は胡乱げにこちらを見ていた。ひそひそと聞こえよがしに声が飛んでくる。

「あれが世界王の懐刀の…」

「隣にいるのが」

「やだ、あの子が妻?」

「緑を身にまとうなんておこがましい」

確実に、下級貴族のアルカナにいい感情は持たれていないだろうとは思っていたが、それにしても厳しい視線だ。震えが走った。アルカナは縮こまった。すると、隣のピアキイがはつと嘲笑する。

「相変わらずヒトを見下すしかできない腐った連中だ」

「ピアキイ様？」

ピアキイは口端を上げた。彼は堂々と立っていた。むしろ、ひしめく不老不死などより、緑の髪も瞳も持たない自分の方が偉いとも言いたげに。その佇まいに、アルカナは思わず魅入った。

アルカナの視線に気づいたピアキイは不敵に微笑んだ。

「なに？」

「……いえ」

惚れ直したなんて、絶対に言えない。アルカナはぷいとそっぽを向いた。

壁際の、人のいないあたりに二人で立って、アルカナはようやくひと心地ついた。ちょうどアルカナ達のうしろからシェーロラスデイ陛下が現れたこともあり、視線の矛先はすぐに移った。ひとつ溜息をついて、アルカナはピアキイを見上げた。彼は人々に目もくれず、アルカナの髪についた花が曲がっているのを直している。アルカナも夫のコートに手を伸ばした。

「ピアキイ様、襟が曲がっています」

「ん」

実につまらなさそうになすがままだにされているピアキイが借りてきた猫のような態度なので、アルカナはくすりと笑った。そこで、人ごみの中から声をかけられた。

「ピアキイ」

向かってきた男よりも、ピアキイの反応にアルカナは気を取られた。ぴんと背筋が伸びて、ぴりりと張り詰めたような空気が流れた。

彼の眠たげだったみかん色の瞳が見開かれ、彼はゆっくりと振り返った。アルカナはそこでようやく声の主を見て、あっと声を上げそうになった。

緑の髪がさらりと流れた。瞳も深めの緑。けれど体格はピアキイそっくりの長身だった。顔はあまり似ていない。ピアキイのほうが美しいと思うのは妻の欲目だろうか。彼は感情の読めない表情でピアキイだけを見ている。

ピアキイは恐れるような視線を彼に向けた。それだけ見れば、すぐに彼が何者なのか分かるというもの。ピアキイがこんなに動じている姿を、アルカナは初めて見た。あえぐようにピアキイがつぶやいた。

「父上……」

王弟殿下・ケルトは、憂えるような顔をしてわらった。

a c t ・ 1 1 かみさまの死んだ日（後書き）

転移装置は装置につき行き先が決まっています。力のある魔術師なんかは自分で転移呪文をつかって自由にテレポートすることも可能ですが、大概街や不老不死の住処なんかには転移呪文での侵入を防ぐ結界が張られていて直接街に入ることができなかつたり、また大人数を運ぶことが難しいことから、呪文でテレポートする人はあまりいません。

「結婚したそうだな」

そう言つて、ケルトはちらりとアルカナを見た。アルカナが慌てて礼の形を取った隣で、ピアキイはそつけなく声を上げた。不機嫌なときの声音だ。アルカナははらはらした。

「何の用」

「用がなければ声をかけてはならないか」

「まあね」

ピリピリとした空気。アルカナは、いつピアキイの暴挙が現れてもいように身構えた。が、しかし、不意にピアキイはつまらなさそうに息をついた。彼らしくもなく。低い声で言う。

「結婚？したよ。お偉方がうるさいから。それがなに」

「お前は……」ケルトもうんざりとした声音だ。「私に何も言わずに……しかも、こんな人間の小娘を」

ぎくりとした。ピアキイの顔色をそつとうかがうと、彼は気味が悪いくらいに無表情だった。アルカナの困惑した視線に気づいて、ようやく少しばかり表情を崩す。細くて長い髪が、礼を取ったまま固まっているアルカナの髪の毛先をいじくった。

「人間？」

ピアキイは嘲笑した。

「俺の記憶違いでなければ、我が親愛なる父上殿も、どことも知れぬ平民の女を娶ったと思っただけ」

「ああ。そして離縁した」ケルトは苛々しているようだ。

「いいか、ピアキイ。人間は姑息だ。その女も、おとなしそうな顔をしていつ仕掛けてくるか」

これが本人を目の前にして言う台詞だろうか。アルカナは怒りを通り越して呆れ返った。勿論アルカナに、ケルトが案じているような野心などかけらもない。アンノから聞いた彼の経歴からすれば、ケ



ルトの女性不信も仕方のない話かもしれないが、アルカナは、もとよりこんな縁のない世界、望んで来たわけでもないのに、この言われようは心外だった。むっとする感情を必死で押し込めていると、隣にいるピアキイが出し抜けに噴出した。

「あはは！姑息だつてさ。アルカナ、お前、そんなに権力とか好きだっけ？」

「私の父にもう少し野心があつたら、そのように育っていたかもしれないわ」

アルカナは慎重に答えた。とはいえ、何を言つたところでルトは信じないだろうと分かっていた。

正直なところ、アルカナにとってこのルト・エファインなる人物はあまり好かない部類の男だった。いかなる理由があれ、ピアキイを、息子をないがしろにするなんて間違っている。責任感のない人間は嫌いだ。

だからルトにどう思われようとアルカナは痛くも痒くもなかったが、夫にその咎が回ってくるのは勘弁願いたい。出来る限り不快な気分を表に出さないように努めていたが、アルカナのともすれば挑発的な台詞が、その夫はたいそうお気に召したようだ。

「へえ。じゃあアルカナは、これから俺が失脚してスラムに身を寄せることになったとしても、ついてきてくれるわけだ？」

「ええ。夫の行くところどこまでもお供いたします。それが妻の役目です。…せめて衣食住が揃っていたほうが、望ましいとは思いますが」

「ふうん。だそうだよ、父上。良かったね、息子が妙な女に引つかからなくて？」

「口では何とでも言える」

その台詞に、アルカナはカチンときた。憎々しげな視線でこちらを射抜くルトを見返してやる。そうだ、いくら義父とはいえ、ピアキイと彼の縁はほとんど切れているのだし、夫は明らかにルトを

煙たがっている。夫の敵は妻の敵。アルカナはそう言い訳して、王弟殿下を不躰にまつすぐ見据えた。

「ケルト殿下。ご無礼を承知で申し上げます。あなた様が私をどう思われようと、私が貴族の末端出身の小娘だということは事実ですし、それについては返すお言葉もございません。けれど私はピアキ様の妻として、恥ずべき行動をしないよう、誠心誠意夫にお仕えしているつもりですし、分をわきまえぬ行いをするつもりもございません。確かに私は身分も低い、殿下からしてみれば人間の小娘ごときと思われるかもしれませんが。ピアキ様に相応しい女だとも考えられませんが、こうして選ばれた以上、私はピアキ様の御名を汚すような真似はいたしません」

アルカナは深く息を吸って言い切った。「誓つて」

我ながら随分と大胆なことをしてしまった。隣にいるピアキが息を呑んだ。ケルトはきつい目つきで、この場をわきまえない小娘を睨めつけている。アルカナは拳を握りこんだ。誰がなんと言おうと、自分はピアキの妻なのだ。どんなに分不相応でも、女官たちに嫌われても。このピアキ閣下を後ろで支える役目が、アルカナの仕事だ。ならば、ケルトにそれを見下されるいわれはなかった。しかし、この空気はなんともいたたまれない。何か言ってくれと隣のピアキに祈るように願うと、意外にも反応は別のところからやってきた。

ケルトの背後からぱちぱちと、控えめな拍手が飛んできた。見ると、黒髪の青年が、銀髪に瑠璃の瞳の、目も覚めるような美少女を脇に引き連れ、満面の笑みでアルカナを見ていた。

「いやあ、楽しい演説をありがとう。ピアはなかなかいいお嫁さんをつまえたようだ」

「リズ兄さん」

隣のピアキイがぼつりと言った。青年の隣に佇む美少女がくすりと笑う。

「ケルト、認めて差し上げてもよろしいのではないのですか？とても素敵なお嬢様だと思いますわ」

乱入者たちはにこにことアルカナを見ていて、アルカナは思わず一歩下がった。ケルトのように明らかに嫌ってくる者はともかく、このように意味深に微笑まれるのもまた不気味である。すると、「リズ兄さん」と呼ばれた男がケルトを押しつけて、アルカナの前に立つと優雅に一礼した。洗練された動きだった。

「お初にお目にかかります、勇気ある奥方。俺はそこにいるケルトの古い友人だね。リズセム・シエルテミナと申します。これが俺の妻のナシャ。あいにくと妻以外の女性には触れないと心に決めているので、握手はご勘弁願いたい」

「は、はあ」

なんだか個性的な男だな、スカートの端をつまんで礼を返した。一目見ただけでも、このリズセムとやらが愛妻家なのは明らかだった。男はやたら妻にひつついてベタベタしているし、清純そうな妻のほうもそんな夫に慣れた様子で、何も言わずニコニコしている。目を白黒させてピアキイを見ると、彼はついとアルカナに顔を寄せて耳打ちした。

「リズ兄さんはシェイルの旧皇帝位に就いてる」

「えっ!？」

ちようど妻のこめかみにキスを落としていたリズセムがにっこり笑った。アルカナは目を見張った。つくづく不老不死とは恐ろしい。ケルトにしるリズセムにしる、国の上層部にいる連中はみなこんなに見目が若いのだろうか。シェイル王は確か、シェーロラスディ陛下とそう変わらない年頃のはずだった。目の前の青年はピアキイと同じか、下手をすると彼より年下にしか見えない。アルカナは慌てて夫の一步うしろまで下がり、深々と礼をし直した。

「も、申し訳ございません、大変失礼をいたしましたして」

「あーあ、いいいいいよ。格式ばったのは好きじゃないし、元々俺は庶子だから敬われるような身分でもないしね」

リズセムはひらひら手を振って頬を緩めた。対するアルカナはくつろぐなんてもつてのほか、この男の食えない態度に固まった。へらへらと笑って妻といちゃついている軽薄な男に見えるが、しかしそうではないのだろう。彼の口調は砕けているものの理知に富んでいるし、なにより隣のピアキがおなじみの嘲笑を浮かべていない。少なからず、「リズ兄さん」と呼ぶこの青年に一目置いているのは確かだろう。

一方でケルトは相変わらずアルカナを睨んで齒軋りしている。

「私は認めない」

「ケルト、往生際が悪いですわよ。婚儀はもうお済みなので。あらあ、どうしてわたくしたちも呼んでくださらなかったの？ わたくしもリズも、あなたの花婿姿をとてもし楽しんでいましたのに」

「…その父上が、シェイルにご滞在だと小耳に挟んだので」

ピアキが誰かに敬語を使うところなど初めて見た。アルカナは面喰らってまじまじと美少女を観察してしまった。彼女は柔らかに微笑む。

「どうぞお気軽にナシャと呼んでくださいませね。わたくしもアルカナと呼ばせていただきますから。ふふ、わたくしもね、リズの目に留まるまではたんなる村娘だったのです。だからどうか気負わないで、仲良くしてくださいな」

「まあナシャは、村娘だろうと王妃だろうといつだって誰より美しいけどね」

「あら、リズったら」

ケルトは、リズセムとナシャにすっかり話の運びを持っていかれて舌打ちした。その様子をじっと見ながら冷静になつてきたアルカナは思う。…この男は、ピアキが嫌いではなかったのだろうか？ それとも、息子のことを親としてきちんと愛しているのだろうか。

アルカナのすべてが気に入らんと言わんばかりのこの男に、アルカナは首をかしげた。どこからどう見ても、息子に寄り付く悪い虫を追い払わんとする父親の図だ。その虫役であるアルカナとしてはいい気はしないけれど。

考えにふけていたその時のことだ。

「シェーロー！」

突然シェーローラスディの愛称を怒号のように叫ぶ女性の声が聞こえて、アルカナとピアキイは立ち止まった。リズセムとナシャがくすくすと笑い出し、ケルトが深い溜息をついた。

「またか」

「懲りないねエ、あの二人も」

「な、何事ですか？シェーローラスディ陛下のお名前が聞こえましたけど」

もし世界王になにかあったら、その責任は、一応護衛としてついてきたピアキイに降りかかるのではないか。思わず夫の顔を見上げると、しかし彼は平然としていた。不安げなアルカナの表情に気がついて、ふと口端を上げた。

「どうせまた、伯父上がフェルマータにちょっかいでもかけてるんだろ」

「フェルマータ？」

どこかで聞いた名だ。首をひねっていると、ピアキイはくつと喉の奥で笑った。

「ラトメの”神の子”」

「……ああ」

そういえば、南のラトメディアの最高権力者がそんな名前だったかもしれない。シェーローラスディが顔合わせの時に言っていた、女官泣かせの権力者だ。ここににいるということは、”神の子”の一族も不老不死ということか。人ごみからシェーローラスディ陛下と、噂のフェルマータが見えやしないかとのぞいてみるが、あいにくと人

の隙間から、シェーロラスデいの緑の髪がチラリと見えただけだった。ケルトが「なんとぶしつけな」とても言いたげな顔をしたので、アルカナはすくすく姿勢を正した。

リズセムがにっこり笑ってアルカナに教えた。

「シェロの趣味なんだよ。フェルの奴、打てば響くっていうか、ちよつとからかったただけですぐ怒るからさ」

「シェロ！わたくしをからかうのもいい加減にして！」

相次ぐフェルマータの怒鳴り声に、リズセムは「おお恐い」と言っ  
てナシヤを引き寄せた。ケルトが心底嫌そうな顔をした。こう言う  
とピアキイは怒るだろうが、この表情は父息子よく似ている。

「…行ってくる」

「ハイハイ。兄弟水入らずでじっくり話しておいでよ」

ケルトは最後に一度ギロリとアルカナを見やると、騒ぎの中心へと小走りで駆けて行った。みるみるうちに隣のピアキイから緊張が解けていく。まったくもってギスギスした親子関係だ。アルカナがチラリと夫を見ると、彼のほうもこちらを見ていた。しかし、ピアキイはアルカナと目が合うなりぷいとそっぽを向いてしまった。一体なんだというのだ。

「アルカナ、行こう」

父のいないうちに逃げる算段らしい。はやくこの場から立ち去ろうと、アルカナの腰をぐいぐい引っ張るピアキイに逆らって、アルカナはどうかこうにか踏ん張って、やっとこリズセムとナシヤに一礼した。

「申し訳ありません、リズセム様、ナシヤ様。私たちも失礼いたします」

「ああ、そうだね。あの口うるさい奴が帰ってこないうちに退散しちゃいな」

「また今度ファナティライストにもお伺いいたしますわ。どうぞその時はお茶などにお付き合いくださいませね」

快く手を振って応じるリスセムとナシヤに、アルカナはもう一度頭を下げようとするが、その前にピアキイに急かされてその場から引き離された。よほど彼はここにいたくないらしい。

人のいないテラスまで来て、ようやくピアキイは足を止めた。デザインの凝ったベンチにどっかりと座り込むと、ピアキイはアルカナの腕を引いて隣に座らせた。それきり黙りこんだ夫に、アルカナは困り果てた。父のことをなにかフォローすべきだろうか。そわそわするアルカナに、ピアキイは自嘲するように言った。

「…俺には、あの人がわからない」

ぼつりとした声だった。アルカナはなにを言おうか迷ったが、結局声にならずに口を閉ざした。

「父親つてのは、みんなあんなモンなのかな。今までぜんぜん相手にもしなかったくせに、俺が結婚したとたんにアレだ。あの人に、親としての自覚なんてないくせに」

「ピアキイ様…」

アルカナは眉尻を下げた。あのケルトは何を考えて、ピアキイから離れたのだろう？彼は本当にピアキイを愛してはいないのだろうか？わけがわからない。わけがわからないが、とにかくケルトは、世間一般の父親とは少し違うということだ。ピアキイが、アルカナのすきなひとが、彼のせいで傷ついているということだ。

アルカナの心は決まった。

「ピアキイ様、私の家にいらっしやいませんか？」

「ん？」

怪訝そうなピアキイに、アルカナは慌てた。

「あ、あの、ピアキイ様のような方では、うちのように低俗な場はお嫌いかもしれませんが…ほら、私の父だって、ピアキイ様にとっ

ては一応、義父にあたるわけですし……うちの父親は能天気でお人よしで、情けない人ですが、その、ケルト様だけが父親ではないですし、ね？あの……」

ただ、知ってもらいたいのだ。ちゃんと子供を真正面から愛してくれる父親もいるのだということ。トロットはのんきな男だが、そうであるからこそ、ピアキイに気負わずに付き合ってくれるだろう。それこそ家名を売るとか、そういう損得勘定を抜きにして。

けれどピアキイのほうはそうは思わなかったかもしれない。権力を得ようと、ピアキイを家に取り込もうとする汚い女に見えたかも。アルカナは真っ赤になってうつむいた。

「す、すいません。忘れてください。ご迷惑ですよね、ピアキイ様はお忙しいのに、こんな」  
「行く」

アルカナは目を瞬いた。ピアキイはこちらを見ていなかった。生い茂る草花をまっすぐ見ていた。探るように彼の大きな手が動いて、アルカナのそれをぎゅっと握った。彼は少し口を尖らせていた。耳が赤かった。アルカナはドキドキした。

「行く」  
「……はい」

夢見るような心地だった。アルカナの想いが通じたのかと思った。それからピアキイは、馬車に乗ったときと同じくアルカナの肩に頭を預けて、ゆっくりと目を伏せた。ピアキイの金髪が、アルカナの頬をくすぐった。アルカナの声が掠れた。

「ピアキイ様？」  
「……寝る」  
「は、はい」

風は穏やかだった。このまま時が止まってしまえばいいのに。アルカナもまた目を閉じた。吐息さえ響く中で、アルカナは確かにこ



の時、この瞬間、限らない幸福を噛み締めていた。

二人の姿を上階の渡り廊下から眺めながら、黒髪の青年がにやにやと笑っていた。

「あーあー、見せ付けてくれちゃって。俺も帰ったらナシャといちゃいちゃしたい」

「お前らは年中いちゃついてるだろ」

くす、とシェーロラスディは微笑んだ。リズセムは手すりにもたれかかったままで、上目遣いにかの世界王を伺った。

「シェロもさあ、いい加減解放してやればいいのに。ピアがいつまでもフアナテイライストにいちゃ、この馬鹿のせつかくの決意も無駄になっちゃうじゃん」

「さてね」シェーロラスディは肩をすくめた。

「ケルトもだよ。ホントは息子が可愛くて仕方ない癖になにやってんの。素直になってりゃ、ピアだってああもおびえたりしないだろうに」

「俺は父親に向かない」

ケルトはきっぱりと言い放った。それでも、未練がましく視線はピアキイに注がれている。

「あの子は、不老不死に染まりあがった私が育てていい子ではない」リズセムは溜息をついた。

「アンノにピアを預けたときのこと、俺、覚えてるよ。自分の従者に土下座までしてさ。ピアキイを頼むって何度も言うし。この親馬鹿が、ホントに息子と離れられんのかよって思ったね」

ケルトは何も言わなかった。その代わりに、彼の兄が、クックと笑う。

「ケルト、決めたのか？」

「はい」

ケルトはようやく息子から視線を外した。兄をまっすぐに見たその緑の瞳には、決然とした光がはつきりとあらわれていた。

「ピアキィをどうかお願いします、兄上」

「それは言う相手が違っんじゃないかな」

ゆつたりとシェーロラスディは言った。穏やかに、自身の甥とその新妻を見つめて、それから弟に向かって笑いかけた。

「今ピアキィの一番そばにいるのはあそこにいるアルカナ嬢だ。あの子はきつと、ピアキィの大きな支えになるだろう」

「……」

「きつとね」

シェーロラスディはにこやかに言った。対称的な弟は、悔しげに、眠る夫婦を見下ろした。

a c t ・ 1 2    王弟殿下の心底（後書き）

旧皇帝位：現在この世界は、かつてはバラバラだった各国を統合してひとつの国になり、各国の首都は国の主要都市となって成り立っています。「旧皇帝位」というのは、シェイルがまだ帝国だったときの皇帝位のこと、今ではシェイルの都市代表のようなものです。本作の本文では解説されないためこちらにて失礼いたします。

a c t・13 それはあたかもぬるま湯のような（前書き）

序盤で数行アハんなシーンが入ります。かなりぼかしてありますが  
苦手な方はご注意ください。

act・13 それはあたかもぬるま湯のような

夢を見ていた。白い世界の中だ。

赤いソファーに座っている。ピアキイは幼い子供だった。ぶらぶらと浮いた足を降っていると、右隣に座っていた母がすすり泣いているのに気づいた。ピアキイと同じ金髪を振り乱して、両手で顔を覆ってうつむき肩を震わせている。ピアキイは無性に母が心配になつて、彼女の袖を引いた。

”ははうえ？”

母はこたえない。すると、左隣の父が急に立ち上がり、ピアキイと母を置いて歩き始めた。こちらを振り返ることもなく、まっすぐに

”ちちうえ”

ピアキイは呼びかけた。父の背中はずくなる。ピアキイは悲しくなつたけれど、どうして悲しいのかもわからなかった。

ピアキイはうつむいた。すると、のつぺらぼうのように顔の見えない全裸の女が目に入った。いつの間にか場面が変わり、ピアキイは青年の姿で、赤いベッドの上で、女を組み敷いていた。女は何かわめきながら身悶えているのに、ピアキイの心は冷え切つたまま。なんの熱も感じることなく、ピアキイは女を征服していた。

上からぼたりぼたりと何かが降ってくる。見上げれば雨。ピアキイはその場に立ち尽くしていた。金髪はいくら濡れても緑にはならない。なぜだろう？身にまとう黒い服は、水を吸って更に深い闇色に染まっていくのに。

”あら”

何も感じないピアキイに、誰かが手を伸ばし、ピアキイの首元に手を伸ばした。

”リボンが曲がっていますよ、ピアキイ様”

そう言つてピアキイのリボンを結びなおした白い服の少女は、びしよぬれの姿に頓着もしないで立っていた。彼女はピアキイの胸元し

か見ていない。ピアキイはぼんやりと思った。この少女に自分を見て欲しいな、と。いつの間にか手にしていた白い百合の花を、彼女にそっと差し出すと、少女はにっこり笑った。笑って、そしてピアキイの顔を見上げた。

ピアキイは柄にもなくドキリとした。この少女が欲しくなった。

ピアキイは、彼女の名前を呼ぼうと口を開いたが、なぜか少女の名前が出てこない。どうして？こんなにそばにいるのに、何度も呼んだ名前なのに、どうして、どうして？みるみるうちに少女の姿が霞んでいく。見えるのは最初にあった白い世界だ。待って、思い出すから、俺を置いていかないで！

「ピアキイ様？」

アルカナは振り返って声を発した。黒いコートの裾をくいと引つ張ってきたピアキイは、薄くみかん色の瞳を開いて、眠たげに何度か瞬きを繰り返した。

「……う？」まだ半分夢見心地のようだ。アルカナはくすりと笑った。

「お目覚めですか？」

「ん……」

目をこすりながら起き上がったピアキイは、しかしますます強くアルカナのコートを握った。なんだか随分と甘えん坊だ。こんなに上等な布に、しわをつけてしまふんじゃないかしら。アルカナが考えたところで、ようやく覚醒してきたらしいピアキイが問うてきた。いつもより少し低い声だ。

「どこ行くの」

「え？…あの、すみません。ちょっとお化粧直しに」

「…ああ、うん。そう」

確かめるなりピアキイはあっさりアルカナから手を離れた。あんま

りにもあつけないものだから、少し物足りない気分でアルカナは歩を進めた。テラスから大広間に戻る途中で、こっそりピアキイを振り返ると、彼はじっとアルカナを見ていた。

今日のピアキイはなにかにつけてアルカナにひつついてくる、気がする。元々スキンシップの激しい性質だったと思うが、それにしても今日はピアキイが片時も離れまいとして、必ずなにかしらアルカナに触れていた。アルカナは自分の手を見下ろした。

（手なんて繋いだの、初めてじゃないかしら）

結婚の式典で儀礼的に手を取られたときくらいだろうか。ピアキイにとつてはなんでもないことかもしれないが、男性との付き合いなんてほぼ皆無だったあるかなには、ひどく特別なことのように感じられた。アルカナは頬の緊張が緩むのを押さえながら、そそくさと化粧室に向かった。

その時だ。

「ああ、いたいた。アルカナ？」

「シェーロラスディ陛下」

「シェロでいって言うてるのに」

そんなわけには参りませんとモゴモゴ言っていると、シェーロラスディは仕方ないとばかりに苦笑した。

「ピアキイは？」

「お庭にいらつしやいますよ。今出てきたばかりなので、多分お一人だと思いますが」

「あ、いや、別にピアキイに用というわけじゃないんだ。アルカナに、例の景色を見せてあげようかと思って」

「まあ、よろしいのですか？」

「きつとアルカナも気に入と思うよ」

「あ、でも私、ピアキイ様に何も言わずに行くわけには……」

「じゃあ君のご主人に了解を取りに行くのでしょうか」

シェーロラスディはにつこり笑ってアルカナに腕を差し出した。どうすべきか迷ったが、男性のエスコートを断るだなんて礼を失することだ。アルカナは溜息をつきそうになるのをこらえて、シェーロラスディの腕に手を置いた。

「先ほどケルトに会ったらしいね」

突然シェーロラスディが切り出してきてアルカナは息を呑んだが、彼にはそれで十分だったらしい。

兄弟の顔はあまり似ていない。兄は柔和だが弟は鋭い印象なのだなと感じた。しかし少し薄いくちびると、すつきりと細い首はそっくりだった。シェーロラスディは淡く微笑んだ。

「一応自分の弟だから言うかね…ケルトも、あれで父親として思うところは色々とあるらしい。ああ見えて奴はけっこう親馬鹿なんだ。たまに届く手紙には九割ピアキイのことしか書いてない」

「え」

アルカナは目を瞠った。しかし、そう言われれば納得できることもある。

「まあ、確かに、ピアキイ様のことを考えていらっしやる節は…だけど、アンノ様は、ケルト様が、ピアキイ様を愛することができなかったと仰ってましたよ？」

「あいつはそんなことを言ったのかい？」

シェーロラスディ陛下はくすくす笑った。

「そうだな。アンノは理解できないだろう。あいつはピアキイが父を憎むのを、ずっと側で見てきたのだから」

「どういうことですか？」

「ケルトはね、エファインを、ひいてはファナティリストを捨てるらしい。一人の平凡な男として生きていくことを決めたそうだ」  
アルカナは目を瞬いた。国を捨てる？ということは、王位継承権も放棄するということだ。シェーロラスディ陛下には今子供がいらないから、彼の弟であるケルトが今は王位継承権を持っている。彼がい



なくなれば…

「まさか、ピアキイ様が？」

「いや、ピアキイは平民の子供だし、もうアンノの家に籍を移している。ケルトも対外的には息子として認めていない。まあ、上の連中はうるさいだろうが、不老不死一門の反発が強いからあいつが世界王になるのはほぼ無理だ。まず本人が嫌がつてるしね。そろそろ私も奥さんを宛がわれる頃ってことかな」

アルカナは口をつぐんだ。シェーロラスディの言いたいことがなんとなく分かったからだ。ケルトの不器用な愛に感じて、アルカナは眉をひそめた。

「そりゃ、ピアキイ様の元に嫁いだのが私、ということは、ピアキイ様に王位を継ぐ気はないのだと、そう思いますけど」

「むしろピアキイはさっさと国を離れて隠居生活でも送りたいみたいだな。アルカナには悪いが、私は当分彼をこき使うつもりだよ。ケルトの小言がうるさいけどね…おや？」

シェーロラスディは立ち止まって前方をじっと見た。彼の視線を追うと、ベンチに優雅に腰掛けたピアキイを、幾人ものお嬢さんが取り囲んでいる。血などにとらわれることなく、ピアキイの美しさは不老不死をも魅了させるらしい。きらびやかな女性に臆することなく薄っすらと微笑む夫の姿に、アルカナは拳を握り締めた。

血なんて。きっと、親族の威光も、特殊な出生も、そんなものがなくて、たとえアルカナと同じくらい、いや、いつそ奴隷の身分だったとしても、ピアキイの姿はいつだって輝くのだろう。彼のあの美しさとか、奔放な性格、人を惹きつける力を、きっと誰かが見つける。彼は誰かの輪の中心にこそ生きるべき人だ。部屋に閉じこもって、窓の外ばかり見ていた、陰気な自分とは違って。

近づいたなんて、そんなのは嘘だ。ピアキイの名前を汚さない、だなんて。アルカナの存在が、自分の知らないところで、ピアキイ

を苛んでいるのかもしれないのに。

ピアキイを困う女性の中で、幾人が彼に焦がれているのだろう。彼女らの上に立っている自信などこれっぽっちもなかった。想いも身分も自信も、きつと誰にも勝っていない。ケルトに大見得を切ったって、アルカナがただの小娘であることに変わりはないのだ。

「私、少しだけレイン様の気持ち、わかった気がします」

ちらりとシェーロラスデイがこちらを見た気配がした。アルカナは微笑んだ。権力なんて、老いない体なんて、そんなものに興味はない。それでも、自分がピアキイの側にいてもいいのだと、そんな証が欲しくなった。こんな何のとりえもない娘ではなくて、ひとつでもいいから。ピアキイに釣り合うためのものなら、なんでもいいから。

シェーロラスデイがくすりと笑った。

「…レインも昔は君のような娘だったよ」

彼を見ると目が合った。シェーロラスデイは、そっと目を伏せて、思い出すようにつぶやく。

「働き者で、優しくて。だがしかし、君はやはりレインとは違う。孤児で、その身ひとつで神殿にやってきたレインは、ケルト以外に頼れる者もいなかったけれど、君には家族もすぐ側にいる」

それから彼はお茶目にウィンクした。「もちろん私もね」

「そんな…恐れ多いことです」

アルカナは困り果てた。シェーロラスデイは、アルカナがレインのようになるとでも思っているのだろうか？アルカナには、女官を呼び捨てにする度胸さえもないのに？シェーロラスデイはケタケタ笑った。

「そうだ、アルカナ。君、仕事をするのに興味があるかい？君の淹れるお茶はおいしいってピアキイから聞いてさ。是非僕の世話係にでもなってくれないかなあ」

「えっ」

「なに勝手に甥の嫁を口説いてるの」

ぐいと引つ張られて、アルカナはたたらを踏んだ。見上げると、ピアキイが不機嫌な顔で伯父を睨んでいた。シェーロラスディは瞬く間にアルカナの手から腕を外して一歩後ろに下がった。そして白々しくもにっこり笑う。

「いいじゃないか。別に、常に夫婦一緒であれってわけじゃないし」  
「駄目」

アルカナはピアキイの脇から、彼を囲んでいた女性たちを見た。誰も彼も不快そうな顔でじとりとこちらを見据えている。アルカナはぎくりとしてピアキイから離れようと、彼の胸を押した。

「ぴ、ピアキイ様？あの、離して……」

アルカナは閉口した。ピアキイが苛々とこちらを見下ろしたからだ。  
「……なんでもありません」

ピアキイは鼻を鳴らして、アルカナの肩をいつそう強く抱きこんだ。シェーロラスディがニヤニヤ笑った。

「まったく、嫉妬深い夫を持つと苦労するね、アルカナ？」

「そ、そんな」

一体どうしたのだろうか？アルカナはチラチラとピアキイを見ながら困惑した。ピアキイはこんなにアルカナに対してべったりだっただろうか。どうせアルカナなんて、彼の数多くいるであろう女性の中の一人であるだろうに。嫉妬？何故そんな感情が沸き起こるというのだ。

父君にあつて人肌恋しくなったのかしら。アルカナは苦笑して夫に尋ねた。

「ピアキイ様、私、先ほどシェーロラスディ陛下に、このお城を案内していただくことになったのですが」

自分で言つて不安になつてきた。かの世界王陛下を、私なんかがこき使うなんて許されるはずがない。

するとピアキイは不機嫌に言い放った。

「やだ」

「別にピアキイは来ないでいいよ。邪魔だし」

シェーロラスディはあっさりと返した。それからにつこりとアルカナに笑いかける。

「ね？」

「え、えつと」

アルカナは戸惑った。シェーロラスディは企み顔だし、ピアキイは凶悪な目つきだ。震え上がりそうになるのをどうにかこらえて、アルカナは精一杯愛想良く夫に言った。

「あ、あの…ピアキイ様、一緒に参りませんか？」

「……」

どうやら夫は妻の申し出がお気に召さなかったらしい。むつつりしながら、ようやくアルカナの拘束を解くと、不貞腐れたようすで広間への道を歩き出した。

アルカナは慌てて声をかけた。

「あ、あの、ピアキイ様？」

「…リズ兄さんたちのところにいるから、用が済んだら声かけて」

「え？でも、リズSEM様がたのところには、ケルト様が…」

行ってしまった。まさか、自分から苦手とする父の元に行くなんて、大丈夫なのだろうか。慌ててピアキイを引き止めようと一歩前へ出るが、シェーロラスディが穏やかに言った。

「放っておきなさい」

「で、ですが陛下」

「あれも、君の気をひきたくてわざとそう言ったんだろう。実際はそのあたりをぶらついているだけさ。そもそもリズ達、もう帰ったしね」

「でも…」

名残惜しいような気持ちでピアキイの背を見送っていると、先ほどの令嬢たちがピアキイに声をかけていた。愛想良くそれになにやら返しているピアキイに、アルカナは唇を引き結んだ。

アルカナはぐったりとベンチに崩れ落ちた。シェーロラスディが五十代なんて嘘だ。あれから散々連れまわされたアルカナは、小一時間ほど経って、彼を「シェロ」と呼ぶことを条件によつと解放された。国主のくせに奔放な人である。きっとアルカナに渾名で呼ばせるために仕組んだのだろう。

もともと引きこもりで、体力に乏しいアルカナは、ようやくひと心地ついて溜息をもらした。ああ、でもいけない。ここはまだ外なのだから、気を抜くわけにはいかない。シェーロラスディはピアキイを探すと言つてふらふらと消えてしまったし、その間だらけた姿を晒しているわけにもいくまい。アルカナは背筋を伸ばした。

本来ならば自分がピアキイを探さなければならないのに。悶々としていると、ふと頭上に影が落ちた。真つ赤なハイヒールが目に入る。見上げると、一人の女性が、その豊満な胸を見せ付けるように腕を組み、優雅に、しかしじろじろとアルカナを見据えていた。

苛烈な人だ。アルカナは一目見ただけでそう思った。

赤銅色の髪ではあるものの、その瞳は鮮やかな緑で、彼女もまたエファインの血筋であることが伺える。黒いマーメイドラインのドレスは彼女の身体の線を緩やかに強調し、開いた胸元には下品にならないようエメラルドをあしらった細いネックレスがおりている。ショートヘアーには金のリボンが編みこんであり、セクシーさと可愛らしさが相まって、同性のアルカナから見ても妙な色香を感じた。つんと香る柑橘系の香り。香水の趣味も悪くない。

女性は紅を引いた唇を引き上げた。

「お久しぶりね。こうしてお会いするのは二度目かしら」

彼女の言葉にアルカナは首をかしげた。どこかで会ったのだろうか。記憶を探っていると、女性は嘲るように吐き捨てた。

「あなたとピアキイ閣下の顔合わせの時に伺いしたと思うのだけれど」

「え？」

じつと女性を見て、アルカナはようやく合点がいった。

「もしかして、お茶を淹れてくださった」

「ええ、そうよ。覚えていてくださって光栄ね」

アルカナには指摘する度胸などなかったが、ファナティリスト神殿の女官が、仕えるべき立場のアルカナにこうも見下すような目線を投げかけるのは許されるのだろうか。あのミュウでさえ、最初は敬語だったのに。アルカナは立ち上がって、スカートの裾を軽く上げた。

「あ、あの…アルカナです」

「そう、アルカナ・”ハインント”」

含み笑いを浮かべて女性は言った。どうもアルカナは嫌われているらしい。呼ばれた名前には修正せずに、アルカナは愛想笑いを浮かべた。

「エファイン家の方なのですね。ピアキイ様とは、ご親戚でいらっしやるのですか？」

「さあ？」

女性はアルカナの代わりにベンチのど真ん中に座ると、あでやかな笑みのまま首をかしげた。

「私はリーゼル。あなたにはお世話になってるから、一度ご挨拶をしておかなきゃって思ってたの」

「お世話、ですか？」

なんだか嫌な感じだ。女性はアルカナを下から見下している。上目遣いなのに、見下されている。この先を聞きたくはないが、アルカナは眉をひそめたままその場に立ち尽くした。袖の裾を握り締めているのに気づいたのか、リーゼルと名乗った女性は実に愉快そうだった。

「私のためにピアキイ様と結婚してくださったのだもの。お礼のひ

とつくらは、ねえ？」

「……どういうこと？」

顔を強張らせるアルカナを見て、リーゼルは満足げだ。アルカナを手招きしてくる。怪訝に思い顔を寄せると、アルカナの耳元でリーゼルがささやいた。

「だって、私とピアキイ様は愛し合っているのですもの」

いつまでそうして呆けていたのだろう、ベンチに一人座り込んでいたアルカナは、頭上から声をかけられてようやく我に返った。

「アルカナ」

金髪にみかん色の瞳の青年は、いつもどおり涼やかな表情でこちらを見ていた。数拍置いてアルカナは、そういえばシェーロラスデイが迎えに行ったのだと思い出した。

「ああ」

アルカナは呆然としたまま立ち上がった。

「シェーロラスデイ様は？」

「入り口で待つてる。行こう」

当たり前のように腕を差し出してきたピアキイに、アルカナは途方に暮れた。その腕を取ってもいいものか不安になったのだ。

じつと腕を見つめたまま動かないアルカナにしびれを切らしたのか、ピアキイは不機嫌に眉を寄せると、ぐいと腰をつかんで、アルカナを引きずるように歩き出した。たたらを踏んで、アルカナは思わずピアキイのコートにしがみついた。彼の肩に耳をぶつけると、ふと爽やかな柑橘類の香りが鼻をかすめた。

「……どちらに、いらしていたんですか？」

「ん？」

チラリと視線を向けられて、アルカナはたちまち意気消沈してうつむいた。

「いえ…」

ピアキイはまた何を考えているのか分からない表情で、しばらく辺りに視線をさまよわせていたが、ふと意地悪な微笑を浮かべるなり、立ち止まってアルカナの頬に空いた片手を滑らせた。

「なに、さびしかった？」

「そつ、そ、そんなことは！」

真つ赤になって思わず抗議しようとするが、不意に先ほどの胸糞悪い女を思い出し、アルカナはむっとしたままピアキイから視線を逸らすと、頭についた白い花弁を指先で弄った。

「…そうです、寂しいというか、…心細いというか」

ぼそぼそとアルカナは白状した。

「私にとつてここは初めて来る場所で、それに私、あんまり良く思われてないみたいだし…ピ、ピアキイ様がいてくれなきゃ、私…」  
みなまで言うのも恥ずかしい。尻すばみになってごによごによと声にならない声を上げていると、やがてピアキイがくすくすと笑い出した。するりとアルカナの首に腕を回すと、アルカナのこめかみに額を寄せてくる。嫌になるくらい自然な動きだった。

「私”、なに？」

「……」

「言つてよ」

「…もうつ、からかわないでください！」

無理矢理彼を引つpegすが、ピアキイはすっかり上機嫌でアルカナの手を握ると、スタスタ歩き出した。またもアルカナは引きずられる形になったが、先に行くピアキイの金髪と、繋がれた手を何度か見比べて、なんだか笑い出したい気持ちになると、ピアキイに小走りで追いついた。



正直に言おう。リーゼル・エファインはアルカナにとって、激しく気に食わない女だった。

アルカナだって誰にでも愛想良く穏やかに、万人を嫌わずにいられる聖女様なんてものではないのだ。ミユウに対して柔らかな物腰でいられたのは、単純に彼女を敵に回せば生活に支障をきたすと思ったからだ。今でこそ彼女とうまくやっているからいいものの、ピアキイの制裁がなければ間違いなくもっと冷え冷えとした関係になっていただろう。

リーゼルは戸惑うアルカナにこう言った。

「私とピアキイ様はどんなに愛し合っても一緒にはなれないの。私は貴族だけど、エファインの人間からすれば、平民の子であるピアキイ様と一緒になんて無理なんですもの。私とピアキイ様に接点があるってことも、お父様には論外ってわけ。とはいえ、ピアキイ様の立場は難しいでしょう？結婚しないわけにはいかなかったんですもの。じゃあ、隠れ蓑を立てるしかないじゃない？」

「…隠れ蓑、というのが私、ですか」

「ええそうよ。あなたはたいした身分でもないし、ピアキイ様の興味にも合いそうにない。だから私が推薦したの。あなたなら、ピアキイ様を取られる心配もないでしょ？」

アルカナは閉口した。言い返せないというよりも、むしろ不老不死というのはこうまで非常識なのかと感心さえしていた。まじまじとリーゼルを見ていると、彼女はくすくす笑った。せつかくの美女なのに、悪役じみた笑顔が勿体無い。

しかし、リーゼルがそう思う気持ちを分らないでもない。アルカナは別段なんの取り得もない平凡な女だし、対してピアキイが婚前連れていた女性といえ、いつも目を瞞るような美女ばかりだった。確かにピアキイの好みから、アルカナは大きく外れているだろう。…自分で認めるのは癪な話だが。

アルカナは腸が煮えくり返る思いでにこりと笑った。

「それはそうでしょうね」

「あら、案外物分りがいいのね」

「ピアキイ様が私のことをどうとも思っていていらっしやらないのは確かですもの」

これをこんな女の目の前で吐露しなければならいなんて屈辱だ。拳を握り締めながら、温和な振りをしてリーゼルを迎え撃つ。リーゼルは悠然と佇んでいた。

「そう。ならいいのよ。隠れ蓑は隠れ蓑らしくおとなしくしていれば。それだけは言っておこうと思って。それじゃあね」

気分が晴れた様子で立ち去ろうとするリーゼルの背中に、アルカナは穏やかに声をかけた。

「リーゼルさん」

「なあに？」

「私とピアキイ様の顔合わせから輿入れまでの間に、ピアキイ様とお会いになりました？」

「…いいえ。だってピアキイ様はお忙しい方ですもの」

「そうですか」

アルカナは笑みを濃くした。少なくとも、この女に一泡吹かせてやることはできそうだ。案の定、アルカナの意味深な台詞に、リーゼルは怪訝そうに振り返った。

「なんだっていうの？」

「いえ…ピアキイ様とそんなに深い仲でいらっしやるのなら、私がわざわざ申し上げる必要などないのでしょうが…」

リーゼルが苛々している。アルカナは内心でほくそ笑んでやった。「毎日私の見えるところでピアキイ様が堂々と浮気していっしやるのを見ておりましたけど、その割にあなたをお見かけしなかったなと思ひまして」

今度はリーゼルが真っ赤になる番だった。憤然と去っていったリーゼルの背中を今度こそ見送って、アルカナはぼんやりと思考にふけ

った。

分かつてはいたことだが、窓越しの世界と直接対面するのでは、随分と違うものだ。アルカナはまずそう思った。分かつている。ピアキイにはアルカナなどいなくても、いくらでも素敵なお相手は選べるし、そしてきつと彼に恋焦がれる女性など、掃いて捨てるほどいるのだと。

リーゼルだって、彼女がどう考えているかは知らないが、ピアキイにとつては取るに足らない女性のひとりに過ぎないのだろう。「使い捨て」。そう、そんな感じ。

アルカナだって同じだ。これまでの生活で、アルカナとピアキイはそれなりに親密になったとは思うが、けれど、それだけだ。アルカナが今ここでピアキイに離縁を申し出たところで、彼はたいした感慨もなくアルカナを手放すのだろう。妻に選ばれたのは、ただ、自分がピアキイにとつて都合がよかっただけだ、自惚れるな。アルカナは自身に言い聞かせた。

（だけど）

アルカナはぽつりと考えた。

（私は、そもそも…ピアキイ様に、好きになつてもらいたいのかしら）

今まで考えたこともなかった。ピアキイはまるで雲の上の人だったし、結婚してから、夢の中でまどろんでいるようで。目まぐるしく日々が過ぎていくばかりで、ピアキイとの関係を、少しでもマシな夫婦になりたいとは思っていたけれど、でも。

（私は、ピアキイ様と、”恋愛”がしたいのかしら）

人は不相応だと笑うかもしれないが。考え出せば止まらなかった。

あのみかん色の瞳でじつとこちらを見つめてほしい。あの金髪に指を通したい。彼に抱きしめられたい。一緒にどこかへ行つてみた

いし、目が覚めたとき隣にいてほしい。他愛もない話をたくさんしたい。…あのくちびるから、私を好きだと言うことばがほしい。

いつの間にこんなに欲深くなってしまったのだろう。アルカナは口元を押さえた。ほんの淡い憧れだったはずだ。一時期は彼を最低だと思ったはずだ。なのに、どうしてこんなにも、彼に焦がれているのだろう。何があつたわけでもないのに。

アルカナは自分の途方もない願い事に愕然とした。こんな平凡で貴族らしくもない、ただの小娘が、あのピアキイの唯一になれるわけもないのに。ピアキイに声をかけられるまで、アルカナはそうやって、呆然とその場に佇むしか術がなかった。

a c t . 1 4 朗報となるかは君次第（後書き）

やっとまともなライブルが出てきました。

エファイン家から帰ったアルカナが、次の日から劇的におしゃれに目覚めたことに、ミュウは今更かと呆れ溜息をついた。今までの質素ななりから一転して、ピアキイから贈られた白い衣装に身を包み、ハンドケアにこだわり、入浴時間が少しばかり延びた。化粧も華美すぎない、かわいらしいものに変わっている。

「どうしたっていうの」

目を白黒させて問うたが、実のところ答えはもうわかっていた。彼女をこんなに…認めるのは癪だが…可愛くする男は、ミュウの知る限り一人しかいない。

アルカナははにかんだ。

「私、ピアキイ様に少しでもアピールしようと思って」

今更だ。本当に今更。アピールもなにも、ピアキイのほうも鎮魂日に本家から帰ってきたとき様子がおかしかった。妙にそわそわして、アルカナになにかという構って。本当にわずかな差だったし、その次の日からピアキイは執務室に詰み上がっているらしい仕事で部屋に戻ってこないものだから、アルカナには分からないかもしれないが、それでも、ピアキイが以前にも増してアルカナを気にかけているのは見るも明らかだった。

ミュウが考え込んでいると、アルカナは何を思ったかあわて始めた。

「あっあの、わかってます。分不相応ですよ。私も、きつと振り向いてもらえないだろうって思ってた…でも…」

「本当、わかってないわね」

「そうですよね」

しゅんとしたアルカナに、ミュウは笑いかけた。

出合いはともかく、今は、この主のことは、そんなに嫌いではな

いのだ。

「そんなにあからさまにしないで、もっとうまくやらなきゃ」

「ねーね、アルカナ、なんか今日いいにおいがする」

今日のファレイアはアルカナのスカートの裾にべったり張り付いている。ミユウにそそのかされて、「最初は香水を変えるくらいでいいのよ」と言われたアルカナはドキリとした。

「わかりますか？」

「ん」

そうしてぎゅっと抱きついてくるということは、この香りはファレイアのお気に召していただけたということだろう。アルカナはにっこりした。

「ママのにおいに似てる」

「ファレイア様のお母様ですか？」

ファレイアの口から、病で寝込んでいるという母の話を聞くのは珍しい。アルカナは問い返すと、少女は目を輝かせた。どうやら今日の彼女はご機嫌らしい。

「あのねっあのねっ、ママはまほうつかいなものよっ」

「魔法使い…ですか？」

魔術を使える人のことは時々魔術師と言ったりするけれど、アルカナが目を瞬くと、ファレイアは上機嫌に言った。

「パパがよく言ってるのよ！パパはね、ママのまほうにかけられたんだって！『こいのまほう』っていったー！」

「…ああ、そういうこと」

アルカナは苦笑した。いかにもアンノらしい言い草である。

「それでね、ピアさまもね、そうなんだよ」

「え？」

「パパがね、ピアさまも、まほうにかけられたんだって。ピアさまのところに、まほうつかいがやってきて、ピアさまにまほうをかけたんだって」

心臓がバクバク鳴った。淡い期待が首をもたげる。ミュウがちらりとこちらを見る気配がした。先のリーゼルの言葉より、ほんの子供であるファレイアの台詞のほうがよく、アルカナには効果があった。

アルカナは声を潜めた。

「それで、その魔法使いは誰なんですか？」

「それがね……」

むふふと笑うファレイアが手招きするので、アルカナは彼女に耳を寄せた。すると。

「あーら、相変わらず下賤な部屋ですこと！」

居丈高な声が飛んできて、一同は呆けた顔を上げた。ミュウが盛大な溜息をつくのが聞こえる。見ると、入口の扉にもたれて、リーゼルがフフンと鼻で笑った。

アルカナはべたりと笑みを貼り付けた。

「こんにちは、リーゼルさん。本日はどうなさいました？」

愛想良く言っていると、リーゼルは気分を害したようだった。

最近、よくこうやってリーゼルが部屋にやってくる。なんと彼女はピアキイの仕事場での世話係を務めているらしく、仕事の合間を縫ってこちらに来ては、アルカナにちくりとものを言うのだ。ついでにあてつけのように、ピアキイからの仕事をひけらかす。

「ピアキイ閣下が万年筆をお忘れのようなの。持ってきていただける？」

「ああ、今度は万年筆ですか」

机から安物のペンをひとつ取り上げて、アルカナはにこにこことりー



ゼルに渡した。

「最近ピアキ様は忘れ物が多いのですね」

何も知らない小娘の振りをしてアルカナは首をかしげた。それを見たりーゼルがまた機嫌よろしくアルカナを嘲笑った。万年筆の良し悪しもわからないのか。アルカナは眉尻を下げて微笑んだ。それさえもりーゼルは気づかない。

「妻があなたのような人間なのだから、ピアキ様も気苦労が多いでしょう。子守りもままならないのだし……」

りーゼルはちらとファレイアに不躰な視線を向けた。

「だからこそ、私がお支えする必要があるの。ミュウもこんな主を持って大変ね。それじゃあ、失礼」

言うが早いのか、りーゼルは身を翻して颯爽と去っていった。どこからあんな自信が溢れるのか不可思議だったが、彼女の胸を張るさまは尊敬すら呼び起こした。

「フィー、あのおんな、きらい」

「ファレイア様、そんなことを言っではいけませんよ」

ファレイアはアルカナ以上に、りーゼルが気に食わないらしかった。ライバルとして張り合う気すら起こらないらしい。アルカナはちょっとした優越感で胸が熱くなった。ファレイアは積み木を持ち出していると言った。

「パパがあのおんなのことおこったのよ。ピアさまが困ってるっていつてたもん」

「アンノ様が？」

あの明朗で温和な男が怒るとは、りーゼルは相当唯我独尊らしい。アルカナは目を丸くした。

「うん、フィーもね、あのおんなきらい！」

きつぱり言っ、積み木に興じるファレイアを見ながら、アルカナはどうにも釈然としなかった。

あの女が、エファイン家の生まれを誇りに思い、自分が美しいこ

とをよくわかっている気位の高い女性であることは見るも明らかだ。ピアキイに侍っていた女たちが、そういう同性からの反感を買いやすい人間だということはアルカナも知っている。けれど、実際に結婚してみても、ピアキイが馬鹿でも考えなしでもないはずなのに、そうしてあんな女ばかり傍に置いていたのは不思議でならなかった。やっぱりいくらやり手のピアキイ閣下といえども、女の趣味は悪いってことかしら。いつぞやか浮かんだ考えをもう一度思つてアルカナは首をひねった。ピアキイ様って面食いなだね。

物思いにふけりながら、花瓶に生けてある青いエソルを見るともなしに見ていると、ミュウがこつそりと尋ねてきた。

「ねえ、万年筆、あの女に渡してよかったの？」

「ピアキイ様のペンをお渡しするわけじゃないじゃないですか。私の持つている父からのお下がりです。」

どこに持ち出されるのかわかったものではない。おとなしく夫の持ち物を渡すほどアルカナは愚かではなかった。どうせピアキイは自分の持つものに頓着しないし、無事万年筆が彼に渡ったとして彼が気にするとも思えない。

ミュウはアルカナのしてやったりな笑みに溜息をついた。

「…アンタって案外強かよね」

「だって、納得いかないんです。あの方がピアキイ様のホントに好きな人だって」

第一、それならピアキイはなぜアルカナにそれを隠しているのだろう。婚約当初は散々彼にひどい扱いを受けていたのだから、本命がいるなら、その話はアルカナにダメージを与える絶好のネタだったはず。そもそも、ピアキイに隠し事自体似合わない。

「最初に、ピアキイ様に本命の方がいらっしやるってお聞きしたときはびっくりしましたけど」

「あら、アンタその噂知ってたの」

ミュウも知っている話らしい。ファナティライスト神殿の女官の話

題だから、彼女にとっては身近なものだろう。ましてあのリーゼルはやたらと目立つ。アルカナはにっこり笑った。

「まあ、実物を見て、根も葉もない噂だと思ってスッキリしました」  
「アンタ、よつぽどリーゼルのこと嫌いなのね」

「大嫌いです」

人のことを隠れ蓑呼ばわりするし、無駄にえらそうだし（事実アルカナなどよりもよほどいい家柄なのだが）ああいう鼻持ちならない女はアルカナとは馬が合わなかった。どうせ向こうからも嫌われているのだし、ピアキイはエファイン家とあまり係わり合いにならないようだしで、アルカナとしても彼女に媚を売る必要もない。一応そつなく追い返しているが、アルカナの内心は穏やかではなかった。なにせ、奴が引き止めているのか知らないが、ここ最近アルカナはピアキイと会えていないのだから。

いくら好きだって、本人に会えなきや意味ないじゃない…むつつりしながら、フアレシアの襟が折れているのを直してやると、突然部屋の扉が開いた。女三人そろって飛び上がった。噂をすれば影。ピアキイがうんざりした様子でやってきた。

アルカナはあわてて立ち上がった。

「お帰りなさいませ、ピアキイ様…わあっ」

スカートのすそを足で踏んづけてよろけると、すくい上げるようにピアキイに腰をつかまれた。久々に彼の端正な顔立ちを間近で見たものだから、アルカナはぎょっとした。ピアキイはお構いなしだ。アルカナをソファに座らせると、その膝に頭を据えてごろりと横になる。彼の長い脚は二人掛けのソファでは物足りずに、すっと突き出ている。

「ピアキイ様!？」

いつものことながら、アルカナはピアキイの唐突な挙動に思考まで真っ赤になった。彼は駄々をこねるがごとく「んー」と声を上げて寝返りを打った。

沸騰寸前のアルカナとは打って変わってフアレイアは大喜びだ。

「ピアさま、ピアさまっ、フィーといっしょにあそぼ！」

「うるさい、疲れてんだ、ガキ、どっかいけ」

ピアキイは端的にフアレイアを罵った。目を開きすらしない。フアレイアが口を尖らせた。

「ガキじゃないもん、パパはフィーのこと、『可愛<sup>イテルブ・イダール</sup>いレディ』って言うてくれるもん」

「『お子様<sup>ドリック・イダール</sup>レディ』、頼むから消えてくれ」

払いのけるように手を振ったピアキイは本当にお疲れのようだ。足でブーツを脱ぎ落とすと、「むう」と間拔けな声を上げて眉を寄せた。そういえばついさっき万年筆をリーゼルに渡したばかりだが、あればどうなったのか。尋ねたいけれどできないものかしさにあちこち視線を飛ばしていると、ピアキイが出し抜けに、ミュウに向けて手を振った。

「おまえ、荷物整理しといて」

「……は？」

「明日、俺とアルカナは出かけるから。お前は休み」

アルカナとミュウはたと顔を見合わせた。そんな話は聞いていない。

「またエファインのご本家ですか？」

「はあ？」

心底うざったそうにピアキイは薄っすら目を開いた。みかん色の瞳が弱弱しくアルカナを射抜く。

「お前が言っただろ、ハイネント家に来いって」

「…それって」

「ハイネント家にはもう連絡してあるから。…もうねる…集会から帰ってきてから仕事が終わらなくてろくに寝てないんだよ」

アルカナはむくむくと自分の中で気分が高揚していくのを感じた

…ピアキイはやっぱりリーゼルと逢瀬を楽しんでいるわけではなかった。そればかりか、彼は自分との時間を作るために、こんなへとへとになるまで仕事をがんばってくれたという。どうやら香水には気づいてもらえなかったが、アルカナは大満足だった。

にんまりするアルカナとは対照的に、フアレイアがわめいた。

「えー！！フィーもいつしよに行きたいよう！」

フアレイアには散々駄々をこねられた。いったいどういう心境の変化か知らないが、香水はピアキイではなくフアレイアのほうに劇的な効果をもたらしたらしい。その晩、アンノが迎えに来たにもかかわらず、アルカナのスカートから離れようとしないうちに、ピアキイは心底迷惑そうな顔をした。

「邪魔だからさっさと帰れよ」

「やだやだっ！フィー、アルカナといっしょにいるー！」

「駄目だよフィーちゃん、アルカナ嬢にご迷惑がかかるから」

「ホントだよ」

唾でも吐きそうな態度でそう言うピアキイに苦笑して、アンノは身をかがめてフアレイアを抱きかかえた。立ち上がるときに彼はすとひとつ鼻を鳴らした。

「アレ、アルカナ嬢、香水変えました？」

「え？ええ。わかりました？」

「いいですねエ。ウチの女房の使ってるものに似てるかな。フィーもそれで甘えん坊になっちゃったのかな？」

「ふふ、お世話になってる女官の見立てなんです」

さらりと言ったところで、アルカナは隣のピアキイの機嫌が急降下していることに気づいて口をつぐんだ。ピアキイの脚がふらりと動く。アルカナははらはらした。

アンノはそれに気づいているのかいないのか、にこにこ笑いなが

ら続けた。

「そういえばお二人とも、明日はアルカナ嬢のご実家に帰られるとか」

「は、はい。そうなんです。ピアキイ様がわざわざお休みを取ってくださいって…」

「まあ、近頃の閣下、鬼のように働いてましたからねえ。ピアキイ付の女官がずいぶん拘ねてましたよ」

アンノはどこまで知っているのだろう。アルカナは目を瞬いた。わざわざアルカナの前で彼女の話題を振るということは、リーゼルが最近、何かにつけてアルカナを嘲りに足繁くやってくるのも伝わっているのかもしれない。

「いい加減にしろよ、アンノ。蹴るぞ」

そう言いつつピアキイは既にアンノの向こう脛を蹴っていた。アンノがうめいた。

「まったくモオ。そうやって閣下がアルカナ嬢を囲って出さないから、あることないこと噂が立つちゃうんですよ」

噂？アルカナは尋ねようとしたが、その前にピアキイがむつつりと言い放った。

「うるさい。調子に乗るな。口が軽いんだよ。おせっかい」

「都合悪くなるとすぐ暴言吐くんですから。アルカナ嬢に嫌われちゃいますよ。ねエアルカナ嬢」

「えっ、いえ、そんなことは…」

またピアキイの脚がゆらめいているのを見てアルカナはあたふたした。どうやら確信犯らしい。アンノはケタケタ笑った。

「まあ、明日はどうぞ楽しんできてくださいね！じゃあ今日はこれで。フィー、アルカナ嬢とピア様にばいばいは？」

「むー」ファレイアはまだしかめっ面だ。「アルカナ、ピアさま、ばいばい」

アズラーノ親子が帰るなり、ピアキイは勢いよく扉を閉めた。よ

ほどアンノの言動がお気に召さなかったらしい。辟易した様子でソファにうつぶせに倒れこむと、「うー」と声にならない声を上げている。その背中がなんだかわいらしくて、アルカナはくすりと笑った。

「わらうな」

くぐもった顔でピアキイが言った。アルカナは口元に手を当てて神妙な顔を取り繕うと、ごまかすように積み木を片付け始めた。ピアキイの機嫌を損ねて明日の帰宅が叶わなくなったら大変だ。ミユウはもう帰ってしまったし、どこかいたたまれない気持ちで片付けをしていると、やがてピアキイが口を開いた。

「アルカナ」

「はい？」

振り返ると、ぼーっとした様子でピアキイはこちらを見ていた。アルカナは思わず笑ってしまった。

「ピアキイ様、眠いのでしたら、寝室に行かれたらいかがですか？」  
「ん」

ふらふらとピアキイは立ち上がった。午後一杯寝倒したのにまだ足りないらしい。寝ぼけ眼でふらりとすると、彼はなぜかこちらに寄ってきて、ぎゅうとアルカナを抱き込んだ。

「！？」

アルカナは寿命が縮まるかと思った。ピアキイは何も言わずにアルカナを抱きしめて、そして、満足がいったとばかりにあくびをしながらするりと寝室へと歩いていった。

「いったいなんだというのか。」

積み木を取り落としたことにも気づかずアルカナは呆けた。頬が熱くて仕方ない。目下の問題は、彼の眠っているだろう夫婦共用のベッドに自分が潜り込めるか。アルカナはまったく自信がなかった。

a c t ・ 1 5    恋する若者（後書き）

ピア様は香水に気づかなかったんじゃないで、むしろちゃんと最初帰ってきたときに気づいてたけどあまりに眠くて言いそびれて、いつ言おうかタイミングを見計らってたのにアンノに先を越されたとかだとかかわいい。



a c t . i 6 ハイネントの館（前書き）

更新滞りまして申し訳ありません。

アルカナは寝不足だった。朝からピアキイの寝顔を間近で拝むという心臓に悪い思いを久々にしたアルカナは、うつらうつらしながら白いワンピースと厚手の深緑のカーディガンに袖を通して、香水に手を伸ばしたところでようやくバチリと目が覚めた。香水の瓶を持った手をピアキイにつかまれたのだ。

「な、なんですか？」

「その香水はやめろ」

ドクリと心臓が鳴った。アルカナは恐る恐る尋ねた。

「お嫌いでしたか？」

「…べつに」

口を尖らせてピアキイはそっぽ向いた。このところアルカナが習得していたピアキイの表情録によると、これは恥ずかしがっているときの彼の挙動だったはずだが、どうして彼が恥じらう必要があるのかまるで分からずにアルカナは首を傾げた。思い当たる節といえば、昨晚のアンノとのやりとりくらいである。

…もしかして、私の香水が変わったことに気づけなかったからって、拗ねてるのかしら。

まさかねえ、アルカナは自分の予想を打ち消して、これまでと同じ香水を手を取った。今度はピアキイも文句はないようだった。

ハイネント家は、ファナティリスト神殿から随分離れているため、寝不足のアルカナはひいこら言いながらピアキイのあとをついていった。もともと引きこもりのアルカナには、坂道の多いファナティリストの街を歩くのも一苦勞である。容赦なくアルカナを置いていこうとするピアキイに「待ってください」とへろへろ叫んだ

回数が三回に上るうかという頃、ようやくピアキイは呆れたように振り返った。

「お前、そんな運動不足でよく神殿まで来られたな」

「お輿入れのときは馬車だったし、家から神殿に向かう道は下り坂なので…」

ピアキイはため息をついた。彼の長い脚は疲れ知らずらしい。考えても見れば彼は毎日のように神殿からあの宿屋まで行き来していたのだ。まったく尊敬する。

肩で息をするアルカナに、ピアキイは目を眇めて、それから不意にアルカナの手を取った。ぎゅっと握られる。エファイン本家の時よりも温かい手だった。するりと指を絡められて、アルカナは思わずピアキイを見上げた。彼はぐいぐいアルカナの手を引っ張って歩き出した。彼の歩幅は広くて、アルカナは少し小走りにならなければいけなかったが、すっかり仰天してしまつて疲れも吹っ飛んでいた。

ご機嫌のアルカナに気づいているのかいないのか、ピアキイはさつさと歩を進めていく。貴族街は人通りもなく静かなものだが、時折通りがかかる小貴族然とした青年が、物珍しげな目でチラリと見るので、アルカナはうつむいた。ピアキイ・ケルト・エファインという男は、同性の目から見ても格好いいのかしら。アルカナと並んでいる姿が不釣り合いだと思われたら悲しいものだ。

「ほら」

物思いにふけっていると、ピアキイが空いた左手で指差した。「あれだろ」

望郷の思いとは大体こんなものだろうか。不思議な心地でアルカナは我が家を見つめた。随分長いこと帰っていなかったはずだが、家の外観は記憶と何一つ食い違いもなく、精々庭先の樹が実を付けたくらいで、妙な違和感とともにアルカナはほうと息をついた。変わっていないことが奇妙に思えるというのもまた奇妙な話だ。一年

も離れていなかったのに。思ったところでピアキイがぽつりと言った。

「五か月ぶり？」

「そんなところですよ」

屋敷の向かいの宿屋がざわめいている。いつもピアキイが立っていたのはちょうどこのあたりだろうか。カランとベルを鳴らして開いた扉から、箒を持った宿の従業員が顔を出す。手をつないだままのピアキイとアルカナに気づいて、一瞬おやと目を見開いたものの、すぐににこやかに会釈して掃除をはじめた。いたたまれなくなつて手を離そうとしたが、直後ピアキイから強く引っ張られてアルカナはたたらを踏んだ。

「わっ」

「さっさと行くぞ」

ピアキイについて早足になりながら振り返ると、ぱちりと従業員と目が合った。まだ若いその青年はお茶目にウインクして、「ご武運を」とでも言いたげに一礼してみせた。

小さな門を越えると申し訳程度にささやかな庭があり、その先に両開きの扉が鎮座している。ピアキイはためらいもなくノッカーを鳴らした。アルカナは訳もなくどきまぎした。しばらくの沈黙のあと、軋んだ音を立てて扉が開いた。ひょっこりとあどけない顔が突き出す。

「はいー、どちら様ですか？…ひゃあ」

トリノはピアキイの顔を見るなりパカリと口を開いた。ピアキイの輝くオーラに当てられたらしい。

アルカナはため息をついた。

「トリノ、ただいま」

「わ、お帰りなさいませ、アルカナお嬢様！ピピッ、ピアキイ様もようこそおいで下さいました！」

勢いよく両開きの扉を開くと、その勢いそのままにトリノは絨毯に

かかとを取られてすつ転んだ。アルカナには使用人とは思えないほど生意気なくせに、ピアキイを目にした途端これだ。アルカナは気まずい緊張を打開するために言った。

「…うちの使用人のトリノです」

「知ってる。お前が一度寄越した奴だろ」

それからピアキイは愛想笑いを浮かべて、トリノに近寄っていった。初めてアルカナと面会したときもこんな顔をしていたが、今見れば彼の外行きの顔だとすぐに分かった。

「大丈夫か？」

「あ、あわわ、大丈夫ですウ……」

トリノがピアキイの手を取ろうとしたことに、ピアキイの眉がぴくりと動いたので、アルカナは思わず口出ししていた。

「ピアキイ様、どうぞお気になさらないでください。トリノ、ピアキイ様のお手を煩わせてはいけないわ」

トリノがはつとして手を引つ込めたので、アルカナはぐいと彼の腕を引つ張って立たせた。いつの間にピアキイ様と手を放したのかしら。トリノの腕を掴んでいる左腕をじっと見てアルカナは目を瞬いた。

「もう、ちゃんとしなさいよ。まだそんなにドジなのね」

「まだお嬢様が家を出られてから半年じゃないですか」

相変わらずアルカナにはふてぶてしい使用人だ。しかし、アルカナとのやりとりの間に冷静さを取り戻したらしいトリノは、ようやく彼の本分を思い出したらしかった。

「旦那様を呼んできます！」

そうしてわたたと走り去っていったトリノを見送ってから、アルカナはピアキイを振り返った。

「客間に参りましょう。すみません、うちの使用人の躰がなっていないくて」

本来なら客人を部屋に通してから主人を呼ぶのが筋だろうに。アルカナは苦笑した。トリノは変わらずそっかしいようだ。ピアキイ

はあまり気にしていないという風に肩をすくめた。

「まったく失礼いたしました」

しかしアルカナが弁解するより先に、階段を下りる音にあわせて青年の声が朗々と響いた。二人して見上げると、鳶色の髪をなでつけながら、おっとりとした薄目の男が微笑んでいた。

「ピアキイ・ケルト・エフアイン閣下なんて雲の上のお方が我が家に来たものだから、彼も緊張しているのでしょう。…申し遅れました。ツヴァルク・ハイネントと申します。この家の婿で、アルカナの義兄でございます。アルカナがお世話になっております」

「…どうも」

ピアキイはまた愛想笑いを浮かべた。「雲の上」という言い方が気に食わなかったらしい。アルカナは慌てて言った。

「ピアキイ様、この家にいる間は、どうぞここを我が家と思ってくつろいでくださいね。この家の者も家族として接してくださっていいんですからね」

「アルカナ、そんな失礼な…」

アルカナはツヴァルクの足を踏んづけた。彼は鈍感だから、アルカナがどうやってピアキイを誘ったかなんて気づきもしないだろう。ピアキイはようやく表情を和らげた。アルカナの襟元に手を伸ばしてリボンを弄ってくる。アルカナはにつこり笑った。

「うちの父などは身分に頓着しない人ですから、ご無礼があるかもしれないませんが、どうぞお許してくださいね」

ピアキイは答えなかったが、気を悪くしてはいないらしい。アルカナはツヴァルクを見上げた。

「客間に参りましょう」

案の定と言うべきか、アルカナの父、トロット・ハイネントは、

かの世界王の甥にもまったく氣負うことなくにこやかに迎えた。

「ご無沙汰しております、ピアキイ閣下。アルカナはいい子でやっていますか？」

「ええ、アルカナはとても氣立てがよくて頼りになります」

にこやかに答えたピアキイに、どうだか、とアルカナは心の中だけでつぶやいた。普段のピアキイに慣れてしまったからか、こうして猫をかぶった彼はなんだか奇異に見えた。

トロツトはうんうんうなずいた。

「そうでしょうそうですね。うちの子は家事ならなんでもできますからお役に立てることもあるでしょう」

「あなた！その失礼な口を閉じてくださいな！」

母のミリアナが真っ青になってわめいた。相変わらずの我が家である。アルカナはちらりとピアキイを伺い見た。すると彼はなにやらくすくすと笑っている。おなじみの嘲笑や繕った笑みではない、紛うことなくピアキイの笑みだ。アルカナはびっくりした。

「なんですか？」

「おまえって母親似だろ」

ピアキイの台詞にアルカナはきよんとした。

「皆は父似だと言いますけど」

「さっきの母親の台詞、おまえにそっくりだった」

ひそひそ内緒話をするみたいに囁かれ、アルカナはあたふたした。

苦し紛れに「や、やだ、そんなことはありません」と言っのが精一杯だ。

アルカナとピアキイ夫婦を見ていたツヴァルクが笑った。

「何はともあれ、元氣そうですねによりだ、アルカナ。君ときたら、僕のいない間に閣下との顔合わせを済ませてしまつて、僕が直接お祝いを言う暇もくれないんだから」

「急な話でしたから仕方ありませんわ」

姉のハノンがさりとて言う。アルカナは曖昧に笑った。

興入れが決まったとき、このツヴァルクは父の代わりに大陸のほうへ使いに出ていたのだ。そんなに長い出張ではなかったが、戻ってきたのはアルカナとピアキの顔合わせより後のことだったから、アルカナは男性と会うことが許されておらず、ツヴァルクからの祝いも姉伝に聞いたのだ。

ハノンとツヴァルクは相変わらず夫のほうが妻にたじたじらしい。アルカナは家族を見回した。

「お父様がたはお元気でしたか？」

「何事もなかったわ。まったくあなたは、手紙のひとつも寄越さないんだから……」

「まあまあ、ミリアナ。便りがないのは元気な証だよ」

父が母をなだめた。そういえば父からもった万年筆をなくしたことを言うべきかしら、アルカナがぼんやり考えながら、紅茶にジャムを入れてかき混ぜていると、またもピアキが囁いてきた。

「夫婦って本当に違うんだな」

「はい？」

「リズ兄さんとナシャ姉さんとちがう」

「そりゃあ、リズセム様とナシャ様は……いろいろ規格外ですよ」

妻にべたべたしていたリズセムの姿は強烈だった。新婚だってあの二人には敵うまい。少なくともアルカナとピアキでは天地がひっくり返っても彼らのようにはなれないだろう。ただ、彼が少年時代世話になっていたアズラーノ夫妻も仲むつまじいと聞いているし、ピアキにとつての夫婦の理想とはそういう仲のよいものなのかもしれない。

結婚してから突然ピアキが丸くなったのもそういうことかしら？アルカナは紅茶を飲みながら考えた。うちの使用人よりもピアキ様のほうが紅茶の淹れ方がうまいわね、関係のない話だけど。

そもそも、自分とピアキは、半年も結婚生活を続けてきたのに、お互い夫婦という意識がいまいち薄い、そんな気がする。アルカナ



にとってピアキイは、夫ではあるけれどそれ以前に憧れの青年であり、向こうも妻であるアルカナにきつと気を許してくれているのだろうが、それが伴侶に対する気安さかと問われれば、どこか違う気がした。友達では決してないし、家族というにはどこか一線を引いていて、恋人ではありえない。言葉では表しがたい不思議な関係だ。同じ部屋に住む他人、そんなあたりが一番近いだろうか。

ピアキイはアルカナとの関係をいつたいどんな風にしたいのだろう、アルカナは知りたいけれど知りたくない心地で、紡ごうとした言葉を紅茶で押し流した。ピアキイが自分との夫婦仲を、リズセムやナシヤのようにする気がほんのちよつとでもあればよいのだが。

会話が途切れたところで、ハノンがアルカナに声をかけた。

「それにしても、アルカナ。あなたいつの間に髪を染めたの？」

「え？」

アルカナは眉をひそめた。「なんのこと？」

隣のピアキイがクツキーを取ろうとしてやめたのを横目に聞き返すと、当惑したようにハノンは首を傾げた。

「気のせいかしら…あなたの髪、ちよつと緑がかったような、そんな気がして」

そんな馬鹿な。私は髪なんて染めませんよ。その場では一笑したが、その晩ふと気になってアルカナは自室の鏡を覗き込んだ。言われてみれば、自分の平凡な茶髪に、うつすら緑が混ざっているような気がしなくもない。けれど、元からこんな色だったような木もするし、少し違和感を覚えるものの、アルカナは首をひねるばかりだった。髪の色が変わるなんて、そんなことは成長とともにまあることだし、気にすることでもないだろう。アルカナは納得した。

「それにしても緑なんて、まるでエファインの血族みたいね」

自分で言いつつ噴出した。ありえない。実は遠い先祖がエファインの一族だったりして。冗談にもならないことを考えながら、アルカナは久々に自分の部屋を眺め回した。懐かしい部屋だ。嫁入りに必要最低限のものしか持っていかなかったから、箆笥の中の地味な衣装も、机の中の小物もそのまま。アルカナは引き出しを開けた。顔合わせのあと、ピアキイからもらった野花の数々が、ポプリや押し花になって入っている。

そういえば、連日見かけたピアキイのお相手たちはどうしているのだろう。リーゼルの様子を見るに、ピアキイが結婚にともない片っ端から女性を切るなんて殊勝なまねをしているとはとても思えない。そのうち私、後ろから刺されるんじゃないかしら。それこそ冗談ではない。

花の入った箱と、その下にあつた日記帳を取り出すと、アルカナはそれを持って窓際の定位置についた。向かいの宿は、まだ入り口にライトがついていて、夜はことさら繁盛しているらしかった。

アルカナは机の小さな明かりをつけて、ぱらりと日記帳を開いた。日記をつけるのは苦手だ。続いたところで二日に一行書けばいいほうだし、この日記帳も最後まで使い切らずにあきらめてしまった。最後のほうは、ピアキイの連日のお相手について一言添えるだけになっている。ピアキイに淡い恋心を抱いたあの雨の日から、日記帳を開くのが億劫になってしまったから。不思議なものだ。彼の妻となつて、かつての自分の日記を読むなんて。

なんだか開いてはいけない過去を垣間見てしまった気がして、アルカナが日記帳を閉じたところで、部屋の扉がノックされた。アルカナは呆けた。部屋にやってくる人といえばハノンかトリノくらいのものだが、二人のノックの音とは違う気がしたから。

「はい」

そそくさと箱の蓋を閉めて日記帳をその下へ追いやると、返事もな

しに扉が開かれた。ひよつこりと金髪が覗く。夜の中でも彼の髪は輝いているのだから不思議だ。

「ピアキイ様！どうされたのですか、こんな夜分に」

夫婦とはいえ、妻の実家だ。実家帰りしている中で夫婦が共に一夜を過ごすのは、あまりいい顔をされないし、部屋を訪ねるのもまた然りだった。アルカナはぎよつとして立ち上がったが、ピアキイはさして気にするでもなく部屋に乗り込んできた。

「へえ」

ぐるりと部屋を見回して、ピアキイは声を上げた。

「ここがアルカナの部屋か」

「そうですね…あの、あまり見ないでください」

夫に独身の頃の部屋を見られるなんて恥ずかしい。そういう気持ちを外に込めてみたのだが、ピアキイはひとつくすりと笑っただけだった。ずんずん窓際のアルカナの元まで歩み寄ると、目を丸くするアルカナに構いもしないで、彼はアルカナを囲うように窓枠に手をかけた。身をかがめて顔を寄せてくる。

「ピアキイ様！？」

熱に浮かされた様子のピアキイにアルカナは混乱した。酔っているのだろうか？日々の様子を見るに、彼は酒好きというわけでもないが弱くはないはずだし、夕食でもほんのたしなむ程度ワインに口を付けるくらいだった。

しかしアルカナの予想は幸か不幸か外れた。彼は額をこつりとアルカナのそれとあわせると、覗き込むようにアルカナの瞳をじっと見つめた。彼のみかん色の瞳に、アルカナは落ち着かなかった。

「あ、あの？」

ピアキイはそして悠然と微笑んだ。艶やかな笑みだ。どこか満足そうな色さえ感じてアルカナは戸惑った。一体全体、彼は何をしたいのだろう？

「アルカナ」

そしてピアキイはアルカナの名を呼んだ。

「お前という奴は、本当に俺の期待を裏切らないね」  
「はい？」アルカナは目を瞬いた。

ピアキイは、両手でアルカナの頭を抱えて、くしゃりと髪の毛をゆるく握った。そういえば、部屋に入ったときに結っていた髪を下ろしたのだ。夫の前だというのに：アルカナは途端に気恥ずかしくなつて視線をさまよわせた。

「私、ピアキイ様になにかしましたか？」

「さあ？」

くすくす笑つてピアキイはアルカナの髪を弄った。

「ハイネント卿に釘を刺されたよ」

「お父様に？」

「俺に娘は差し上げたから、俺がお前をどう扱おうと何も言うわけにはいかないが、できれば幸せにしてやってくれると嬉しいってさ」

「父がそんなことを？」

能天気な父だと思つていたが、たまには父親らしいことも言うのではないか。アルカナは眉尻を下げた。娘としては嬉しい言葉だけれど、父もまた肝の据わったことをする。本来なら、世界王の甥だなんて身分違いもいいところ、アルカナがどう扱われようと文句のひとつも言う術などないというのに。

幸せねえ、アルカナは首を傾げた。自分はピアキイの元に嫁いで、幸せになれるのだろうか。存外穏やかな日々を送っていたから忘れそうになるけれど、ピアキイがアルカナを幸せにしてくれる人間だとは思えなかった。ピアキイのことは好きだが、そう、もちろん恋しているが、それは危険なものに身を焦がしてしまうような、ある意味抜け出せない火遊びにも似ている。どうあがいてもいい結果にはならないくせに、それでも抗いきれずに首を突っ込んでしまうのだ。

アルカナの心中などお見通しだとしても言うように、ピアキイはくすりと笑うとアルカナの髪に口付けた。彼の麗しいみかん色の瞳が、上目遣いにいたずらっぽくアルカナを射抜く。彼の瞳にはなにか魔術でもかかっているのではなからうか。アルカナは怯えすら感じながら思った。まるでいとしいものでも見るようにうつとりとアルカナに流し目を送るものだから、勘違いしてしまいそうだ。

「お前は俺のものだよ、アルカナ。この髪の毛一本でさえもね」  
甘い甘い蜜を注ぐみたいに、ピアキイはアルカナの耳元でささやいた。恥ずかしすぎてピアキイの言葉などまるで意味を成していなかった。

やっぱりこの男は危険だ。

アルカナは目の前の夫に魅せられながら思った。このお綺麗な姿の内側には、どす黒い何かが潜んでいるのだ。彼の両親のことも、不老不死のこともその一端なのだろう。このピアキイ・ケルト・エフラインという男は、まだまだアルカナには計り知れないなにかを隠し持っているに違いない。

くらくらしているアルカナに追い討ちをかけるように、ピアキイはアルカナの口を自分のそれでふさいだ。しかしアルカナがぎくりとして抵抗するより先に、あつと言う間すら与えられずに彼はくちびるを離すと、ちらりと箱の下から覗いている日記帳を見て去っていった。先ほどのまでの艶めいた表情などどこへやら、去り際は涼やかな夫を啞然として見送って、アルカナは椅子に崩れ落ちた。

「な、なんなのよお」

アルカナは情けない声を上げて机に突っ伏した。とにかく分かるのは…もともと彼には尋常でないなにかがあるけれど…それを差し引いても、最近の彼はどこかおかしいということだ。

a c t . 1 6    ハイネントの館（後書き）

この世界では一年間は365日ですが10ヶ月しかありません（一ヶ月が40日くらい）。ので、アルカナが結婚してから大体半年ぐらい経ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5287o/>

---

しらゆり

2011年8月7日04時41分発行